
神嫁英雄物語【改訂版】

南文堂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神嫁英雄物語【改訂版】

【Nコード】

N9305U

【作者名】

南文堂

【あらすじ】

ある世界の神が花嫁として、異なる世界より一人の人間を召喚した。

その人間に他の神々がそのお祝いにと祝福した。しかし、あまりに祝福されたすぎたためその人間は神をも超える力を手に入れてしまった。

そのおかげで、その世界の神は少女を花嫁として呼び寄せることができなくなってしまう。こうして、少女は何も知らされないまま、その世界を彷徨うことになるのであった。

（神の花嫁英雄物語の改訂版）

第一話 召喚された花嫁（前書き）

この話は、『神の花嫁英雄物語』から神パートを抜いた改訂版です。内容は変わりありません。すでに改訂前のものを読まれた方は、読み飛ばされても問題はありません。

第一話 召喚された花嫁

あるところに一人の少女がいた。

少女はその世界の神が花嫁として、異なる世界より召喚した人間であった。

他の神々はそのお祝いに少女を祝福した。

ある神は、美しい容姿を。

ある神は、強い力を。

ある神は、なんびとも傷つけることのできない強い身体を。

ある神は、無限の生命力と魔力を。

ある神は、全ての言語を理解する知識を。

様々な神が少女を祝福した。しかし、あまりに祝福された少女は神をも超える存在となってしまった。

そのおかげで、その世界の神は少女を花嫁として呼び寄せることができなくなった。

こうして、少女は何も知らされないまま、その世界を彷徨うことになった。

シュリルマンタの森は、今から二百年ほど前に活躍した“大地の勇者”が、魔王に占拠されたサルタノ城へと向かう際に通ったことで有名であった。

彼の英雄譚で、この森のくだりは見せ場の一つである。

語り部たちは、シュリルマンタの森の勇者一行の苦難を熱っぽく

聴衆たちに語って聞かせた。そのおかげで、この森の名前を知らぬものを近隣諸国で見つけるのは難しいほど有名な森となった。

しかし、この森に実際に踏み入ったものは、この森の名前を知らないものを見つけるよりも難しい。シュリルマンタの森——それは今でも、“大地の勇者”の英雄譚が語るとおりの魔物が巢食う、死の香りに満ちた森なのである。

シュリルマンタの森は、緯度もやや高く、大陸でも北よりに位置するため、年間の平均気温は低いが、近くにある火山の影響か地面の温度が高めになっている。そのため、周囲の森とは異なった独特の植生をしている。

一例を挙げると、葉っぱから甘い香りを放ち、生き物の平衡感覚を狂わす毒草のラビリングラス。極上の絨毯のような肌触りで、持ち帰れば金と同じ重さで交換できるという苔のルグモス。見た目は何の変哲もないツタだが、そのツタの汁に強烈な麻薬作用のあるピエスデなど。ここでしか見ることでできない植物に溢れていた。

このようにシュリルマンタの森は珍しい植物にあふれ、貴重な薬や道具の材料の宝庫であった。本来なら人々はこの森の恩恵に与ろうと押し寄せているところである。

しかし、先にも述べたように、この森は魔物たちが支配する、人類にとっては暗黒領域なのであった。

腕自慢のかんりの手練であったとしても、生還するにはそれなりの覚悟と装備が必要である。そのため、好事家の貴族に採取したものを売りつけて一攫千金を目指す山師か、名を売りたい怖いもの知らずの傭兵か、研究で一発あてたい行き詰った魔術師か神官ぐらいしか、この森を訪れる者はいない。

そんな森の中心とっていい場所に、紫の光沢をもつルグモスの苔に覆われた岩があった。

大きさはちよつとした家の敷地ぐらいある大きな岩で、人為的に切り出されたかのように上面が平らで滑らかである。

岩の上空は、四方の木々がせり出してきて、天蓋のようになって

いた。その天蓋の木々の葉から零れた日差しがほどよく岩の上に光を落としている。まさに自然が作り出した奇蹟のベッドであった。

この光景だけ見れば、ここが魔物が徘徊するシュリルマンタの森とは誰も思わないだろう。

そして、そのベッドの上に一人、身体を丸めて心地よい静かな寝息を立てて眠っている少女がいた。

少女は身体に合わない大きなジャケットのようなものを羽織り、足の先まで隠れるほど裾の長いズボンを穿いていた。足の先辺りには少女のものにしては大きすぎる靴や、学生が持っているような何の変哲もない手提げカバンなども転がっていた。

少女が着るには奇妙な服であり、格好であったが、彼女を見た人間がいたとすれば、そんなことは些細なことと、まったく気にしなかっただろう。

紫色の苔の上、短く切りそろえた少女の金髪は、木漏れ日を受けて虹色の光彩を放っていた。やや上気して赤みをさした頬は柔らかく、静かに寝息を漏らす半ば開いた口が愛らしい。天然の寝台に眠る少女は、その場を一枚の絵画に変えるほどの存在感があった。

誰かがここを訪れ、このまま、この穏やかな寝顔をずっと眺めていることを望んだところで、誰も責めはしなかっただろう。しかし、彼女が生きている限り、それはかなわぬ願いであった。

「……んっ」

軽く痙攣してから甘い吐息を漏らし、少女はゆっくりと目を覚ました。エメラルドとサファイアを溶かして混ぜたような瞳が瞼の覆いから姿を現した。まるで宝石箱を開いたかのような錯覚をおぼえるほど、その瞳は澄んで華やかであった。

少女は気だるそうに上半身だけ身体を起こし、軽く伸びをすると、その魅力的な寝ぼけ眼でゆっくりと周囲を見渡した。左右と上に首をめぐらせてから小首をかしげ、ぼんやりと何かを考え出した。

「あれ？　僕、なんでこんなところで寝てるんだろう？」

少し甘い、少女らしい高く澄んだ声で、のどかな雰囲気すら漂い

そんな調子で呟いた。

しかし、その呟きに答えるものは誰もいない。ただ、森のどこから名も知らぬ鳥や獣のものだろう、不気味な鳴き声が木の葉の擦れ合う音に混じって聞こえてくるだけであった。

彼女の意識がだんだんと覚醒するにしたがって、状況の不明さを理解しはじめた。さらに見た目は穏やかな午後の森ではあったが、その森が発する独特な空気を本能が察知しはじめた。

「だ、誰かいらないの！」

沸き起こる不安と恐怖を振り払い、状況を打開しようと大声を出した。しかし、その声は虚しく森に吸い込まれていくだけであった。「ねえ、誰かいるんでしょ！ 返事してよ！」

どれほど叫んでみても結果は変わらなかった。

少女は泣きそうになってはいたが、なんとか涙がこぼれるのは踏みとどまった。泣いてしまったら、全てが終わってしまう。そんな気がして、必死で堪えていたのだ。

しかし、そうしたところで不安が消えるわけではない。逆に自我と意識を保ち続けているために余計な想像が頭をめぐり、不安と恐怖に拍車をかけていた。

少女は思考の迷路に迷い込み、自分の影にもおびえる恐慌の罠へと陥っていた。

そこへ一陣の風が木の葉を大きく揺らした。

少女にはそれで十分であった。

いっばいにまで引き絞った弓につがえた矢を放つがごとく、少女はわけもわからず、天然のベッドから飛び降り、一目散に森の中へと駆け込んだ。

元々、少女には大きすぎたズボンやその下の下着は、岩の上から飛び降りまでの段階でずれ落ちて脱げてしまった。しかし、少女はそれを気にすることなく走り続けた。

下半身丸出しになるところだったが、大きな目のシャツがなんとかミニのワンピースのようになってるのがせめてもの救いである。

しかし、網の目のように露出した木の根。足首まで埋まる腐葉土。角ばった石が転がる地面。裸足の少女には過酷な獣道以下の森の中を駆けた。そんな道を走ったために、衣服はあつという間にボロボロになってしまった。

ジャケットは袖が木の枝に引っかかって取れてしまった。中に着ている白いシャツも、袖がかぎ裂きに破れてしまっていた。白かった色は泥と樹液で濁った茶色に染まっている。もう、元の形や色を想像するのがかなり困難なほどであった。

しかし、少女はそんな事にはお構いなしの無我夢中であった。

「あそこにいたら死ぬ」

その考えに根拠も何もない。恐怖の生み出した幻影の強迫観念としかいいようのない理由に突き動かされていた。足の裏に食い込む石などものともせずに少女は走り続けた。

少女は知らなかった。

自分が、この世界の神に彼の花嫁として別の世界から向かえられた人間であったことを。

少女は気付いていなかった。

召喚される時に色々な神々が彼女を祝福したため、自分が神をも超えるほど無敵の存在になってしまったことを。

しかし、それは少女のせいではない。なんの説明もヒントもなく、それらを気付けという方が無理な話であった。

少女は気が付いていないにしても、神々の祝福をフルコースの満漢全席で受けた身である。そんな彼女を傷つけるのは、どれほど鋭利に尖った石でも不可能であった。

それでも、石が足の裏に刺さろうとする刺激は感じることはできる。しかし、今の少女にはその刺激すら感じる余裕もなかった。

いくつもの沢を渡った。少女の身長は何倍もある崖を何度も飛び降りた。山のような岩を一気に駆け上がった。落ち着いて考えれば、それだけでも少女の標準的身体能力を大幅に超えていたのだが、彼女にはその落ち着いて考える余裕もなく、必死であったため、どこ

をどう走っているか気にもしていなかったし、憶えてもいなかった。もはや、天然のベッドがどこにあったのかわからない。

少女は不意に走るスピードを緩めた。

走って息が切れたわけではない。何度もうが、神々の祝福を腐るほど受けた彼女が、半刻ばかり道なき道を走っただけで切れてしまうような、貧相なスタミナしかないわけがない。十分に走ったことで、少しだけ頭が落ち着きを取り戻し始めていたのであった。

「落ち着け。落ち着くんだ、僕。よく考えろ。どうして僕はこんなところにいるんだ？ よく思い出せ、僕。ここはどこなんだ？」

少女は走っていた惰性のまま、立ち止まらず歩きながら自分に言い聞かせた。立ち止まれば、また不安に心が支配される気がして、身体を動かし続けた。

そして、ゆっくりと落ち着いて、ここに来る前のことを思い出そうとした。しかし、あの天然のベッドで目を覚ます前の記憶はまったく蘇ってこない。

「まだ混乱しているんだ。そうだ。きっと、そうだ」

思い出すことに集中するため、少女はいつのまにか目を閉じて歩いていた。

「落ち着けば、思い出すに違いない――」

少女は不意に何かにぶつかり、記憶の糸を辿る作業は中断された。彼女は思考が中断されたことを恨めしげに思いつつ目を開けた。

「！」

人間、本気で恐怖を感じると悲鳴も出ない。今、まさに少女はその状態であった。ここで彼女が腰を抜かさなかったことは賞嘆に値する。

少女がぶつかったのは自分の身長の数倍ほどある極彩色の蛾のようなものであった。しかも、その巨大蛾は地面に広がる赤黒い色のスーパをそのストローのような口で吸い込んでいた。スーパから漂う匂いと色、その向こうに転がる動物らしき後ろ足が一本。それだけで、そのスーパの元が何であったのかはすぐに想像がついた。もっ

とも、どうやってスープになったかは想像もできなかったが、それは些細なことである。

少女は木の葉が擦れ合った音など曖昧な理由ではなく、こんどこそ真正銘の恐怖によって、その場を力いっぱい逃げた出した。

少女自身、あの場面を見て、逃げることを思いつき、それを行動に移すことができた自分の勇気を褒めてやりたい気分であった。だが、状況はその勇氣に免じてくれるほど勇氣はない。

巨大蛾は食事を邪魔されたことに腹を立てたのか、新たな獲物に喜んでいるのか、どちらにせよ、何かを引っかいたような嫌な音を立てながら少女を追いかけてきた。

少女は走った。二本の足で転びそうになりながらも一步でも前に、半歩でも巨大蛾から遠くに離れるために。

一方、巨大蛾はその立派な翅で飛ぶことなく、六本の足で少女を追いかけた。狭い森の中ではその巨体は飛ぶのが無理なのだろう。しかし、飛ばなくても巨大蛾は少女よりも長い足があり、一步のライドが大きく十分に足は速かった。そして、焦りのために足元のおぼつかない少女との距離を徐々に詰めてきた。

少女との距離が十分に詰まったと思ったのだろう。巨大蛾がいつも獲物をしとめる手順を始めた。翅を広げ、勢いをつけて獲物である少女に向かって翅を扇いだ。

巨大蛾はこうして翅についた鱗粉を飛ばすのである。

鱗粉は極小の弾丸となり獲物をミンチどころかスープにする。広範囲にわたる密度の高い攻撃であるため、避けることは難しいし、防ぐには全身が隠れる強力な盾が必要になる。

巨大蛾の必殺の攻撃であった。

鱗粉が羽ばたきとともに翅から撃ち出され、少女の周囲を蹂躪した。木の幹を削り、地面の石を弾き飛ばした。これで、少女は液体に変わっているはずであった。

「?!」

巨大蛾は混乱した。

一撃必殺の攻撃を受けてなお、少女は何事もなかったように走り続けているのである。その攻撃の餌食になったのは、彼女の着てる服の後ろ半分が塵に変えられただけであつた。

後ろ半分が塵に変わったため、かろうじて少女の身体を隠していた服が脱げてしまい、一糸まとわぬ生まれたままの姿になってしまった。だが、今の少女にとってはそれに気がつく余裕はなく走り続けていた。

神々の祝福のおかげで防御力も桁外れとなっている少女にとって、巨大蛾の攻撃は足の裏に食い込む小石とさほど変わらないダメージしかない。

少女は巨大蛾に背中を向けて逃げるのに必死であつたため、その攻撃をされたことすら気が付いていなかったぐらいである。

それはともかく、巨大蛾は混乱していた。鱗粉攻撃が通用しない相手など今まで出合つたことがない。生物的には自分の必殺技が通用しない難敵にこれ以上、関わることはしないのが正解である。しかし、この森の食物連鎖で上位に位置する種族としての矜持があつたのか、巨大蛾は少女に拘つた。

巨大蛾は鱗粉攻撃の余波で倒した木々を乗り越えて少女を追いかけた。

鱗粉が攻撃するのに十分な量貯まるのを待つて、もう一度、本当に通用しないのか試そうとしていた。

少女はそんなことは知らずに、とにかく走り続けた。気持ちが先走りすぎているのか、思うほど速く走れていない。それで焦りを感じ、また気持ちちが先走る。悪循環に陥っていた。

もし、少女が自分の力を正しく理解し、自分を信じて走っていれば、巨大蛾など軽く振り切っていただろう。しかし、少女は自分を何の変哲も無い、無力なただの人間と思つているため、無意識に力がセーブされて、十分に実力を発揮することはできずにいた。

「わっ！」

もつれる寸前で保てていた足の運びが、地面に転がつていた少し

大きな石に邪魔された。

普通なら、ちょっとつまずいたぐらいのバランス修正はわけないことだったが、少女は悪循環の不良債権が返済不能なまでに溜まってしまっていた。

一瞬、身体が宙に浮くと、その後は盛大に地面を転がった。しばらく転がった後、尻餅をついたような恰好で巨大蛾と対面することになった。

「あつ、あ……」

少女は急いで立ち上がろうとしたが、恐怖で足が震えて言うことを聞かない。これまで走り続けられたことが少女にとって奇跡であった。だが、足の震えを止めて再び走り出すには、勇気という燃料が圧倒的に不足していた。

巨大蛾は好機とばかりに距離を詰めて、必殺の一撃をお見舞いするために翅を広げた。

少女には巨大蛾が何をするつもりかわからなかったが、必殺の気配は十分に感じ取れた。

「な、なんで、僕がこんな目に遭わなくちゃいけないんだよ！僕は普通の高校生なんだぞ。邪眼でもないし、暗黒騎士でも、二重人格でもないんだぞ！蛾のくせに！蛾のくせに！」

支離滅裂なことを口走りながら、地面に転がる小石をいくつか無造作につかみ取った。そして、目をつむって巨大蛾に投げつけた。少女にとってみれば、敵わぬまでも精一杯、必死の抵抗のつもりだった。

少女の投げつけた小石は、文字通り、目をつむって投げても当たるぐらい大きい巨大蛾の翅を見事に貫いた。孔の開いた翅はそこを基点に裂けて、無残にかき裂きになった。

これには少女も巨大蛾も驚き、両方の動きが止まった。

「小石を投げつけたただけなのに……。そうか！大きいといっても所詮、蛾なんだ。翅は薄くて弱いんだな」

少女は一人合点が行くと震える足に活を入れた。反撃が利いたと

いうことで沸いた勇気を総動員して、なんとか震えを抑えて、もう一度逃げ出した。

ちなみに、巨大蛾の翅は小石を投げつけた程度で撃ち抜かれるようなヤワなものではない。

凶悪な攻撃に使われる硬い鱗粉に覆われている翅である。そこいらの人間が鋼でできた剣で思いっきり突いたとしても、はじき返されて傷一つ付けられないほどの代物である。

その丈夫な翅を、半分腰が抜けた状態で投げた小石で撃ち抜けたのは、何度も言うが、少女のふざけるほど高い攻撃力ゆえであった。少女がもし、自分の攻撃力と防御力を正しく理解していたのなら、巨大蛾など羽虫以下の存在で恐怖の対象など絶対になっていない。

今や、神々が束でかかったとしても彼女を殺すのは、人が神を殺す時以上の奇跡を願わねばならない。正真正銘、史上最強の存在なのである。

その史上最強の少女は巨大蛾がもう追ってこないことを確認して、やっと一息ついていた。

「助かった……」

しかし、その呟きは数秒早かった。

少し先の藪の中から一頭の獣が姿を現した。

「っ！」

獣の身体は、猫科の大型肉食獣のようにしなやかで、力強そうであった。だが、それよりも目を引いたのは、その頭である。頭がある場所にはイソギンチャクの触手のようなものが大量にうねっていた。よく見れば、その触手一つ一つが蛇の頭で、赤い舌をチロチロと出していた。

少女は恐怖というより不気味さで気を失いそうになった。

「もう、だめだ……僕は死ぬんだ……」

異形の獣を前にして、勇気も奇跡も品切れと、全てを諦め、その場にへたり込もうとした。

「おっと。諦めるのはまだ早いですよ」

へたり込もうとする少女を誰かが抱えるように支えた。少女は声も出ず、目を丸くして支えた人物を見上げた。

その人物は、薄緑色の円筒型の帽子をかぶり、帽子と同じ色の貫頭衣のローブをまとった黒髪の青年であった。少女には見覚えのない服装だが、雰囲気から聖職者らしいことは感じ取れた。

彼は彼女を支えている逆の手に持った、『巾』という字のような形状をした杖を振り、蛇頭の獣を牽制するように向けた。獣は新手の登場に少し警戒をしながら、飛び掛る隙を探しつつ、四肢に力を溜めていた。

青年は、少女の視線を感じて、黒い瞳をほんの少し彼女に向けた。そのまなざしは若干の緊張感を漂わせていたが、優しげで安心できる微笑を含んでいる。しかし、それも一瞬だけで、すぐに青年は獣に神経を集中した。

「間合いはぎりぎりですね。申し訳ありませんが、手加減抜きで行きます」

目測で距離を測り、無数の鎌首をもたげた獣に向かって謝罪のような宣戦布告を行うと、軽く息を整えた。

「天にまします我らが主よ。主の忠実なる子の窮地を救い給え。

空に満ち足る主の愛よ。その普遍なる愛により生かされし我ら。

その愛を受け入れながらも他に愛を与えることも忘れしものあり。

愛無き事の虚しさをその者に知らしめ給え――」

經典の詩を読むかのような朗々とした彼の声が森に響いた。しかし、青年が何をしたいにしても、その間、獣がおとなしく待っていない。彼が詩の朗読を終えた時には、もう既に獣は彼らの目の前にいた。無数の蛇が大きな口をあけ、生臭い息を感じられるほどであった。少女は、もう駄目だと目をつぶり身を硬くした。

「ギュガス！」

しかし、青年が詩の最後の言葉を発すると、彼の持つ杖の先からそよ風が沸き立ち、そよ風は一瞬で暴風になった。蛇の牙が今にも

彼の皮膚に刺さろうかというほどの距離にいた獣は、その暴風に吹き飛ばされて地面に転がった。

少女は髪をなびかす風を感じて薄目を開けると、獣は十歩ほど離れたところまで吹き飛ばされて、その周囲だけが暴風の吹き荒れる嵐になっていているのが見て取れた。

やがて嵐が収まり、獣はよろめきながらも身を起こそうとしたが、その途端、全身から血を噴出した。そして、そのままその場に崩れ落ちて動かなくなった。

少女は事の成り行きが理解できずに、目を丸くしていた。

「あの、これは……」

「風の刃が切り裂いたのですよ。それよりも、さあ、急いでこの場所を離れましょう。血の匂いで他の魔物がやってこないうちに」

青年は説明もそこそこに少女の手を引いて走り始めた。彼女はもっと聞きたい事があったが、今ここだという必要はないと黙って彼に引っ張られるまま走った。

ずいぶんと走っていると森の植物が徐々に変わって、先ほどまでは感じなかった寒さが肌に感じるようになってきた。

「そろそろ、いいでしょう」

青年は走る速度を落として、呼吸を整えるとゆっくりと足を止め、少女の手を離した。

「あ、あの、ありがとうございます。助けてくれて」

少女は先ずはお礼を言わなければならないと、彼に頭を下げた。

彼はにっこり頬笑み、背負っていた袋を降ろし、その中から毛布を取り出して少女の身体に掛けた。かすかな温かみがある毛布に少女は心の芯から温かさがにじみ出て涙が出そうになった。

「困っている人を助けるのは私の仕事ですからね。主の愛に感謝を」
青年は人差し指と中指で自分の額に触れて、そのまま手を胸まで下ろし、手を広げて胸に押し当てた。

少女ははじめて見る動きだが、彼の宗教でのお辞儀なのだろうと理解し、見様見真似で同じようにしてみせた。それを見て、彼は穏

やかに嬉しそうな笑みを浮かべた。

「ですが、感心しませんね。あんな危険な森に一人でいるなんて。連れの人はぐれたのですか？ 私がいなければ死んでいましたよ。あの森はあなたのような年端もいかない子供がくるところではありませんよ」

彼ははじめて険しい表情を見せたが、それすらも慈悲の心がにじみ出ている、怖さを感じれなかった。彼は聖職者として適性のある性格をしているが、ある意味、そのありすぎる適性が逆に欠点とも言えた。

「違うんです。僕が目を覚ましたときには、もうあの森に一人でいて……。どうして、あそこにいたのか思い出せないんです。あの……ここはどこなんです？」

「気づいたら……ですか」

青年は少し考え込んだ。それから、少女をじっくりと観察した。（どこかの少数民族の娘のようですが、服を着ていないのでわかりませんね。かなり辺境なのか、あまり世間を知らないのでしょうか。我らが神への祈りの作法もごちない。

いけにえにされたにしては身なりが貧相です。そういう場合は彼らの神への貢物として飾り立てるものですが……。

となると、口減らしに森に捨てられたのか……。でも、それにしては育ちすぎていますね。これぐらいの歳なら労働力として役に立つでしょう。それに、捨てるにしても器量がこれほどよいのだから、普通は売るでしょう。第一、血色も肉付きもよくて栄養不足には見えません。

それに、ただの口減らしのためだけにわざわざ危険な森に近づくのは効率が悪いですし、何か特別な理由があるようですね）

「あの……」

黙りこんでいる彼に不安になって少女が恐る恐る声をかけた。

「ああ、すいません。私は考え込むと周りが見えなくなるようで、悪い癖です」

青年は少女の呼びかけではっとして、自嘲するように苦笑を浮かべた。

「いえ……、あの、それで、ここはどこなんですか？」

「ここはシュリルマンタの森ですよ。でも、安心してください。もう、その森の危険領域は出てはいますから。シュリルマンタ——“大地の勇者”が魔王を倒す時に通った森という方がわかりやすいですかね？」

「シュリルマンタ？ 大地の勇者？ 魔王？ ……あの、ここは日本ではないんですか？ なんていう国なんですか？」

少女はとも青年と話が通じていないと首をひねって質問を重ねた。

「ニホン？ いや、シュリルマンタの森は、先ほど話した“大地の勇者”が興したノズングランド王国の領土とされています。ニホンというのは君の部族の名前なのかな？」

青年の方も少女と同様に少し怪訝な顔した。辺境の部族であったとしても、このあたりで「シュリルマンタ」や「大地の勇者」を知らないのはいぶかしむに十分な理由であった。

「日本を知らない……：そういえば、世界では意外と日本を知らない人も多いつて習ったつけ……でも、ノズングランド王国ってどこだよ？ ……地理は苦手なんだよなあ」

少女は独り言を言いながら頭をひねってみた。だが、全世界の国を全て記憶しているわけでもないので思い出すのは早々に諦めた。というよりも、別のことを思い出して、その作業が無駄なことかもしれないと思い始めていた。

「あの、もう一つ聞いてもいいかな？ さっきの、あの蛇の頭がうじゃうじゃしたやつなだけど——」

「ネクイオンですか？ 百頭獅子ともいいますね。頭が一つでも生きていますと動くので、心臓を止めるか手足を切って動けなくするかしないといけない危険な魔物です」

青年は少女が尋ねようとしていることが見えず、少し小首をかし

げた。

「その、ネクイオンをやっつけた、あれなんだけど。あれって、もしかして魔法？ ……あの、もしかして、そういう兵器かもしれないけど魔法みたいに見えたから。魔法なんて幼稚なことと言って馬鹿とか思うかもしれないけど……」

少女は慎重に言葉を選びつつ青年に問いかけた。

「幼稚も馬鹿も何も、魔法ですよ。間違いなく。ああいうことができる武器もありますが、それはかなり希少な宝物級ですよ」

青年は自分が魔法を使えることが予想外に見えたのかと思ひ少し苦笑いを浮かべた。

「やっぱり……。じゃあ、ここは地球じゃないんだ……。なんで僕が……僕はただの高校生なんだぞ！　なんで、漫画やアニメの主人公みたいに、こんなところに放り出されなきゃいけないんだよ」

少女は掛けられた毛布がずり落ちるのをそのままに、がつくりと地面に膝をつき、大地に手を付いた。嘆きの叫びは最後には泣き声に変わっていた。青年は彼女に毛布を掛けなおしてあげると、彼女が泣くのを何も言わずに優しく見守っていた。

「落ち着きましたか？」

少女の嗚咽が収まり森が静けさを取り戻すと青年が優しく彼女の肩に手を置いた。

「ううっ。ごめんなさい……僕……」

彼は、何か言おうとするが言葉の出ない彼女の頭を軽くなでてあげた。

「君の身の上には同情します。ひどいことをされたものですね。しかし、こうして生きて森を出られたのです。主のお恵みに感謝して、前向きに生きるのが君に残された道だと思いますよ」

青年は彼女の身に何が起こったか正確にはわからなかったが、彼女が自らの意思でここにいるわけでないことだけはわかった。

「でも、僕……この世界のこと、何も知らないし……。一人でなん

て生きていけないよ」

ローブにすがりつき、おびえた小動物のような、エメラルドサファイア色の瞳を彼に向けた。そのあまりの憐憫の情を誘う目に青年は魅了されそうになった。

「っ……」

危うく、聖職者たる自分を忘れ、少女を抱きしめてしまいたいそうになった。だが、気づかれぬように歯を食いしばり呼吸を整えて、なんとかそれは回避した。衝動を抑えられたのは、これまでの修行のおかげといえよう。

「ねえ、どうしよう？」

そこへ追い討ちがやってきた。すがりつく際に彼女の短い金髪のが揺れ、芳醇な香りが漂ってきているように彼は感じた。

このまま少女にすがられると、修行で鍛えた精神力でも確実に負けてしまうと青年は内心冷や汗をかいた。とはいえ、このまま少女を放置するのは宗教者というよりも人道的に許されることではない。「そ、そうですね。確かに、人は一人で生きてはいけません。私がお世話になっている村がもう少し先にあります。そこで厄介になるのはどうでしょう？ 私が君に生きていくに最低限必要な一般常識は教えて差し上げれると思います」

青年の提案に少女は明るい顔を浮かべ、嬉し涙を浮かべて再び泣き始めた。

「あ……ありがとう。僕、僕……」

青年は少女の柔らかな金髪の頭をなでながら、嬉し泣きする姿もいとおしく感じてしまっていた。

（主に特別に愛された人間がいたとするならば、彼女のような存在かもしれない。彼女の喜怒哀楽にこちらの心が揺らいで仕方ない）そう考えて首を振って苦笑した。神の愛は何人にも平等であるのが彼の宗派の教えである。神の寵愛などあったなら、彼は神を恨むことになる。

とはいえ、これ以上、心を揺さぶられるのは堪らないと、服の袖

で彼女の涙を拭いてあげた。

「さあさあ、もう泣くのはおよしなさい。かわいい顔が台無しですよ」

「うん……そうする……」

そういつて泣き止もうとした少女は突然、硬直した。青年は突然硬直した少女に怪訝な表情を浮かべていると、彼女がさび付いた口ポットのようになぐしゃくした動きで彼をゆっくりと見上げた。

「カワイイ、カオ？」

「ええ。とてもかわいらしいお顔ですよ」

微笑と共に発せられた彼の言葉に彼女はそこから飛びのいた。

「どうかしたのですか？ 突然に」

何があったのかと、青年は周囲を見渡した。魔物などが近づいていれば、少女よりも早く察知する自信もあるし、少女が生理的に怖がりそうな蛇や昆虫の類も特には見当たらない。

しかし、少女が飛びのいた原因は彼の予想外のものではあった。

「どうもこうも！ ぼ、僕の身体が目当てなんだな？ お稚児さんなんて、昔のお寺の話だと思ってたけど……。最初からそのつもりだったんだ。だまされた！」

毛布の前を合わせて身体を隠し、腰を引いてにじり下がりながらも威嚇するネコのように青年を睨みつけた。

「何のことを言っているのかわかりませんが、それは誤解ですよ。確かに私の宗派では恋愛も結婚も禁止はしておりますが、君のような年端も行かない女の子に手を出すのは宗派以前に人道的に許されることではありませんよ」

青年は先ほど湧き上がりかけた感情を悟られたのかと内心、驚きながらも、真剣に少女の懸念を否定した。

「女の子？ 僕が？ どんな目をしているんだ？ 僕が女の子に見えるか？ 僕は男だ」

しかし、少女の威嚇は収まるどころか、ますますひどくなった。「確かに、年端の行かない女の子に欲情する外道がいますし、その

ように性別を偽るのも有効な自衛手段とは思いますが……。申し訳ないですが、出会った時に決定的な証拠を見ているので」

彼は少し気恥ずかしそうに、ちよつとだけ視線を彼女の股間に向けた。今は毛布を羽織っているが、青年と出会った時は巨大蛾の攻撃で服は塵に変わり、丸裸同然であった。見るなというのが難しい。「まずは森から出て、安全なところまで行き着くのが最も優先すべきことでしたので」

すまなそうに謝る青年など無視して、少女は身体を隠している毛布を露出狂のように大きく開き、自分の股間を凝視した。

「ない。ないっ。ない！ 僕の、僕の――っ！」

それから少女は地面を必死に見渡し何かを探しはじめた。そして、探しているものが無いことがわかった、そのまま気を失ってしまった。

第二話 エミリア

ぱちぱちと木がはぜる音が暗い森の中に吸い込まれて消えていく。こずえが揺れて葉の擦れる音に混じり、獣たちの遠吠えが聞こえていた。夜の森は何もなくとも人を不安にさせる要素を多分に含んでいた。だから人間は火を灯す。その明るさと暖かさは人間の不安は少し和らがせ、かすかな平穏をもたらしてくれるから。

少女が目覚めたのは、すっかり日が暮れて夜になってからのことであつた。

「あ……」

目を覚まして少女が一番最初に確認したのは、自分の身体であつた。ただし、確認したのは貞操ではなく、性別の方である。

そして、気絶する前の出来事が夢でなかったことを確認すると、盛大にため息をついた。

そこで初めて、自分の身体を包んでいるものが、青年の着ていたローブであることに気が付いた。

「目が覚めましたか？ 突然気を失うから驚きましたよ」

青年は少女に金属製のコップを手渡した。中には湯気の立つ甘い香りがする飲み物が入っている。少女は小さな声でお礼を言うところれにゆっくり口をつけた。

少し熱かったが、とろみとほんのりとした甘みのあるそれは、少女の気持ちと思考に安らぎをもたらした。

「おいしい」

素直な言葉と同時に彼女のおなかの虫が盛大な鳴いた。何か言い訳しようとしたが、恥ずかしさが先に出て、思わず顔を伏せてしまった。その様子を青年はくすくすと笑いながらも、腰にぶら下げた袋を一つ外した。

「携帯食料ぐらいいきありませんが、無いよりはマシでしょう」
青年が渡した袋の中には、乾燥した豆と干し肉のかけらが入って

いた。飲み物の時より小さな声でお礼を言うと豆と干し肉をあつという間に袋から胃袋に移し変えた。

「さて、おながが落ち着いたところで、先ほど気絶する前に気になることを言っていましたね? 『僕は男だ』とか」

青年にそれを言われて、少女は気絶する前に青年を疑っていたことを思い出した。そんな相手の差し出すものを無警戒で口にしてしまったことに、はっとなった。

「まだ、お疑いですか? 服は着せましたが、それ以上は何もしてないことでわかっていただけると嬉しいのですが」

青年は少女の表情で何を思ったか気が付き苦笑を浮かべた。少女も何かするのなら、気絶している間にしているだろうと思い、警戒するのを止めにした。そうすると、急に彼に対する無礼の数々が思い出されて、恥ずかしくなった。

「なんだか、助けてもらって、その上、親切にしてもらったのに失礼なこと言って、ごめんなさい」

非を認めてすぐに頭を下げる少女に、青年は少し嬉しそうに穏やかな笑みを浮かべた。

「わかっていただけて、ありがとうございます。それで、話を戻しますが、君は男だったのですか? 」

「うん……信じてくれないかもしれないけど、僕は男だったんだ。この世界で目が覚める前のことは憶えていないけど、確かに僕は男だった。それは確信があるんだ。でも、こっちの世界に来て、女の子にされちゃったみたいなんだ」

諦観というよりも、どこか他人事のように遠い目をした。異世界に来てしまったことだけでも重大事件なのに、性別まで変わってしまったことで、自分の中で状況の現実味が薄れてしまっているようだった。

「こっちの世界? 」

しかし、青年の方は少女の言葉にさらに不可解なものが混じっていることに引かかった。

「これも信じてくれないかもしれないけど、僕はこの世界の人間じゃないんだ。僕がいた世界じゃあ、魔法なんて漫画かアニメーおとぎ話の中だけのもので、本当に使える人はいなかったから。お兄さんが特別な人で世界で数少ない一人ってわけじゃないんでしょ？」少女の言葉に青年は「ええ」と頷いた。少女はそれを少し寂しそうに微笑んで受け止めると話を続けた。

「どうして僕がこっちの世界に来たのかわからないし、帰る方法なんてなおさらわからない。記憶が無いから、調べるきっかけもない……まあ、こんなこと、信じられるわけが無いけどね」

言っている自分自身も信じられないようなことを、他人が信じるわけないと苦笑を浮かべた。

だいたい、別世界から来たというのに言葉が通じている段階でおかしいと思うだろうと少女は思っていた。少女自身、日本語を話しているつもりだが、それがなぜだか通じている。少女も最初は気が動転していたので気が付かなかったが、落ち着いてみれば奇妙なことである。

少女は一瞬、それを弁明しようかと思ったが、相手にしてみれば、彼女の言葉など疑えばどこまでも怪しいものであるから、言うのをやめた。

青年はしばらく少女を見つめてから、ゆっくりと目を閉じた。少女は「やっぱり、信じてもらえなかったか」と心の中で落胆してため息を漏らした。そのため息に、少女は自分が信じてもらえるかもしれないと、わずかな希望を持っていたことに気が付き、そんな自分に少し驚いていた。

一人で百面相している少女をよそに、青年はゆっくりと目を開いた。

「わかりました。信じましょう」

「そうだよな。普通、こんな話を聞いて誰だって信じるよな。僕だって信じ……はっ？ 信じる？」

少女は青年の発した予想外の言葉に一瞬、その言葉を正確に理解

できずに混乱した。

「はい。君の言葉を信じます」

しかし、もう一度、はっきりと断言された。そんなことをされては、言葉を正確に理解するしかない。

「嘘だろ？　こんな与太話を信じるなんて、正気じゃないよ！」

青年の言葉に少女はどうしていいかわからず、立ち上がって怒鳴り声を上げた。その彼女を彼は静かな視線で少し見上げた。

「にわかに信じがたいことばかりですが、君が嘘をついているようには見えません。それなら、君の話は本当なのだろうということです。こう見えても人を見る目はあるんですよ、私は」

邪気のない笑顔を浮かべられ、少女の方は毒気を抜かれて、へたり込むように浮かした腰を落として座り込んだ。

「……ありがとう。信じてくれるって言うだけでも、気が楽になったよ」

何か憑き物が落ちたように自然な笑顔で少女はお礼を言うと、コップに残っていたすっかり冷めてしまった飲み物を飲み干した。

「それは何よりです。そういえば、自己紹介がまだでしたよね。私はゴルディ。ロトク教という宗教の神官をしています。ロトク教と言うのは、この大陸——エウレ大陸で一番信者の多い宗教で、多くの国の王様も信者なのですよ」

ほんの少し自慢げに胸を張るゴルディに、少女はおかしみを感じて笑いかみ殺した。そして、自分も自己紹介しようと少し姿勢を正した。

「僕は……」

彼女はそういいかけて、固まってしまった。何度か、同じように自分の名前を言おうとしては固まり、しまいに頭を抱え始めた。

しばらく黙って見ていたゴルディが軽くため息をついた。

「名前も忘れてしまっているんですね？」

「えっ……どうして？」

少女は自分の身の上に降りかかったことを言い当てたゴルディに

驚きと疑いの目を向けた。

「やはりそうですか。先ほどの話の中で、目を覚ます前のこと、その寸前のことも憶えていないと言っておられたので、もしやと思っ
ていましたか」

「そうだった。僕は記憶喪失にもなったんだった」

ゴルディに指摘され、少女は自分の身の上に起きていたことを思い出した。そして、彼女は身体を少し後ろに倒し手について、空を見上げた。

「異世界に来て、女の子になって、記憶を失って……神様がいるのなら、僕はただ嫌われているんだろうね」

神様がいるかもしれない空は何も答えず、降ってくるかのような輝きをする星々が瞬くだけであった。

「それでも生きています。主の愛に感謝を」

ゴルディは祈りを捧げた。それを見て、少女は自分の発言を思い出してバツが悪そうに頭をかいた。

「ごめん。神官さんの前で神様に向かって愚痴を言うなんて、どうかしてた」

「いえ、そのぐらいで怒るほど私が崇める主は狭量ではありませんよ。確かに、あなたの境遇を考えれば、愚痴の一つも言いたくなるのは仕方ありません。それを聞くのも神官の務めです。あなたに幸福が訪れることを主にお願いするためにも」

ゴルディは首を振って、もう一度彼女のために祈りを捧げた。

「ありがとう。でも、もう伝わっているかもね。こうして、助けてもらっているんだから」

少女は落ち着いた口調で、にっこりと微笑まで浮かべていた。ゴルディはそれを少し意外そうな顔をして受け止めた。

「どうかしたの？」

その表情に気が付いて、少女は首をかしげた。

「いえ。てっきり、またパニックになってしまおうかと思っていましたが、意外に平気ですね」

「もうここまで来ると、いちいちパニックになるのも馬鹿らしくなってきたよ。どうせ、記憶があったところで、元の世界に戻る方法なんてわからないだろうし。名前まで忘れちゃったぐらい記憶喪失なら、いつそすがすがしいよ」

乾いた笑いを浮かべてゴルディに答えていたが、そうでもない心が壊れそうだからであろうことは容易に感じ取れた。

「そうですね。記憶喪失というのであれば、そのうちに何かのきっかけで思い出すかもしれませんね。――ですが、困りましたね」

ゴルディは腕を組んで難しい顔をした。少女は自分の記憶がないことで何が困るのかわからず、怪訝な表情をした。

「なにが困るの？　僕がいた世界の事を聞きたかった？　それなら憶えていることはあるから教えてあげれるよ」

「それも興味はありますが、違います」

「え？　じゃあ、なに？」

少女は何かまだ厄介なことがあるのかと不安で眉間にしわを寄せた。

「名前が無いのでは何かと不便ですからね」

にっこり笑って答えるゴルディに少女は「なーんだ」という顔をした。

「じゃあ、ゴルディさんが僕の名前付けてよ。こっちの名前なんて僕は知らないし」

「名付け親になれとは、簡単に言いますね」

少女の気軽なお願いにゴルディはまた少し困った顔になった。

「僕の世界では、お坊さん――神官みたいな人に名付け親を頼むことがあるよ。こっちではないの？」

「いえ、よくあります。あるのですが、苦手なのですよ」

ゴルディは苦笑してから、空を見上げてしばらく考えていた。そして、ポツリと呟くように一つの名前を口にした。

「エミリア――はいかがですか？」

その名前を口にするゴルディの目は、どことなく寂しげで懐かし

げであつた。

「エミリア？　なんだか、外国の女の子の名前みたいだな」

ゴルディの表情に少しドキリとした少女は、照れ隠しをするようにそっぽを向いて悪態をついた。

「あなたは男ですが、今は女の子なんですから支障は無いでしょう。ですが、気に入りませんか？」

少し不安そうで悲しそうな顔をするゴルディに、少女はあわてて首を振った。

「いや。エミリア。うん。いい名前だ。ありがとう。気に入ったよ」
どのみち、名前は女の子の名前になるのは仕方ないことであつた。そして、どんな名前もしっかりこないのはわかつていた。

「そうですか。それは良かった。エミリアは私の妹の名前なんです」
少しほっとした顔をする彼に対して、少女は微妙な表情を浮かべた。

「妹？　同じ名前付けて、ゴルディさん、シスコン？」

「しすこん？　何のことかわかりませんが、同じ名前でも大丈夫ですよ。私の妹は随分と前に死んでしまいましたから」

ゴルディは何かを隠すようにまた空を見上げた。

「あ……ごめんなさい」

予想外の答えに少女は不用意にからかったことを恥じてうつむいた。

「謝る必要はありませんよ。あなたは知らなかったのだし、私も女の子の名前で思いつくのが他に無かったのですから。もっとも、私の妹は君のように美人ではありませんでしたがね」

空を見上げていた視線を戻して、少女に明るく慰めるように話した。彼女は、慰められるのが逆だと思って、少し自己嫌悪になった。そして、その慰めに少しでも応えるために気恥ずかしいが、笑顔で顔を上げた。

「それは妹さんに失礼だよ。僕なんかよりもエミリアという名前がぴったりの女の子だったと思うよ、僕は」

「ありがとう。妹も天国で自慢していると思うよ」
少女は黙ってうなずくと、森は静寂を取り戻し、焚き木のはぜる音とともに上がる火の粉が高い夜空へと昇っていった。

第三話 それは平穏な日々

カペル村は街道には面しているが、それほど交通量の多い街道ではないために訪れてくる人はそれほど多くなかった。それでも生活必需品を売りに来て、作物の買い付けにくる馴染みの行商人がいる。作物と言っても、カペル村の農地は森を開拓したものがほとんどで、さほど広くも肥沃でもない。なので採れる作物量などはたかが知れており、税の支払い分を引けば村民でほとんど消費してしまい、あまり売る分はない。しかし、森で採れる薬草などを求めに行商人がやってきてくれるのであった。

そういう意味ではカペル村は恵まれているといえる。カペル村と同じような規模の村では、行商人が来ないことも珍しくない。そういった村では、村人の何人かが代表して村の作物を荷車に積んで街まで売りにいき、その売り上げで生活必需品を買い込んで帰ってくるのであった。

そして、この日は、カペル村に月に一度の行商人がやってくる日であった。そのため、村の一番大きな広場には人が集まり、ちょっとしたお祭りのようになっていた。

エミリアは、行商人が来るのを見るのは二度目だが、普段は静かな村がこれほどまでに賑わうのが不思議に思えて、あたりをキョロキョロしていた。

彼女は、浅黄色をした長袖の膝丈ワンピースを着て、その下には藍染のスボンをはいていた。このあたりの伝統的な女性の民族衣装で、ほとんどの村の女性はエミリアとほぼ同じ格好をしていた。

ワンピースはふちの丸い大きな襟がついていて、その襟にはこのあたりに伝わる魔よけの聖印が刺繍してあった。

腰の辺り、両サイドには大きなポケットがついていて、ポケットに施してあるアップリケは一人ひとり違っており、それが女性たちのおしゃれのしどころであった。そのポケットにはボタンが付いて

おり、ワンピースに縫い付けてある輪になった組み紐をボタンにかけて、ポケットの中身が外に出ないようすることができた。

このあたりの慣わしで、女性は意中の男性に、この組み紐を渡して、愛の告白をするのだという。男性はそれを受ける場合、その組み紐を受け取り、自分の襟を止めている紐を代わりに渡す。男性側が告白する場合は、この逆なのだという。

「まあ、僕には関係のない話だけどね」

エミリアはこの風習を教えられ、そう思った。それもそのはず、身体は少女になったとはいえ、心は男の自分が男性と結婚するなど考えただけで身の毛がよだつことであった。

「エミリアおねえちゃあんだあ！」

エミリアよりも小さな子供が何人かエミリアの姿を見つけて彼女の方に駆け寄ってきた。

「こんにちは」

エミリアは少し中腰になって、子供たちに笑顔で挨拶した。普段は家の仕事を手伝っている子供たちも、行商人が来るこの日は仕事も少ないために遊べるとあってテンションが高かった。

「遊ぼうよ、お姉ちゃん！」

子供たちに手を引っ張られ、エミリアは困った笑顔を浮かべた。村に来てから、なぜか子供たちに慕われて、見かけるたびに寄って来てはじゃれつかれるのであった。

「お姉ちゃん、用事があるから、また後でね」

「スキ有りっ」

エミリアが子供たちに遊びの誘いを断っていると、突然、背後から声がした。そして、ワンピースのスカートがめくり上げる音がその声に続いた。

エミリアは慌てて、後ろに手を回し、めくれ上がったスカートの裾を押さえた。下にズボンをはいているとはいえ、スカートをめくられるのはやはり恥ずかしい。きっ、と睨みを利かせて後ろを振り返った。

「こらっ！ ベネット君！ 悪戯したら駄目でしょ！」

「へへん。ズボンなんて見られても別に恥ずかしくないじゃん」

振り返った先には、エミリアと同じぐらいの年恰好の、癖の強い亜麻色の短い髪をした腕白そうな男の子が、悪戯成功を自慢するように胸を張っていた。

「ベネットおにいちちゃん、これで、僕らも団員にしてくれるの？」

「まあ、考えておいてやる」

エミリアに駆け寄ってきていた子供たちは、その男の子のそばに集まって、彼の服を引っ張っていた。

子供たちはどうやら、囧だったようだという事を知り、エミリアはよくも八、九歳でこうも悪知恵が回るものだと感じた。

「ところで、団員って？」

「ベネット騎士団さ。カペル村を悪い魔物から守る正義の騎士団なんだぞ。でも、お前は女だから入れてやらないけどな」

少年は偉そうにエミリアに教えた。彼女は自分が小さい頃にしただろう、ヒーローごっこをぼんやりと思い出して、ほほえましく顔が緩んだ。

「あ！ ウソだと思ってバカにしてるな！」

「ううん。そんなことないよ。僕は弱いから、強いベネット君に守ってもらおうよ」

エミリアは少年の頭を優しく撫でてあげた。

「こ、子ども扱いするな！ 俺は、大きくなったら、勇者の験しを成功させて、勇者になるぐらい強いんだぞ」

少年は顔を真っ赤にして論理の筋道も何もない子供らしい反論をした。

「ごめんごめん。それじゃあ、僕は団員じゃないから、もう行くね。ベス婆さんを待たすと怖いから」

エミリアは脇に置いておいた背負子を背負った。子供たちも「ベス婆さん」の名前が出て、びくっと硬直した。少女は目論見どおりとにっこり微笑んで、「じゃあね、またあとで遊んであげるね」と

ベス婆が待っているところへと急いだ。

「遅くなってすいません」

エミリアは広場の真ん中にいる黒いローブを着て、曲がった杖を持った老女のところへと行くと頭を下げた。老女は、その下げたエミリアの頭を曲がった杖で軽く叩いた。

「こりゃ、エミリア。年寄りをいつまで待たせるんじゃ、馬鹿者が」もう一度、コツンと頭を叩かれた。エミリアは頭を押さえながら呻いた。

この老女は、ベス婆と呼ばれているカペル村に住む薬師で、知識が豊富で腕がよいために近隣の村からも彼女の薬を求めにやってくるものも多い。村に来ている行商人も半分は彼女の薬が目当てといっても過言ではなかった。

「いい歳をして一人で行商人に物も売れないなんて情けない。ゴルデイも過保護すぎだよ、まったく」

ベス婆はぶつぶつ文句を言いながらも、エミリアに付き添って行商人のところにエミリアを連れて行った。口が悪くても親切な老女に少女は思わず、かわいいと思い、微笑を浮かべて、彼女の後を追った。

行商人は口ひげを豊かに蓄えた壮年の男性で、さほど背は高くはないががちりとした体格であった。商人がよく着るゆったりとした服の上からも筋肉質であることが窺える。

ベス婆とエミリアが行ったとき、ちょうど商談が終わったところだった。

「繁盛してるようだね、デニス」

「おかげさまで。でも、良心的な商売なんで、儲けはほとんどないですよ」

行商人がベス婆に丁寧にお辞儀をした。そして、隣にいるエミリアを見つけ、中腰になりながら人のよさそうな笑顔を浮かべた。

「お孫さんですか？」

「わしに似て美人じゃが、孫じゃないよ。この娘も薬師を目指して

いるようだな、この娘の作った生薬を買って欲しいそうじゃ」

エミリアは人見知りして、少し逃げ腰になっていた。その腰をベス婆の杖で叩かれ、行商人の前に歩み出た。

「お嬢ちゃんがかい？」

行商人は年端の行かない子供が作った生薬と聞いて、嘲笑に似た笑みを浮かべた。

生薬というのは、下処理した薬草のことである。薬草の効力を生かすも殺すも下処理次第であった。薬草は、摘んでくれればいいだけのものもあつたが、多くは色々な下処理をしてはじめて薬の原料となる。間違つた処理をすれば、毒になることもあつた。逆にうまく処理ができていると、効力がよく良質な薬を作ることができた。

「はい。ぼ……わたし、エミリアって言います。お願いします」

エミリアは行商人に深々とお辞儀した。彼もベス婆の紹介では商品を見ないわけにも行かず、彼女の持ってきた生薬を受け取って品定めを始めた。

生薬はカペル村周辺で採れるものを原料としたものばかりで、行商人もよく知っている生薬ばかりである。いつもしているように、乾燥して粉末になっている生薬をあらかじめ汲んでいたコップの水で戻してみたり、少量を口に含んだり、匂いをかいだりして、品質チェックを行うと、行商人は眉間にしわを寄せて唸り始めた。

「何か、ダメでしたか？」

不安そうに聞くエミリアに行商人は真面目な顔をしてエミリアを見た。

「これは本当にお嬢ちゃんが下処理したのかい？」

行商人は、少しごつごつした手で乾燥させて粉末にした生薬を一つまみ持ち上げ、手のひらの上に乗せた。

「は、はいっ。そうです。僕がやりました」

エミリアは緊張して、自分のことを「わたし」とネコを被らずに行商人に答えた。

彼女はここに来てから薬草の採取や下処理の仕方をゴルディに習

っており、今日持ってきているのは彼女が自分で作った生薬であった。もちろん、ゴルディの検品を受けて合格が出たものであったが、交渉などはじめてのことでカチコチになっていた。

「小さいのにしっかりした仕事だ。買わせて貰うよ」

行商人はエミリアの緊張をほぐすような笑顔を見せると、生薬を秤で量り始めた。

「あ、ありがとうございます」

エミリアは腰が直角になるぐらい頭を下げた。頭を下げながら、ほっとすると、嬉しさで踊りだしそうなほどだった。彼女自身、前の世界でどんな生活をしていたかはつきり思い出せないが、自分が作った何かを人に売った経験はなかっただろう。彼女の気分は舞い上がっていた。

「こりゃ、エミリア。ちゃんと量っているところを見ておかんか。重さをごまかされるぞ」

舞い上がっているエミリアの頭をベス婆が杖でこつんと叩いた。

「ベス婆さん、俺はそんなケチな商売はしないって」

行商人は苦笑を浮かべて錘を見せた。表面が綺麗に磨かれた円筒状の錘には、壺と鍵が組み合わさった紋章が刻まれていた。木製の秤の方にも錘と同じ紋章が焼印されており、横には数字の焼印が捺してあった。

いつの時代も度量衡は税を正しく徴収をするためには定める必要があり、国家の基盤のひとつでもある。なので、秤と錘も国が管理していた。もともと、管理はその国の豪商たちが集まって作った『富商会』という組合に委託されていることがほとんどであった。

ノズングランド王国もその例に漏れず、ノズングランド王国富商会が管理しているため、錘と秤にはその会紋章がついていた。

ともあれ、国が認定する秤を持たない商人は信用は皆無で商売ができない。その偽物や勝手に改造したものを使えば当然、重罪である。しかも、定期的に検査して再認定しなければならぬことになっている。なので、改造すれば再認定されないし、改造がばれれば、

投獄されてしまう。

再認定前に秤を買い直せばいいが、再認定の焼印は商人の信用にもなっているの、焼印のない秤は「白秤」と呼ばれて、信用が薄く大きな商売ができない。秤が壊れてしまった場合は、壊れた秤を持って行き、新しい秤にそれまでの焼印を押してもらうこともできたが、審査が厳しいので大変なことであった。そのため、商人は自分の命よりも秤と錘を大事にするとよく揶揄されていた。

ただ、どれだけ厳しい法律や取締りがあっても、儲けのために焼印すらも偽造した偽秤を使う商人も少なくなかった。

「騙されるやつが愚か者っていうのが商人じゃろ」

ベス婆は物語に出てくる悪い魔女のような風貌でニヤニヤと行商人を苛めた。

「勘弁してくださいよ。そう言われてますけど、騙して銅貨を儲けても帰りに金貨を落とすというのもあるんですから」

行商人はエミリアの持ってきた生薬を量り終わって、算木を繰って買い取り値段を計算した。

「これでどうだい？」

エミリアは行商人が差し出した算木を乗せている板を覗き込むと、ゴルデイに言われていた金額よりも少し多かった。多い分には文句もないと、エミリアは取引に応じるという意味の紐を算木の上に置いた。

「ほほう。知らん間に生薬の価格が上がったんじゃない。これはわしの時が楽しみじゃ」

ベス婆が算木を覗き込んで、ニヤニヤして行商人を見た。見られた方はその視線を逃れるように顔を背けた。

「そうなんですか？」

「先行投資ですよ。ベス婆さんも古い先短いですし、薬師は貴重ですからね」

行商人もやられっぱなしではないと軽口をやり返した。

「言いおるわい。どうせ、若い娘にいいところを見せようと無理を

しているんじゃない。ご苦労なこった」

「若いといっても、若すぎますよ。ウチの娘より小さい子に色目なんて使いますか。第三王子じゃあるまいし」

ベス婆の言葉に反論しつつ、行商人は肩をすくめて苦笑を浮かべた。

「それもそうじゃな。しかし、第三王子は相変わらずなのかえ？」

「ええ、貴族さんたちは隠しているつもりでしょうが、市中で知らないものはいませんよ。この間も一人犠牲になったらしく、しかも、親衛隊の隊員の妹だったそうですよ……」

ベス婆は眉をしかめ、行商人も声のトーンを落とした。

「エミリアも気をつけるんだよ。世の中どんな変態がいるかわからんからの」

そう言って、ベス婆は、エミリアの頭をなでた。彼女はなんともいえない複雑な笑みでそれに応えた。

（そういえば、異世界にきたことがインパクトでかすぎたせいで、小さすぎて自分が女の子だって事、ちょっと忘れてた。でも、こっちの世界にもそういう趣味の人間がいるんだ……気をつけないとな。この身体で襲われたら、絶対逃げれないよ。男と、だなんて考えただけで気持ち悪いのに、レイプなんて自殺もんだよ）

エミリアは自分の立場を心の中で再認識して、少し身震いした。これから一人で生きていくとなれば、そういう防御も身に付けていかねばならない。

「女の子は大変なんだな」

自分が女性であることを気を重くしているエミリアを他所に、ベス婆は行商人からまだ色々と近辺の情報を聞いていた。村の相談役である彼女は色々と情報を知っておく必要がある。行商人との世間話は彼女の立派な仕事の一つであった。

エミリアもしばらくは話を聞いていたが、前提とするこの世界の知識が不足しているので、大半が何の話をしているのか理解できない。仕方なく、並べられた商品から買う物を選び始めた。

最初にレンガのようなブロックが目に入った。行商人の商品の中で一番人気の岩塩である。人気の理由はおいしいからではなく、必需品だからである。

「塩は買っておかないとね。来月までは持たないし」

塩は彼女が元いた世界ほど安くなく、貴重品の部類に入っていた。料理に使う時に塩をノミで削るのを見て、驚いたことを思い出して苦笑を浮かべた。

コショウなどの香辛料は貴重品であり、庶民を相手にする行商人は取り扱わない。金と同じ重さとまでは行かないまでも、銀と同じ重さぐらいで取引されるものである。庶民が買えるはずもなかった。岩塩の隣には、ハーブの束が積んであった。ハーブは高価な香辛料の代わりにされていた。

「あれ？ このハーブ、初めて見た」

エミリアはハーブの束の中に、バネのような蔓がたくさんついた一風変わったハーブを見つけて手に取った。

「スプリン草かい？ もう、そんな季節なんだねえ。それは煮込むと少し癖がある匂いがするから、ダメな人はダメだね。でも、ウチの亭主みたいに、はまる人は病みつきさ。この季節になると、スプリン草スプリン草って、うるさくってね」

エミリアに解説してくれた主婦はスプリン草を数束、手にとって行商人に代金を払っていた。

「そうそう。でも、ちよつと日にちの経った肉なんかも臭みが取れるのがあるがたいね」

別の主婦もそのハーブを手に取り、買っていた。エミリアは少し迷ったが、ゴルディが好きかどうかともわからないので、今回はパスして、いつも使っているハーブを何種類か手に取った。

あとは塩漬けされた豚肉や、ゴルディに頼まれていた牛肉の燻製や保存食などを見繕った。最終的に清算すると、薬草の買取額よりも少なかった。

「それじゃあ、これが差額だ。また、頼むよ、お嬢ちゃん」

「はい。こちらこそ」

行商人の男性に満面の笑みで応えた。そして、まだ話を続けているベス婆に深々と頭を下げた。

「ベス婆さん、ありがとうございます」

「今度からは一人でやるんだよ」

ベス婆はそっけなく返事したが、丁寧にお礼を言われるのは嫌な気はしないらしく、笑顔がこぼれていた。

「はい。がんばります」

エミリアは元気に返事すると、行商人から買った荷物を背負った。とはいえ、さすがに小さいサイズだが、樽に入った塩漬けの豚肉などもまとめて抱えて帰ることはできないので、後で村の人に運んでもらう約束をしていた。

「エミリアちゃん。もう帰るのかい？」

荷物を背負う小さな背中に村人の一人が声をかけた。

「はい。ゴルディおじさんが留守の間、ちゃんと家を守らなくちゃダメですから」

エミリアは彼の兄夫婦の忘れ形見ということで村人に紹介されていた。そして、兄夫婦が魔物に襲われ、彼女だけ生き残ったが、そのショックで記憶を失っているとも説明されていた。

カペル村は魔境といわれる魔物の支配する地域に近いせいか、魔物に襲われることもしばしばあった。彼女の境遇は村人たちの同情を得るに十分な説得力を持っていた。

「そうかい？ 一人で村はずれの家にいるのは怖いだろう？ 寂しくなったら、いつでもうちにおいでよ」

世話焼き好きそうな中年女性がエミリアに自分の畑で取れた作物を少しお裾分けして、彼女のかごに入れてやった。

「ありがとうございます。ハンナおばさん」

につこりと笑顔でエミリアがお礼を言うと、中年女性も笑顔でそれに応えた。

「いやだよ、エミリアちゃん。おばさんだなんて、お姉さんだろ？」

「おかみさん。正直者のエミリアちゃんを困らしちゃいけないよ。答えに困ってるじゃないか、かわいそうに」

ハンナをからかうようにたしなめた誰かの声に、村人たちが同意して笑いが起こった。

「今の声はドナルドだね。後で憶えておいでよ。今度、目ん玉ひっくり返るぐらい苦いミートパイを食わしてやるからね」

「うひゃあ、ハンナお姉さまの絶品ミートパイだけが木こり仕事の唯一の楽しみなんです。勘弁してくださいませ」

おどける声に村人たちは再び笑い声をあげた。エミリアも悪いと思いつつもくすくすと笑っていた。

「それじゃあ、僕はこれで」

エミリアは再び荷物を担ぎなおして家路に着こうとしたが、それをまたハンナに呼び止められた。

「エミリアちゃん。荷物置いたら、うちにおいで。留守番もいいけど、子供は遊べる時に遊ぶもんだよ」

「うーん、でも、昨日摘んだ葉草も早く煮込まないといけないし……」

迷っているエミリアを見て、ハンナは働き者の少女に好意的な視線を向けた。

「それじゃあ、それが終わったら、おいで。また料理を教えてあげるよ。これならかまわなだろ？ 夕飯も一緒に食べていきなよ。なあに、ゴルデイさんには書置きしておけばいいさ。それに村を通るから帰ってきたらすぐわかよ」

ハンナはエミリアの不安を察して肝っ玉母さんらしく豪快に笑い飛ばして、彼女の頭を少し乱暴に撫でた。

「はい。じゃあ、お願いします」

「じゃあ、待ってるからね」

エミリアはハンナに夕飯を誘われたことで笑顔になった。彼女は、こちらの世界に来てから自炊をする必要性を迫られたが、料理の知識はほとんどなかった。おそらく、記憶を失う前も調理の経験がほ

とんどなかったのだろう。その上、かまどと薪を使う調理は現代っ子のエミリアにはハードルが高すぎた。

しかも、最近はゴルディがないので、一人での食事であって、味気ない。ハンナの料理は村で一番おいしく、食卓もにぎやかで楽しいので、エミリアには嬉しいお誘いであつた。

「ベネット！　ちょうどいいよ。あんた、エミリアちゃん家に塩漬けの樽と一緒に運んでおやり！」

ハンナは遊んでいたさきほどの悪戯坊主を捕まえて、エミリアの買った塩漬けの豚が入った樽を押し付けた。

「な、なんで俺が運ばなくちゃいけないんだよ、かあちゃん！」

「悪戯したバツだよ。まったく、エミリアちゃんを少しは見習いな」
「俺だって、ちゃんと仕事、手伝ってるだろ！」

ベネットは文句を言いながらも樽を背負子に載せてくりつけると、さつさとエミリアの家に向かう道を歩き始めた。エミリアも急いで彼の後を追った。

「ベネット君、ありがとうね」

「言っただろ、俺はベネット騎士団の団長なんだぞ。困っている人を助けるのも団長の役目なんだよ」

背中越したが、顔が赤いだろうことは想像がつき、エミリアはおかしさをかみ殺しながら彼と二人で家に向かう道を歩いた。

第四話 小さな勇者

本来は排他的な村社会だが、エミリアを快く迎え入れてくれたのはひとえにゴルディの力であった。

彼自身も半年ほど前にこの村にやってきた新参者だが、彼はこのあたりでは名の知れた神官であった。もし、名が知られなくても、神官は医術の知識があり、治癒魔法も使えるエキスパートである。そういった人材は快く村は迎え入れてくれる。

さらに、村の畑を荒らそうとしていた魔物を退治したこともあったので、村では守り神にも匹敵する待遇を受けていた。その彼の身内と紹介されたため、彼女のような素性の知れない娘も快く受け入れてくれたのである。

ゴルディは村はずれの空き家を借りており、そこでエミリアも暮らしていた。借りているといっても、村人たちが寄贈を申し出たのをゴルディが断ったため、名目上は賃貸となっているだけである。支払われている家賃は村長のところでプールされ、食料や衣料品などの形で寄贈品として彼の元に戻ってきていた。彼もそれはわかってはいたが、それまで拒絶するのは逆に失礼とお礼を言って、ありがたく受け取っている。そもそも、旅の神官は土地土地の人々からの寄進で旅を続けるのであるから、それを受け取ってもなんらやましいところは無いのである。

エミリアが来てからは彼女を介して贈り物を贈ってくるようになっていた。村人にとっては今まで以上気安く寄贈できると、彼女の存在をある意味ありがたがっていた。

「お前の家、ちょっと不便だよな。魔物よけの結界の端のほうだし、柵の外だし」

ベネットは何度か背負子を背負いなおして、エミリアの家への道を歩き続けた。ベネットはエミリアと大差ない、十歳ぐらいである。男の子といっても、一抱えある樽を持って運ぶのは重労働であった。

確かに、ゴルディが借りているのは、村はずれにあるため不便で使いにくいので空き家になっていたような家である。

元々は、偏屈な猟師の老人が村の喧騒を嫌って建てて住んでいたらしいが、その老人も何年も前に他界している。それからは誰も住もうとはしなかった。今では伝染病の患者が出たときに隔離する家として使われていたぐらいである。

当然、周囲に他の民家はないから、夜になるとあたりは静寂に包まれる。一応、村に施された魔物よけの結界の中にはあったが、それでもかなり夜は不気味である。

エミリアは、ゴルディがいるときは平気だが、彼が留守にする夜は一人で家にいると、あの森のことを思い出して泣きそうになっていた。いや、実際に時々、泣いていた。

「ごめんね。ゴルディおじさんが借りてる家だから」

エミリアは申し訳なさそうに謝った。彼女としても、もう少し村に近いところにあればいいと思うこともあったが、ゴルディにこの世界のことを教えてもらったり、自分の世界のことを教えたりするので、それを村人に見られるのは都合が悪いと諦めていた。

「いや、別にお前が悪いわけじゃないよ。そういうつもりで言ったわけじゃないし……」

ベネットは謝るエミリアに口をもごもごさせるように小さな声で呟いた。

「ん、どうしたの？」

「何でもねーよ！ 不便だから大変だろってこと。俺の家、家族多いし、かあちゃんも気にしてないから、ゴルディさんがいないときはうちに来ていればいいって言いたかったんだよ！」

ベネットは照れ隠しに怒りながらエミリアに言う、歩く速度を速めた。

「ありがとう。でも、僕は留守番だから、ちゃんと家を守ってなくちゃいけないんだ」

エミリアはベネットの優しさに微笑を浮かべながら答えた。

確かに不便で寂しいと感じていたが、だからと言って、家を留守にするのはなんだか気が引けた。帰ってきた時に「おかえりなさい」と言ってくれる人がいるのといえないのでは大違いという思いもあって、寂しいのを我慢して留守番を続けていた。

「そっか……。なら、仕方ないな。でも、弱虫のエミリアに家が守れるのかよ」

ベネットはエミリアの方を首を回して振り返り、意地悪そうな笑顔を見せた。

「僕だって、留守番ぐらいはできるよ。馬鹿にしないでよね」

弱虫といわれると、エミリアは否定できないが、元は高校三年生男子の意地もあった。十歳ぐらいの子供に馬鹿にされたら、少しは見栄を張っておきたくはなる。

「そんなこと言いながら、一人になったら、風で戸がガタガタいっただけで泣いてるんじゃないのか？」

「そ、そんなことないってば！」

「あー。やっぱり泣いてるな。ほんと、泣き虫だよな、エミリアは」
「うぐう……」

そうこうしている間に二人はエミリアの家に着した。

丸太を組み合わせた切妻屋根のログハウスに、小さなテラスがついている、さほど大きくない家であった。エミリアはテラスの階段を登り、扉を開けた。閉め切っていた分、薬草の匂いが少し立ち込めていた。漂い流れてくる独特の匂いが少し鼻についた。

エミリアは中に入って、換気のために窓を開けた。家の中は間仕切りがなく、寝室も台所も食卓も作業場も一つの部屋になっていた。かろうじて、薬草が保管してある棚だけは日よけの衝立などでさえぎられている程度である。

「薬草臭くてごめんね。樽はそのテラスに置いておいてくれたらいいよ。あとは転がしてでも運べるから」

エミリアは薬草の独特な匂いが子供には人気がないことはよく知っていたので、ベネットに持ってきてくれた荷物をテラスに置くよ

うに指示した。しかし、ベネットはそれを無視して、彼女を押しつけるように家の中に入ってしまった。

「き、気にするなよ。こんな、匂いなんてどうってことねーよ」

明らかに無理しているベネットにエミリアは思わず笑いそうになり、それを必死にこらえていた。

「わ、笑うなよ！」

「ごめん、あんまり、必死だったから」

隠したつもりでもこらえているのがばれて、エミリアは耐え切れずに笑い出してしまった。面目を潰されたベネットは頬を膨らませて、台所においてある同じような樽のところに新しい樽を並べた。

「ありがとう、ベネット。助かったよ」

「これぐらいどうってことねーよ」

さっきの失態を取り戻そうと、仏頂面で朝飯前と答えていたが、さっさとテラスに避難していた。エミリアはそれをほほえましく思いながら荷物を降ろすと、薬草を下処理する作業に取り掛かった。「高く売れたのも嬉しかったけど、いい仕事といわれるのも嬉しかったな。意外に、僕ってこういう仕事に向いてるのかな？」

エミリアは、作業をする時にしているエプロンを身につけながら、行商人とのやり取りを思い出して一人でにやけた。

出かける前に準備していた薬草を鍋に入れて、水瓶からジョッキで水を汲み、鍋に水を張る。乾いた薪を選んでかまどにくべると、火口箱から火打石と、火打ち金という蹄鉄のような形をした金属片を取り出した。同じく火口箱に入っていた山菜の綿毛を集めて作った火のつきやすい火口を円盤状に広げる。そして、それに向かって、火打石と火打ち金をぶつけ、火花を飛ばし、火種を作った。

「よし。これからが本番だ」

火口の火種を消さないように気をつけながら息を吹きかけて少し火を大きくした。薪から剥いだおいた油分の多い木の皮に火を移し、かまどの中の少し細めの薪に慎重に火を移した。

まだ慣れていないときは、慌てて火を大きな薪に移そうとして失

敗し、いくつも火口を消費した苦い経験をして、このごろはずいぶんと火のおこし方も上手くなっていった。

薪に十分火が燃え移ると、太目の薪をくべ、湯気を逃がすための天窓を開けるロープを引いて、杭にロープを結びつけた。あとは薬草をこのまま煮込むだけなので、少し放っておいても大丈夫である。エミリアはそこでやっと一息ついて額の汗を袖で拭った。

積んである薪を見ると、薬草を煮込む分は足りそうだが使い切ってしまうかもしれないと感じた。今日はハンナの家で夕食をいただくが、何かあったとき薪がなくて、夜中に薪割りをするのは全力で遠慮したいと、エミリアは煮込んでいる間に薪を割っておこうと表に出た。

扉を開けると、斧が木を割る音が聞こえてきた。見ると、ベネットが薪割り用の大きな丸太を輪切りにした台に薪を乗せて手斧を振り下ろしていた。

「ベネット君、帰ったんじゃないかったの？」

「帰っても、どうせ手伝いさせられるからな。手伝ってやるよ。こう見えても、鍛えてるから、斧の使い方はうまいんだぜ」

驚くエミリアの方を見もせずに答えると、ベネットは薪割りを続けた。

自慢するだけあって、ベネットの斧使いはなかなかのものである。斧の重さを上手く利用して薪を割っていたし、斧が薪に食い込む瞬間に手首を締めて斧が薪に弾かれないようにしていた。

小気味いい薪を割る音がしばらく木立の間に響いていた。

「おつかれさま。ありがとう、助かったよ」

エミリアはコップに入れた水と手ぬぐいを薪割りの終わったベネットに手渡した。

「これぐらい、どうってことないぜ」

そういいながらも、ベネットは過ぎやすい初夏の手前というのに、ずいぶんと汗をかいて、息も少し切れていた。もっとも、この短時間で数日分の薪を割ったのだから子供には十分すぎる重労働だ

ったが。

「言っただろ？ 俺は大きくなったら、『勇者の験し』を受けて、勇者になるんだって。だから、これぐらい、どうってことない」

強がりとは別に、渡されたコップの水を一気に飲み干し、手ぬぐいで汗を拭いた。エミリアは空のコップを受け取り、おかわりの水を汲んで戻ってきた。

「そうなんだ。でも、さっきも言ってたけど勇者の験しって何？」

エミリアはゴルディから教わったことの中に『勇者の験し』という言葉がなかったので、ベネットに訊いた。ゴルディも全て教えてくれるほど暇ではないし、そんなことは不可能である。多少世間知らずと思われても、エミリアは自分が知らないことは色々と他の人に聞いていかないと駄目だと思っていた。

「なんだ、エミリアは知らないのか？」

ベネットに意外な顔をされて、エミリアは少し「しまった」と後悔した。『勇者の験し』は結構メジャーな知識だったのかと、ごまかす言葉を搜していた。しかし、いいごまかし方が見つからず、素直に訊くことにした。

「うん。知らないんだ。教えてよ、ベネット君」

「仕方ないな。まあ、弱虫のエミリアは関係ないから知らないのも無理はないけどな」

ベネットはエミリアの知らないことを知っていることが少し自慢なのだろう、胸を軽くそらした。

「勇者の験しって言うのはな、勇者の神殿ってところに行つて、試練を受けることなんだぜ。その試練を達成したら、勇者と認められるんだ。あの大地の勇者も、疾風の勇者も、今売り出し中の青の勇者も、みーんな、勇者の験しを成功させて、勇者になったんだぜ」
まるで、自分もその一人かのように自慢した。

「そっか。誰でも勝手に勇者を名乗っちゃったら、勇者だらけになっちゃうもんね」

エミリアはゲームなどでは、勇者は最初から勇者だったことが多

かった記憶があったので、少し意外に感じて感心した。

「勇者の験しも受けないで、勇者なんて名乗ったら、神さまに罰をくらうんだぞ！ 魔物にされちゃうんだぞ。だから、勝手に勇者とか名乗ったら絶対、駄目なんだからな」

エミリアの何気ない言葉にベネットはびっくりした顔で忠告した。エミリアはそれを勇者を騙らせないようにする脅しかと思ったが、自分のいた世界と違うことを思い出し、本当かも知れないと、少し顔を引きつらせた。

「う、うん。気をつけるよ」

人間以外の何かにされるなんて、女の子にされたなどより数億倍悲惨である。そう思うと、女の子であっても、まだ人間であったことに感謝した。

「でも、誰でもなれないんなら、その『勇者の験し』って、すごく危ないんじゃないの？」

エミリアは簡単な試練なら、誰でも彼でも勇者になりに行くような気がした。詐称すると罰があるような称号なら、取得も難しいと普通に想像した。

「そんなの当たり前だろ。勇者なんだぞ。簡単なわけないだろ。だから、鍛えて強くならなくちゃいけないんだ。失敗したら、死んじやうかもしれないし、一回しか勇者の験しは受けれないから、失敗できないんだ」

ベネットは幼いながらも真剣な顔をした。その横顔には、ただ単なる強さへの憧れだけでない、ちゃんとした目指す理由があるようにエミリアには思えた。

「そっか。でも、ベネット君なら、きっと大丈夫だね。今から斧とか訓練してるんだし」

エミリアはなんだか目標に向かって頑張る少年を自分よりも大人びて、そして、かわいく思えて、心の底から応援したくなった。

「ふん！ 当たり前だろ。俺は勇者になって、森の魔物を退治して、村を平和にするんだからな。俺が勇者になったら、エミリアもつい

でに守ってやるよ」

応援されて照れくさくなったのか、つつけんどにベネットはエミリアに言い放った。

「うん。ありがとう。頼りにしてるね」

エミリアは微笑を浮かべて、守ってもらうことを約束すると、腰を上げて煮込んでいる薬草の様子を見に行った。その前に見に来た時でも、薬草の煮込みも十分にできていたので、残るは後始末だけであった。

最後に確認しに来た時に薪を追加しなかったので、かまどの火はほとんど消えていた。残り火に消火用の乾いた砂をかぶせて消した。鍋の中の薬草は木製の大きなフォークに絡めて引き上げて、塩水を入れた壺に移した。これで一晩置いた後に天日に干せば完成である。「煮出した汁は冷ました後に染料の定着液に使えるんだよな。また村の人に取りに来てもらおう」

今日、夕食を作るのなら、この薬鍋を片付けないといけなかったが、ハンナの家で夕食を食べるので、明日の朝、十分に冷めてから桶に移せばいいだろうと判断した。エミリアは一通り仕事が済むとエプロンを外して、ベネットのところに戻った。

「おまたせ」

「……お前、薬師になるのか？ ベス婆ちゃんみたいな」

エミリアの手際のいい作業の様子を覗いていたベネットが彼女に確認するように尋ねた。

「うーん、どうなのかな？ よくわかんないけど、僕に向いてるかもね」

エミリアは、この世界で一人で生きていく方法が他に何かあるのかわからなかったが、この薬師の仕事はそれほど嫌ではなかった。ただ――

「でも、ベス婆さんみたいって言われると、ちょっと……」
いい意味でも悪い意味でもベス婆のようになれないと苦笑を浮かべた。

「あのさ、だったら、エミリアは文字が読めるんだろ？ そしたら、魔法覚えろよ、魔法！」

ベネットは突然、エミリアの手を取って迫ってきた。「魔法」という言葉に、エミリアは少しぴくつと反応した。

「魔法使いになったら、特別に俺の仲間に入れてやってもいいぞ」

「魔法か。使えたらいいよね」

エミリアは苦笑して、ベネットの申し出をやんわりと断った。しかし、子供相手に遠まわしな拒絶が通じるわけは無かった。

「使えるようになるよ。文字の読み書きできるんだろ？ ゴルディさんの親戚だったら、推薦してもらえたら、魔法使いの学校にも入れるだろ？」

ベネットはエミリアの手を強く握って力説した。こちらの世界での魔法使いの学校へ行く最低条件は「文字を読み書きできる」であったため、ベネットが力説するのも無理はなかった。

こちらの世界では文字を読み書きできるのは、かなりの知識階級の人間だけである。都会などでも二割、田舎の村では一割あるかないかぐらいであった。しかも、かろうじて読み書きできるという程度である。なので、エミリアぐらいの歳で読み書きができるとなると、ちよつとした神童扱いされてもおかしくなかった。エミリアも、ゴルディの親戚だからと納得されたようなものである。

エミリアにしてみれば、普通に日本語を書くつもりでも、こちらの文字に変換されて脳裏に浮かんで難なく書いてしまっていた。

「言葉に不自由しないのは助かるけどね。神様も少しは悪いと思って翻訳能力をつけてくれたのかな？」

役に立つけど、微妙な能力にエミリアは何度か苦笑していた。

「俺と冒険するのが、嫌なのかよ！」

エミリアは知らず知らず苦笑をしていたらしく、それを別の意味にとってベネットはむつとした。

「違うよ。僕は弱虫だから、魔物と戦うなんてできないよ。ベネット君みたいに強くないから」

エミリアは、この世界に來たばかりの時に体験した恐怖がよみがえってきて身体が震えた。神々の祝福を満身に受けた彼女があの程度の魔物に殺されることは無いのだが、それを知らない彼女は「ゴルデイがいなかったら死んでいた」と信じて疑っていなかった。

「あ……ごめん。俺……」

ベネットはゴルデイがでっち上げたエミリアの過去を思い出して、バツ悪そうに怒りを収めて握ったエミリアの手を離れた。

「ううん。大丈夫。気にしてないから」

エミリアもベネットが何を思い出したか、感じ取って優しく首を振った。そして、心優しいこの少年は勇者の験しに成功しようと失敗しようと本当の勇者になると感じた。

「そろそろ、ハンナお婆——お姉さんのところに行こう。夕飯の手伝いもしなくっちゃ」

エミリアは天窓など戸締りをする、まだ少し落ち込んでいるベネットを励ますように手を引いて、村に向かった。

第五話 魔法

油皿に浸したこよりの端に火をつけると、小さな明かりが部屋の中をうつすらと照らし出した。元いた世界の照明に慣れていた頃は、エミリアはこの薄暗さが最初はロマンチックに、飽きたら不便に感じていた。しかし、エミリア自身、夜目が利くためか、これもすぐ慣れてしまっていた。

不満を言うにも、油を使って火を灯すことは、この世界では家計に余裕がなければできないことであった。獣脂や油菜などから採れる油は結構、高価な贅沢品のひとつであった。

ハンナの家に招かれたエミリアは普段とはまったく違う食卓に少し圧倒されていた。ハンナの家で夕食をいただくのは初めてではないが、何度呼ばれても圧倒されていた。

ハンナの家族は、彼女の夫、その両親、妹、弟夫婦、ハンナの子共に弟夫婦の子供と、エミリアのいた日本ではなかなか少なくなっている大家族であった。しかし、これはどこの家も普通であり、逆にゴルディとエミリアの二人暮らしの方が珍しいと言っただけであった。大きなテーブルの上には大皿に乗った料理が並べられ、薄明かりの中、湯気を立てていた。そして、周囲の長いすに一応、座っている老若男女は食事への臨戦態勢を整えている。最後まで給仕をしていたハンナも椅子に座った。

「じゃあ、お義父さん。主に感謝の祈りを」

ハンナが一番上座にいる老人に食事前の儀式を促した。

「せっかくじゃし、それはエミリアちゃんにやらしてもらおう」

しかし、老人は隣に座っている少女にその役目を譲った。別に、早く食べるために儀式を譲ったわけではない。一家の長である彼には黙っていても十分な量は回ってくる。

「でも……」

エミリアは戸惑った。それもそのはず。食事前の神への感謝の祈

りは、一家の長が行うものと決まっていた。主人が隠居する時は、「今日から感謝の祈りをまかせる」と告げるぐらい家長を象徴する行事の一つであった。

「なあに、別にエミリアちゃんに家を譲るつもりはないよ。だけど、神官さまがいらっしゃる時は、神官さまに感謝の祈りをしてもらおうじゃろ？ それと同じじゃて」

老人が豪快に笑うと、エミリアの背中を叩いた。ハンナとは血が繋がっていないはずだが、この豪快さはこの家の家風なのだろう。

「じゃあ……」

エミリアは正直、断りたかったが、これ以上、食事が遅れるとせっかくの料理が冷めるので引き受けることにした。それになによりも、食事が遅れて、テーブルを囲む欠食児童たちの目が殺気立ってくるのは、安全な食事をするためにも避けたかった。

エミリアは自分の胸に両手を重ねて当てて、目をつぶった。食卓にいる全員がそれに倣う。

感謝の祈りの文言は、ゴルディが食事のたびに唱えているので、教えてもらわなくても憶えている。こちらでの食事の時には一人の時、ちゃんと礼儀正しく感謝の祈りは行っているので不安もない。少し息を吸い込むと、いつもよりも丁寧に祈りを捧げた。

「天にまします我らが主よ

我ら、主の忠実なる子なり

今日一日、無事平穏に過ごす安息を

そして、今日の糧を与えていただくことを

我ら、主の普遍なる愛に触れた喜びとして

ここに感謝の祈りを捧げます」

エミリアの小さな身体のどこにそれほど肺活量があるのかというほど、朗々とした祈りの言葉が食卓の上を震わした。心地よくも荘厳な祈りに、一瞬、田舎の村の一般家庭の食卓が大神殿の食堂に変わったかのようなであった。

万物の主よ
「ロートク」

エミリアは祈りの結語を唱えた。このあと、本当はすぐに全員でこの結語を復唱して祈りが終わる。しかし、朗詠の余韻が消えても復唱されず、沈黙が続いた。エミリアは文言をどこか間違えたかと不安になり、目を開けようとした。

「ロートク！」

エミリアが目を開けると同時に、家長の老人がやっと結語を復唱して、全員がはっとなったようにばらばらと結語を唱えた。

「ふはははは！ やりおるな、エミリアちゃん」

食事が始まり、老人はジョッキにブドウ酒を注いでもらうと隣のエミリアの背中を叩いた。彼女はいったい何のことかと、きよとなった。

「僕、何か変なことをしました？」

「いんや、珍しいことはしたが、変なことはせなんだよ」

老人はジョッキの酒を飲みながら陽気に笑った。さっき飲み始めたばかりだが、まるで数杯は飲んでいるような陽気さであった。

「ほんとだよ。まさか、神官さんばりに神聖語で感謝の祈りを唱えるなんて思いもよらなかったよ。いつから、うちが大神殿になったのかって、ね」

ハンナは笑いながら、エミリアに料理を取り分けてくれた。本当は自分で確保しなければならぬが、ハンナの家の食事争奪戦は素人では怪我をしかねないので、特別に取り分けてくれた。

「えーと……ごめんなさい」

エミリアにしてみれば、ゴルディが唱えていた通りに唱えていたつもりでいた。彼女の耳にはゴルディの祈りの言葉は普通に喋っている言葉と同じように聞こえていたが、実は違っていたことを、この時、初めて知ったのであった。

自分の翻訳能力が規格外に高いことがわかったが、どうにも微妙だとエミリア自身、また苦笑の種が増えた気がした。

「いや、逆に嬉しいよ。そうそう、神聖語での祈りの言葉なんて聞けないからな。なかなか、荘厳な食事前を体験できたよ」

ハンナの夫が優しく微笑んでエミリアの頭を撫でた。

「ありがとうございます」

エミリアは照れながら、お礼を言った。

しかし、食事前が荘厳でも、食事はいつもと変わらず、賑やかに争奪戦が繰り広げられていた。誰かがおかずを取ったとか、誰かが量が多いとか、ちょっとした戦争である。とてもではないが、ハンナに取り分けてもらわなければ、エミリアは目の前にあるパンすらも食べられない勢いであった。

エミリアはその目の前にあるパンを取り、一口かじった。表面が少し固くて、中の食感もモソモソした、お世辞にもあまりおいしいものではない。しかし、このパンは、こちらの世界ではまだマシな方である。下手すれば、よいパンの部類に入るかもしれない。その証拠に、自分の歯で噛み切れる。まだ焼きあがってから一日ぐらいしか経っていない新鮮なものであった。

日常的に食べているものは、焼きあがってから六日ほど経っていることも珍しくない。そうなると外側の皮の部分はナイフで切らなければならぬほど硬くなる。とても歯で噛み切れるものではなかった。そもそもパンは、スープや水に浸してふやかして食べることが前提の食べ物であった。

それだけではなく、ちゃんと酵母が働かないで膨らまないまま焼かれているのは当たり前。モミ殻や小石など異物が入っているのは当然。日にちが経ってカビが生えているのはごく自然。

品質管理どころか、衛生管理すらも無いに等しい。こちらの世界に來た当初、エミリアは食事がカルチャーショックの連続で苦痛になっていたほどだった。

「でも、人間、慣れるもんだよなー」

食べなければお腹がすく。仕方なく食べているうちに、こちらの世界の味にすぐ慣れてしまった。「慣れる」という単語を思い出して微妙な笑顔を浮かべた。

エミリアは、異世界に來て、異性になって、年齢も下がって、記

憶喪失にもなった。これだけさまざまなことが一度に自分に襲い掛かっているのだが、今ではそれなりに生活している。無論、運がよかったことや、助けがあったこともある。しかし、それを差し引いても自分自身の適応能力がかなり高いらしいと気が付いた。そんな意外な才能を開花させたエミリアとしては嬉しいやら、見つからなくても平穩に過ごせた方がよかったと思うやらであった。

「エミリアちゃん、どうかしたのかい？」

一向に食が進まないエミリアにハンナが心配そうに声をかけてきた。物思いにふけていたのにはとなり、努めて明るい笑顔を浮かべて首を振った。

「なんでもないです。ちょっと、圧倒されてただけだから」

エミリアは騒々しい子供たちの食事の方をちらりと見た。物思いの内容を話せるわけも無いので、騒々しい子供たちをちょうどいい言い訳の材料にした。

「ごめんよ。騒々しくって。この子らは頭の中まで胃袋が詰まっているからね」

ハンナはそういいながらも、子供は元気に食べるのが一番と笑顔であった。

「いえ。こんなにぎやかな食事は久しぶりで楽しいです」

エミリアはそういって、パンの上に野菜と肉をハーブと共に炒めたものを乗せてかぶりついた。肉汁がパンに染み込み、甘みが口に広がった。ハーブの香りが上手く肉の臭みを消している。

「おいしい！」

こちらに来てからというもの、他はともかく、食生活に関してはちょっと辟易していた。だが、ハンナの料理は久々に舌が満足させてくれるものであった。

「そうかい？　ちゃんと、味わって食べてもらえると、うれしいね。もっとお食べ」

ハンナは嬉しそうにスープをよそってくれた。ジャガイモのような芋を蒸して潰したものをミンチを腸詰したウィンナーのようなも

のと一緒にミルクで煮込んだものだが、これもとろみがあって甘くておいしかった。

この時代、基本的に胃袋が膨らめばそれでいいという考え方が一般的な庶民であった。ハンナのように料理に手をかけるのは少数派といえた。しかし、腹が膨れればいいといっても、人間である。食事はおいしい方がいいに決まっている。ハンナの料理は村でも人気があった。

村の主婦たちもハンナに料理を教わったりしていた。そのため、カペル村の食事情はひそかに高いレベルになっており、近隣の村の間では有名になっていた。

余談だが、税の徴収に来る役人をもてなすのも、ハンナの料理が振舞われている。そのおかげで、税の取立てで、少し便宜を図ってくれることも何度かあったぐらいであるから、かなりの料理上手であった。

エミリアは久々に“食事”した気分になり、小さなお腹を一杯に満たした。

「エミリアおねえちゃん、あそぼうよ」

夕食が終わった後、エミリアは今の自分よりも小さい子供たちに囲まれた。エミリアよりも上の子供たちは食事の後片付けなどを手伝っているの、客人で特に仕事の無い彼女のところに集まってくるのはしょうがなかった。それでなくても、エミリアは妙に子供たちに好かれていた。

エミリアは紐を借りて、あやとりを子供たちに教えてた。片づけが終わった子供たちも紐が作る不思議な形に興味を引かれて集まってきた。そして、エミリアは皆に教えて欲しいとせがまれて、臨時のあやとり教室を開くことになっていた。

大人の男たちは粘土を素焼きしたパイプに刻んだタバコを詰めて、火をつけて吸いながら、今年の作物の状況などを話している。ありふれた夕食後の団らん風景であった。

「去年の冬に雨が多かったおかげか、畑は順調に生育してる。ため

池の水も十分だから、よほどのことがない限り、いつもと同じぐら
いはいけそうだ」

「ああ、上手くすれば、少し豊作かもしれんな」

「まあ、そっちはいいが……。なんでも、噂によると、今年は税を
上げてくるかもしれないらしいな」

「ああ、その噂は聞いた。行商人のデニスも間違いないんじゃない
かって言ってたな」

「ここは直領だからマシな方だという話じゃ。莊園は搾取がひどい
らしいから、逃亡民も出るかもしれん。そうになると、また野盜が増
えるのお」

「魔物避けの結界の補修よりも、夏の間には村囲いの柵を補強せんと
いかんかもな」

「村長もできるだけみんなの負担が少なくなるように考えているみ
たいだが、先立つものがなければどうにもな」

「やれやれ。税が上がる上に余計な手間も増えるとは」

「なんでも、第三王子は随分と放蕩で贅沢三昧だそうだ。そのせい
でという噂だ」

「また、あの王子か。第二王子も少し変わり者らしいが、第三王子
に比べれば余計なことをせんだけマシだな」

「それでも、今の王様も、皇太子様も良いお人なのが救いじゃな。
税を上げるのを反対してくれるといいのじゃが」

エミリアはハンナの子供たちの遊び相手をしながら、大人たちの
会話を聞いて、どこの世界もため息の出る話題が横行しているもの
だと世知辛くなった。

そう思って、窓の外を見ると、もうすっかり日が暮れて、煌々と
月が夜空に浮かんでいた。

「あ、そろそろ帰らないと」

エミリアはいつの間にか長居をして遅くなってしまったことに気
が付き、あやとり教室をおしまいにして腰を上げた。

「今晚は泊まっていきなよ。もう、夜は遅いんだし、夜道は危ない

よ」

「そうだよ、エミリアおねえちゃん。泊まっていつてよー」

ハンナと子供たち、主に妹たちに引き止められたが、明日は朝一から今日煮込んだ薬草を干さないといけない。明日の天気が晴れらしいことはわかって、あさつての天気まではわからない。薬草の下処理は天候に左右されるので、「まあ、明日でいいか」が台無しになってしまうことがある。

「今日は月も明るいから大丈夫です。明日の朝の仕事もありますし、家を空けるとゴルディさんが帰ってきたときに驚くから」

エミリアはそういつて、頭を下げて立ち上がった。

「そうかい？　じゃあ、送っていくよ」

ハンナの言葉に男性陣がパイプをやめて腰を浮かしかけた。しかし、エミリアはそれを大げさに両手を振って押し止めた。

「そんな、悪いです。大丈夫ですから。村の中だし、いつもの道だし」

仕事で疲れている彼らをこれ以上働かせるわけには行かないし、くつろぎの時間を邪魔するのが申し訳なく全力で断った。

「それじゃあ、明かりを貸してあげるから、これだけは持つてお行き」

取っ手のついた四角い箱の中にろうそくが入っており、それに火を移した。粗末なランタンだが、エミリアの家までならお釣りが出るほど上出来なものであった。

「ありがとうございます。お借りします」

エミリアは素直に好意を受け取って、ランタンを持ってハンナの家を後にした。

「気をつけて帰るんだよ」

ハンナが本当に心配そうに家の外まで見送りに出てきた。他の子供たちも泊まって行けばいいのという視線をまだ向けていた。

「うん。ごちそうさま。ありがとうございました。それじゃあ、また、明日」

エミリアは明るく手を振って、ハンナたちの心配を吹き払って家路に着いた。

村の家々の間を抜けて、森の中へと入っていく道に差し掛かる。あたりは暗いが、ランタンと月の明かりが足元を十分に照らしてくれている。以前なら、暗くて恐かっただろうが、この身体は意外に夜目が利くことがわかってからは、さほど恐くはなくなっていた。

ふと、月の光に邪魔されて、弱く光る星を見上げてみた。空に彼女が知っている星座はない。月も知っている月と似ているが、表面の模様が違っていた。今見ている月は、大きなひし形の脇に小さな丸が寄り添っているような模様である。

こっちの伝説では、ひし形は神話時代の英雄で、小さい丸はその彼の愛犬だと聞いていた。逃げた魔王を月まで追って、それを滅ぼしたが、魔王の呪いで月から帰れなくなったのだという。

ゴルディの話では、場所によって違う伝説もあると言っていた。しかし、違う伝説でも、エミリアが知っている月とは違う月であることは変わりなかった。

こういうものを見ると、自分が異世界に来たことを改めて認識させられる。

「天の原ふりさけみれば、春日なる三笠の山に出でし月と別物」
自分の身の上を茶化すように古代の和歌をパロディして、「いまいち」と笑ってみた。

そして、頼る当てももちろんいない異世界で、そのまま野垂れ死にしてもおかしくない自分が、今こうして人並みに暮らしている最大の恩人を思い浮かべた。

「ゴルディさん、ここのところ、よく出かけるなあ」

エミリアはポツリと呟いた。それに返事をしてくれる人はもちろんいない。

ゴルディは彼女を保護してから十日を過ぎたところから、彼女がこちらの世界に馴染んできたと感じたのだろう。次第に「用事がありますので」と日帰りによく出かけるようになり、夜遅くに出発した

りすることもあった。ここ最近は泊まりで出かけていた。

今回は少し長く、今日で四日目になる。五日ぐらいで帰ってこれると言っていたので、予定では明日に戻ってくるはずであった。ただ、移動手段が基本、二本の足であるから、予定は未定なこともよくわかっていた。

「でも、いつか、ゴルディさんとも別れて独り立ちしなくちゃいけないんだろうな」

考えると不安になるが、まだこの世界に来てから日が浅いし、身体も幼いので、まだまだ先のような希望的な予想を勝手に自分で信じ込んでいた。そこでふと、自分がこの世界に来てから何日経ったか数えようと思った。

エミリアにはありがたいことに、こちらの世界も月の満ち欠けが基準になっていて、一ヶ月は三十日で、十二ヶ月で一年であった。

ただ、それでは太陽の動きとはずれが生じるので何年かに一度、『聖月』というずれを調整する特別な月が挿入されるとゴルディは説明してくれた。『聖月』は大きなお祭りや税の還付や免除があるので、庶民はその月を楽しみにしているらしい。

「えーと、確か、助けてもらったのは、土の季節の静月の七日だったんだよな。今日は火の季節の動月の十日だから、だいたい一ヶ月か……」

エミリアは感慨深げに呟いた。

一ヶ月も行方不明になっていたら、多分いるだろう両親や友人たちは自分のことを心配しているだろうと思った。だが、その人たちの記憶がないのでどこか他人事のように思えてしまっていた。

「薄情だけど、戻れる見込みが薄いのなら、記憶がなかったのが僕にとって是不幸中の幸いかもな」

自嘲するように笑おうとしたがうまく笑えず、こみ上げてくる寂しさに唇を軽くかんだ。

こちらの世界に来て以来、エミリアは自分の事を必死に思い出そうとしていた。

自分が男であったこと。

日本で生まれ育ったこと。

高校三年生であったこと。

“彼”に関する情報は、結局その三つ以上は思い出せなかった。思い出せるのは自分がいた世界の一般的な知識だけであった。

エミリアは改めて自分のいた世界に帰れないことを痛感し、当初はずいぶん落ち込んだ。しかし、落ち込んでばかりいられない。この世界で生きていかなければならないことを思い出して、この一ヶ月間、ゴルディにこの世界の常識を教えてもらった。おかげで、今の見た目の年相応だが、困ったり、恥ずかしくない程度の常識は知ることができた。

今は薬草をはじめとする薬の知識を主に教えてもらっていた。薬師としての知識があれば、たいていの村で歓迎されるので、今後のことを考えると憶えた方がいいということであった。

「でも、それなら僕に治癒魔法を教えてくれたらいいのに」
独り文句を言って、頬を膨らませた。

何の冗談か、ファンタジーな世界に来てしまったのであるから魔法の一つも使えるようにならなければ割が合わない。というのが彼女の考えであった。

しかし、彼女の願いにゴルディは首を振った。治癒魔法が使えれば重宝されるが、習得するには教団に入信して信者にならないといけない。そして、奉仕活動などして実績を積み、身元を保証するとうちちゃんとした推薦がないと教えてはくれないと、エミリアに説明した。

エミリアは信者になって実績は積めても、身元不明であるため魔法を教えるもらうことは永遠にないということである。

「魔法というのはたとえ治癒の魔法であっても悪用されると大変な力なのです。それを管理するのが国や教団などの役目の一つなのです」

ゴルディはそう言って、エミリアに魔法を覚えることを早々にあ

きらめるよう諭した。異世界出身のエミリアには、正規の魔法使いへの門は完全に閉ざされているのだから、その言葉は正しい。

「でも、そんなことで諦められますかって……ん？」

そう呟いたエミリアの行く手に薄茶色の塊がうずくまっているのを見つけた。暗い夜道でそれを見つけられたのは、エミリア視力のよさがあってこそといえた。

エミリアはすぐに、薄茶色の塊はうちわのような大きな耳を持つ――ウサギのような生き物、ウピッドと気がついた。ウピッドはおとなしい性格の草食動物で、肉食獣などに追われるとその大きな耳を広げて崖などから滑空して逃げる。ちなみに、その肉はなかなか美味で村人のご馳走でもあった。

エミリアは火が消えないように気をつけてランタンを脇に置き、うずくまっているウピッドのそばにしゃがみこんだ。ウピッドは哀願するような視線を彼女に向けてプルプルと震えている。

「大丈夫。ちゃんと治してあげるよ」

エミリアは安心させるように穏やかな声で言いながら、ウピッドの怪我を見た。猟師の罠か何かであろう、後ろ足に深い傷を負っている。罠のかかりが浅かったため逃げることもできたのだろうが、その際に後ろ足の肉を深くえぐられて、かなり出血していた。

家畜を屠殺したり、狩りの獲物を解体するのはこの世界に来てからはすぐ隣の日常であった。エミリアには最初はショックだったが、人間、慣れの生物らしく、今ではそれらも随分と慣れてきていた。それに、ゴルディが村人の治療をする時に手伝うので、大量の血や怪我を見ても少しは平気になっていた。

エミリアは大きく深呼吸を一つして、小さく「よし」と気合を入れるように呟いた。それから、傷ついたウピッドに手をかざし、おもむろに何かを唱え始めた。

「天にまします我らが主よ。主の忠実なる子の窮地を救い給え」

神聖魔法の共通導入部である。何度もゴルディが唱える魔法を見て聞いて、エミリアは憶えてしまったのであった。

「世界に満ち足る主の愛よ。その普遍なる愛により育つ我ら」

ウピッドが元氣な姿を想像した。魔法はイメージが重要なのだと、ゴルディが教えてくれた。魔法は教えなくても、魔法のことを知るのには駄目じゃないはずだと、せがんで教えてもらったのである。

「ここに主の与えたもうた試練に傷つき倒れた主の忠実なる子あり」
緑色のオーラの帯がウピッドの周囲を踊り始めた。イメージが明確になり、彼女の視界では実像と重なり始めた。

「再びその足で立ち上がり主の愛を受け入れる喜びを与え給え——
ファイミ！」

仕上げの発動呪言を声高に唱えた。踊っていた緑色のオーラがウピッドの怪我に向かい収束し、見る見るうちに傷がふさがっていった。

ファイミは初歩の治癒魔法で、怪我した部分の自然治癒力を魔力で爆発的に引き上げて傷を治すものである。初歩とはいえ、日常的な怪我ならばよほど出血していない限り治せる。魔物と戦うような人間たちでなければ、この魔法以上の治癒魔法が必要な場合などかなり限られていた。

傷が治ったウピッドは、自分が何をされたのかわからずにきよとんとしていた。しかし、傷の箇所がわずかに毛皮がはげた状態になっているだけで痛みがなくなったのを知ると、その俊足を生かして地面を蹴って藪の中へとお礼も言わずに飛び込んでいった。

エミリアはそれを満足そうに見送って、立ち上がった。そして、小さくガッツポーズをした。

「やった。十回連続成功。これならゴルディさんも僕に魔法を教えなくっちゃと思うだろう。帰ってきたら見せてやろう。びっくりするだろうな」

地面に置いたランタンを拾い上げながら、驚くゴルディの顔を想像して一人笑みをこぼした。

「教えないとか言っているくせに、僕の前でばんばん魔法を使うんだもん。見て憶えろって言っているようなものだよな」

最初は三回に一回程度の成功率も、イメージを具体的に明確にすれば成功率が上がり、ここ数日の成功率は百パーセントであった。もっとも、もっぱら治癒魔法をかける相手は森で怪我した動物たちであったが。

「これって動物実験になるのかな？　でも、怪我が治るんだからいいよな」

一人で納得すると、もしかするとゴルディが帰ってきているかもしれないと思いながら、木々の向こうに見える月明かりに照らされた自分たちの家へと急いだ。

第六話 もう一人のエミリア

ゴルディは息を弾ませ、法衣をなびかせて走った。多少、走ったところで息が切れるほどやわな鍛え方はしていないが、昼からほぼぶっ通しで走り続けていると、さすがに疲れが顔ににじんできていた。

本来ならば一度休憩してでも疲れを取るべきなのだろうが、その疲れを癒すことより優先することが彼にはあった。

敵に追われているわけではない。その逆である。敵を追っている。正確に言うと、追っている敵を見つけた、である。

「逃がしませんよ。今度こそは決着をつけましょう」

ゴルディは疲労で休憩を求めてくる身体を叱咤するように呟き、走り続けることを選択した。

彼には妹がいた。過去形である。現在、彼には妹だけではなく、両親や近しい親戚すらもない天涯孤独であった。

彼が住んでいた街は、大きくはないが寂れてもいない、ごく平凡な地方都市であった。彼の家はその街で穀物を扱う商いをしており、少し裕福な暮らしをしていた。父親はお金にうるさい商人ではあったが、彼の前では良き父親であり、母親も厳しくはあったが優しくもあった。彼ら兄妹は幸せに育てられていた。そして、若きゴルディもいずれは父の後を継いで穀物商になるつもりでいた。あの日までは。

「エミリア……」

ゴルディは思わず妹の名を口にした。一ヶ月前にシュリルマンタの森で助けた少女に付けた名前。ちょうど、エミリアもあの少女ぐらいの歳だったと、今更ながらに思い出した。

あの日、ゴルディは街から離れた丘へと遠乗りに出かけていた。その丘は妹の好きな花が丘一面に咲く場所であった。妹の誕生日が近かったので、彼女の誕生日のお祝いに花が満開になったその丘に

連れてくるつもりであった。その日は、その準備として道の確認と練習を兼ねた遠乗りであった。

そのころのゴルディは乗馬は得意ではなかった。しかし、妹を乗せて失態をさらすのは兄の沽券に関わる。そんなわけで乗馬の特訓をしていたのであった。そのおかげで、乗馬に自信めいたものまで出てきていた。

その日も何度目かの下見の遠乗りで、何の不安も無く丘にたどり着くことができた。花もつぼみが緩み、ぽつぽつと咲き始めて一分咲き程度である。半月後の妹の誕生日には満開の花を見せてやれると、妹の驚く顔を想像して、一人で顔をほころばしていた。

彼が遠乗りから戻ったのは昼下がりがろだった。

街に戻ってきた彼は愕然とした。街は朝出て行った時の姿ではなくなっていた。

建物はあちこちで破壊され、いまだに炎を上げて燃えているものもあった。石畳が綺麗に敷き詰められていた広場は、無残に巨大な獣が引っかいたような爪あとで石畳がはがされ、地面も深くえぐられていた。広場中央にあった街自慢の噴水は原型を思いつくのも難しいほど粉碎されている。噴水からいまだに吹き出ている水が広場の爪あとに流れ込み、泥の水溜りを作って、そこには血と脂が浮かんでいた。

人々は叫ぶことも泣くことすらも疲れたように地面にへたり込んでいた。歩いているものもいたが、どこか現実感のない亡者のようであった。そして、誰も皆、生気のない目で破壊された街並みをただただ見つめていた。

子供が泣く声が聞こえ、ゴルディははっとなって振り返ると、小さな子供が血だらけになり動かなくなった母親にしがみつき、何度も何度も揺さぶっていた。

ゴルディはその姿に自分が行くべき場所をやっと思ひ出した。急いで手綱をめぐらせ、馬首を自分の家に向けた。

彼の家は半分が崩れ、半分が形をとどめていた。火事にもなっ

いない。家にたどり着くまでに見た街の惨状に比べれば、被害の少ない方といえた。しかし、その幸運は不幸でしかなかった。

崩れた側に、たまたま母親と妹がいた。母親は落ちてきた梁から妹を咄嗟にかばい、梁の下敷きとなり即死した。妹は即死は免れたが、崩れた天井に埋まり重傷を負っていた。内臓がひどくやられていたので、助かる見込みはほばないと医師は首を振った。

高位の治癒魔法であれば助けられただろうが、地方都市にそのような魔法が使える人間はそうそういない。いたところで、街の有力者を治したところで魔力を使い切ってしまうだろう。現に初級の治癒魔法が使える神官たちは有力者を助けるために全員、魔力を使い切って、街の怪我人を治すこともできないでいた。

「……お……にいちちゃん……」

「エミリア！ 大丈夫か！」

うつすらと目を開けて、苦しそうに彼を呼ぶ妹に手を握って大声を上げた。

「あたしは、大丈夫。おにいちちゃんは？ どこか、怪我してる？」

瀕死でありながら彼を気遣う言葉に胸が締め付けられた。

「俺は大丈夫。どこも怪我してない」

「よかった。おにいちちゃん、男のくせに、泣いてるから。どこか怪我したのか、とおもった」

彼女の指が彼の頬の涙の跡をなぞる。新たな涙がその跡を流れていきそうになるのをぐっところえた。

「エミリア」

「おにいちちゃんが、無事で、本当に良かった」

苦しそうに安堵の表情を浮かべる彼女を見るのが辛かった。何もしてやれない自分の無力さが痛かった。

「エミリア。何か欲しいものはあるか？ 水か？ 食べ物か？ お

前の好きな、あの蜂蜜たっぷりのパイケーキか？」

「あは。おにいちちゃん、そんなに、優しくしないでよ。気味悪いよ。慌てなくても、あと、半月もすれば、いっぱい、ほしいもの、もら

うんだから」

妹は辛そうだが、いつもと同じ笑顔を浮かべた。

「ああ、そうだな。そうだったよな」

ゴルディは強く妹の手を握り、何度も何度もうなずいた。

「うん。だから、ごめんね」

「エミリア！」

「プレゼント、楽しみだったのになあ」

彼女は夕暮れで血のように赤く染まった空を見上げた。黒煙がそこかしこに立ち上り、地獄のような不気味な空が広がっていた。

ゴルディはいても立っても溜まらずに立ち上がって、自分の乗ってきた馬を引いてきた。

「と、特別だぞ。まだ、早いけど、先に渡しておく。忘れたら大変だからな」

彼は妹を抱きかかえるとそのまま馬にまたがった。瀕死の彼女を動かすのは正気ではなかったが、こんな地獄のような場所が彼女の最期の場所など彼には我慢ならなかった。

「お、にい、ちゃん」

不安そうな表情が目に入り、彼は無理やり笑顔を作って、それに成功した。

「ちよつと飛ばすけど、大丈夫だ。だいぶ、上手くなったんだからな、乗馬」

「うん」短く返事して微笑むと、ゴルディに掴まるように抱きついて目を閉じた「あったかい。おにいちゃんの匂い。おひさまみたい」

ゴルディは細心の注意を払って馬を飛ばした。馬の動きに身体を合わせ、彼女に負担がかからないように。これほど集中し、これほど上手く乗れたのは、今までになく、そして、これからなかった。彼が昼間いた丘にたどり着いたのは、日は完全に沈み、その残照が西の空にかりうじて残っているところであった。

昼間は一分咲きであった花は陽気で開花が進んだのか、二分咲き程になっていた。

「ついたぞ。エミリア。これが俺の誕生日プレゼントだ」

馬から飛び降り、妹を抱いたまま丘を登った。柔らかい春草を踏みしめ、頂上を目指した。頂上付近は、見晴らしがよく、一番日当たりが良いためか、花がいち早く満開になっていた。まるで、そこだけ花の絨毯を敷いたようであった。

「エミリア。綺麗だろ？　ここはお前の場所だから、いつでも行きたいときに言えよ。連れてきてやるから。いつでもだぞ、こんなプレゼント、他にないだろ？　エミリア」

妹を花の絨毯の上に降ろし、丘からの眺めを見せた。彼女の目は閉ざされたまま。息遣いも胸の鼓動も聞こえてこない。だが、彼の耳には、たった一言、はっきりと聞こえた。

「ありがとう、おにいちゃん」

ゴルディはとうとう声にならない慟哭をあげた。自分が治癒魔法を使えば。自分が遠乗りなどせずに街にいれば。自分が家で妹の相手をしていれば。

どうしようもない後悔と自責が頭の中を駆け巡り、何も出来なかった自分を責め立てた。泣くことすら許されない悲痛な叫びで気が狂いそうになる。しかし、気が狂うこともまた許されない。

「いいねえ。その顔、その声、その絶望」

ゴルディの前に黒い霧が集まったかと思うと人の形を取って姿を現した。闇に溶ける漆黒のマントを羽織った白い仮面の男であった。「君のその絶望、気に入ったよ」

白い仮面の男は愉快そうに笑っていた。ゴルディは突然現れた謎の男に思考が止まっていた。

「ああ、自己紹介が遅れてすまない。私はラプラス。君たちの言うところの――魔物だ」

ゴルディは「魔物」という言葉に硬直した。

「安心したまえ。君を殺そうとは思わない。いつでも殺せる。君は生きている方が面白い。その妹の死を背負ってね」

白い仮面の魔物の言葉に拳を握る手に力が入った。この魔物こそ

が、街を襲った張本人なのではないか？ そんな疑惑が彼の頭をよぎった。

「いい勘をしている。まったくもって、その通り。君の街を襲ったのはこの私だよ。素晴らしい街だったよ。君はあの街を自慢してもいい。あんなに幸せが美しく絶望と嘆きに変わるのはそうそうないからね」

まるで極上の料理を食べて満足した客が料理人に賞賛を贈っているようであった。

「この野郎！ よくもっ」

地面を蹴って花を散らし白い仮面に飛び掛った。しかし、白い仮面が手を横に振るだけでゴルディは魔物に触れることもできず弾き飛ばされて地面を転がった。咲きかけの花が彼と一緒に無残に散って、周囲に巻き上がり、月の明かりにさらされた。

「いいねえ。その憎しみ。君の感情は野に咲く花のように純粹で可憐だ。くくく、退屈で長く地上に來なかつたが、君たちのような人間がいるのなら、たまには來ることにしよう。もっと楽しませてくれ、この私を」

体中が打ち身でひどく痛んだ。どこか骨折しているかもしれないが、それがどこかもわからない。胸の奥から沸き起こる黒い感情が彼を動かし、身体を起こさせた。

白い仮面の姿を探して、あたりを見渡した。そして、一つの人影が目に入った。

「エミリア……」

頂上で眠っていたエミリアが月明かりの下で立ち上がっていた。彼は痛みを忘れて頂上へ駆け上った。

「エミリア！」

しかし、そこに立っていたのは、妹ではなかつた。妹と同じ形はしている。しかし、血の氣を失い、生氣も何も感じない。死体に操り糸をつけて無理やりに立たせているような、禍々しいものであった。

「おにいちちゃん、わたし、らぷらすに、ころされたの。かたきを、とってね。おにいちちゃん、わたし、らぷらすに……」

感情も生気もない妹の声が静かな丘に響いた。

妹のすぐ後ろにラプラスがいる。どうやっているかは不明だが、妹の死体でラプラスが遊んでいるのは、疑いようのない事実であった。その証拠に、ラプラスはひどく爽快な笑顔を浮かべている。

ゴルディは怒りの熱で脳髓が焼き切れそうだった。このまま発狂してもおかしくない。奥歯が嫌な音を立てて割れ、新たな血の味が口に広がった。

「また会おう。その時まで壮健で」

ラプラスの声が聞こえたかと思うと、妹の身体が崩れ落ちた。彼は無言でそれを支えた。

妹の遺体を再び綺麗に丘の上に安置すると、そのそばに座り込み何も言葉を発さなかった。だが、彼から発せられる空気がすべてを物語っていた。

「殺してやる」

ゴルディは走りながら普段の彼が使わない言葉を口にした。妹のことを思い出すたび、あの子の冷たい妹の身体の感触がつい先ほどのように蘇る。そして、あの夜に誓ったこの言葉も。

「……いけませんね。今まで何を修行してきたのか。冷静にならなければ勝てない。あいつは強い。魔王ほどではないけれど、その側近ぐらいに強い」

これまでゴルディは何度か旅隊を組んで、ラプラスを探し出し、戦いを挑んだことがあった。

旅隊とは、所属など関係なく、利害や目的が一致した人間たちが集まり、行動を共にする時の呼び名である。一般的に十人未満の少人数の集団をいい、それ以上になると、集まりの性質に合わせて「傭兵団」「神官団」などの呼称がされていた。

ゴルディは、今まで何度かラプラスや魔物に家族などを殺されたものたちを集め、復讐旅隊を組み、ラプラス討伐を試みた。しかし、

それはすべて敗れた。そして、自分以外の共に戦った仲間たちをこごとく殺された。

殺されてもおかしくない負けを喫しても、何故か、ゴルディだけは殺されなかった。

前回の戦いで、ゴルディはラプラスからその謎の答えを聞いた。ラプラスの言った、一言一句が情景と共にゴルディの頭に鮮明に蘇った。

「君を殺そうとは思わない。いつでも殺せる。君は生きている方が面白い。妹だけでなく、両親、仲間の死を背負ってね」

戦場の熱が肌を焼く。

「君の苦悩は、私をとても愉快にしてくれる。君の憎しみは、私に快楽をもたらしてくれる。君の怒りは、私の最上の喜びとなってくれる。ああ、なんて君は素晴らしい」

人だったものが焼ける匂いが吐き気がするほど、周囲に立ち込める。

「君ほど強く暗い炎を灯せる人間はそうはいない。普通ならば、その炎にその身を焼かれて正気を失っている。君は特別だ。暗い炎を力に変えられる、稀有な存在だ。実に美味なる才能だ。全くもって、素晴らしい」

永遠に苦しみが続くかのような断末魔の声が地面を揺らす。

「君が強くなれるのは、神への感謝ではないのだよ。私への憎しみ、怒り、そして、恐怖。そう！ 恐怖。私を恐れている。心のどこかで勝てないと。もう殺して楽にして欲しいと望んでいる。でも、殺さない。君の心が擦り切れて、暗い炎が消えても、私は君を殺さない」

口の中に胃酸と血が混じった不快な苦味が広がる。

「ほら、暗い炎が揺れているよ。武者震いかい？ それとも、動揺しているのかい？ ああ、ごめんよ。ただ震えていただけだったね」

そして、心の底から楽しそうに笑う白い仮面。

「君の感情はいつ味わっても、天上の甘美な蜜のようだよ。さあ、

もつと、私にそれを味あわせてくれ」

戦いに敗れ、瀕死の状態でもできず、仲間だったものたちが死に行くのを祈りの言葉もかけられず、見送るしかなかったあの時を思い出した。

絶望の二文字が脳裏をよぎった。しかし、ラプラスの言うとおり、彼の暗い炎は消えることを知らなかった。どんなに怒り、憎しみ、苦悩し、恐れても、ゴルディは前に進む以外の道を全て閉ざされていた。

「だから、今度は一人で挑まねばなりません」

これが最後の戦いであると彼は決めていた。そのために準備も修行も積んできた。

ふと、最後に旅隊を組んでいたランスロットたちを思い出した。

彼らはゴルディが今まで組んだ旅隊の中で最強といえた。

剣技に優れた勇者ランスロット、臨機応変に魔法を駆使する魔術師クリーム、冷静沈着にして屈強な傭兵ドガ。三人とも知名度こそはそこそこだが、実力は一流といってよかった。

ゴルディは、ラプラスの発する固有の波動を感じたため、彼らに理由も言わずに別れを告げて旅隊を抜けた。

彼らはゴルディが今まで組んだ復讐の旅隊ではなく、ランスロットを英雄にするため組んでいる旅隊であった。なので、ゴルディは自分の私怨に付き合わせるわけにはいかないと、旅隊を離脱したのであった。

「彼らとならばラプラスを倒せるかもしれない」

そんな誘惑が彼の中で沸き起こっていた。しかし、その考えは首を振って否定した。

おそらく、理由を話せば、一緒に討伐することを申し出てくれたであろう。しかし、それではまた同じことになる。

「もう、一人で生き残るのはたくさんだ。今度こそ、決着をつける」
ゴルディが揺らぎかけた決心を固めるように口にした。それと同時に一人の少女の顔が脳裏に浮かんた。妹同じ年頃だが、名前以外

は何もかも違う少女。

ラプラスとの対戦が近いにもかかわらず、自分でも何を考えているのか不思議であった。

助けただけで十分のはずだった。あとは村人たちに預ければいいものを自分の手元において世話を焼いた。

彼女の話す異世界の話というのは面白くはあったが、今の自分にはまったく必要ないことである。

「本当にどうかしてますね」

しかも、彼女に自分の妹の名前を与えた。今から、その妹を殺した魔物と戦おうとする前に。

「もしかすると、彼女は主が私に与えたもうた希望なのかも知れませんがね」

彼は彼女との生活でラプラスを追う焦りから一時的に開放された。冷静さを取り戻したおかげで、周囲に罫を張り、こうやってラプラスと対決に持ち込むことができた。

「主の愛に感謝を」

彼は人差し指と中指で自分の額に触れて、そのまま手を下ろし、手を広げて胸に押し当てた。

手を押し当てると、服の中に首からぶら下げているロトク教のホーリーシンボルを刻んだ鏡が胸に当たる感触を感じた。

「呪紋……」

ゴルディは軽くそれを服の上から握り締めた。

『呪紋』は魔法を世界に体現するために必須のものである。自分と世界をつなぐ門という意味で、『呪門』とも呼ばれることもある。「私にもしものときがあったとき、あの少女が一人で生きていけるように施してやるべきでしょうか……」

エミリアに魔法を教えてほしいとせがまれて拒否した。だが、初歩の治癒魔法が使えるれば一人で生きていくのも難しくはない。呪紋は専門家でなければ刻むことができないが、初級の治癒魔法ならばゴルディもなんとか刻むことができる。もちろん、専門家の刻むよ

りも質は落ちるだろうが、それでも重宝されることは間違いない。

もちろん、違法であるが、田舎でひっそりと暮らす分には教会から文句を言われることもないだろう。実際、僻地の村にはもぐりの治療師は少ない。

「魔法か……もし、あの時私も使えれば……」

ゴルディは今の自分なら、あの時の妹を助けることのできる魔法を使える。もし、あの場所にいたのなら彼女を救えただろう。だが、それと同時に自分一人では、あの街の多くの人間を救えなかったことも大人になった彼には十分わかっていた。

彼は首を振った。過去は変えられない。そして、過去に縛られ続けていく自分には今も変えられない。

「もし、この戦いから生きて帰ってこれたら、今を変えよう」

魔法は、たとえそれが初歩的なものであっても使えない人間にとっては脅威である。それゆえに魔法は国や教団によって厳しく管理されている。しかし、その独占的な占有により、魔法の恩恵にあずかれるのはごく一部の人間に限られている現状があった。

その状況を変えることができたなら、妹のように不幸に命を落とすものが少なくなる。本当は敵討ちなどより、それをすべきなのだろうとゴルディにもわかってはいた。しかし、一度縛られた過去から抜け出すことは難しかった。

「あの少女のおかげかもしれませんね」

ゴルディは苦笑めいたものを浮かべた。もう遅いのかもしれないが、それでも、今、それを思えたことを神とエミリアに感謝した。

「魔法は本来、主の恵み。すべての人間がその恩恵にあずかるべきなのです。それを教えるために主はあの少女を私に遣わしたのでしよう」

魔法の力の源は、世界に潜在する力——マナである。ロクト教団では「主の愛」となっているが。どちらにせよ、その力を引き出して、現実世界に不可思議な現象を具現化する技術が『魔法』である。しかし、マナに直接干渉することはできない。神ですら行うこと

はできない。そのため、自分自身が内包する魔力——オドを使い、それを呼び水にマナと結びつき、制御するのである。

一応、オドだけでも魔法は発動できる。もともと、マナとオドは質に変わりはない同じものである。ただ、自分の外にあるか、中にあるかの差だけである。

だが、マナに対してオドはあまりに少なく、言葉や図形——呪文や魔方陣にオドを通して魔法を発動しても、その効果は微少である。つまり、呪文や魔方陣を真似ただけでは成功したとしても、魔法が発動していることにも気がつかないぐらいしか効果が現れない。

エミリアのように神を超えるほどのレベルでオドがあれば別だが、彼女以外でマナを使わずに魔法を発現することができるのは、神々でも数柱、しかもかなり低レベルな魔法に限られる。

しかし、実際に魔法は存在する。そこで登場するのが『呪紋』である。

呪紋は単純に言えば、世界と自分を同調させるための装置である。オドを使って起こした魔法の効果は気のせいというほど微少だが、呪紋によって世界と術者を同調させると世界が同じように魔法を使ってくれるのである。この時に使われる動力がマナであり、オドなどよりも多大であるため効果が目に見える形となる。

つまり、呪紋がなければ魔法は事実上、使えないのである。そのため、魔法使いたちは呪文や魔方陣を人前で使っても盗まれる心配がなかった。

呪紋は色々なものに刻み込まれる。魔術師たちは杖に組み込んだ宝石に、神官僧侶たちはホーリーシンボルを刻んだ鏡に、魔法の使える勇者などは身体に刻まれる聖痕に、蛮族やシャーマンなどは刺青である。

ちなみに、呪紋は術者のオドのパターンによってプロテクトがされており、呪紋が盗まれても他人には使えない。その上、魔法ごとに呪紋が違っているので、その魔法の呪紋を持っていなければ使えない。余談だが、レベルの低い魔法使いが高レベルの魔法の呪紋を

持っていても使うことはできない。レベルが低いと呪紋を発動させるだけのオドの絶対量が足りていなかったり、的確なオドのコントロールやイメージができないので使えないのである。

ともあれ、魔法を使うための要である呪紋はどこでも最高機密であった。

呪紋を刻むことも、その魔法を使うことよりも難しく、人数も少ない。上級魔法となれば呪紋を刻める人間は国に一人いるかどうかである。この呪紋を刻める人間を管理することで、国や教団は魔法の氾濫を防いでいるのであった。

「でも、そのおかげで多額の寄付を求めたり、手足として働くことを強要するようになっていきますがね」

教団で見てきた腐った部分を思い出し、ゴルディは思わずはき捨てた。国の魔法管理機関も似たり寄ったりであることも聞いていた。エミリアの死んだあの日、魔物が去り、朝になった頃、ゴルディは探しにやってきた使用人に保護されて家に帰った。父親は無事であったが、怪我をしており、妻と娘を失った悲しみから立ち直れずに数年後に亡くなった。

彼は妹の葬儀が終わると同時にロトク教の神殿に入り、神官としての道を目指した。父親は彼が母と妹のために祈りをささげるためと思い、財産を整理して、彼を支援したのだった。

父親による多くの寄付と、もともと彼に備わっていた才能と固い決意ですぐに頭角を現した。若くして神聖魔法の使い手として、その名を隣国までにとどろかせることになっていた。神官長になるのも時間の問題といわれたが、その誘いを断り、巡回神官として大陸を旅して人々を救った。

今ではゴルディの名前はちょっとした聖者として広く知られていた。

「聖者さまか」

ゴルディは苦笑を浮かべた。実際は妹の敵を倒すための修行であり、仇を探すための旅でしかなかった。

街道からカペル村へと繋がる枝道に入ると彼は走るのをやめた。呼吸を整えて、何事もなかったように歩いて村に向かった。慌てているところを見せると、村人にいらぬ不安を与えるという配慮からである。

「あ、ゴルディさん。おかえりなさい」

当番で見張りに立っていた村人が、かがり火に照らされて現れたゴルディに気が付いた。

「ただいま、ロッドさん。見張り番、お疲れ様です」

ゴルディは見張り当番の村人に穏やかに会釈した。

「早く帰ってあげてくださいね。エミリアちゃんが寂しがってますよ」

村人の何気ない言葉にゴルディは胸の奥が少し痛んだ。これから自分は戦いに出る。そうすれば、エミリアが一人になることは彼の唯一とっていい気がかりだった。

「ええ。村長さんに挨拶したらすぐに。私が留守の間、あの子はい子にしていましたか？」

「もちろんですよ。小さいのにしっかりしたお子さんで、みんなの人気者ですよ。さすがはゴルディさんの姪っ子です」

村人の笑顔を見て、ゴルディは少し胸のつかえが取れた気がした。エミリアはこの世界に慣れようと一所懸命に頑張っている。その前向きさと勤勉さは村人たちにも好意的に受け入れてもらえているようだった。最初こそ、ゴルディの姪だからという理由であったが、今はエミリア自身の人柄が村人たちに受け入れられている。

それをゴルディは少し嬉しく、少し寂しくも感じた。

「こんなことを感じるから、ランスロットに、枯れてるだの、おっさんだの言われるのですね」

ゴルディは最後に組んだ旅隊のメンバーに言われていたことを思い出して苦笑を浮かべた。

「何か、おかしいことを言いました？」

苦笑しているゴルディに見張り番の村人が怪訝な顔をした。

「いえ、ちよつとした思い出し笑いです。かなりドジなあの子がすっかりしているというのを聞いてね」

ゴルディはそういつてごまかしたが、本当にエミリアのドジな失敗を思い出して笑顔を浮かべた。村人も少し思い当たる節があるのか、それを思い出して笑顔になった。

「それじゃあ、少し村長さんのところへ行ってきます。見張り、頑張ってください」

ゴルディは見張り番の村人にお辞儀をすると、カペル村の村長の家へと向かった。

村長の家は、村の中央の広場に近いところにあり、他の家よりも大きく、普請も少しばかり立派であった。とはいえ、役人などが来た時に宿泊するのに使われるので、立派にしているだけである。村長の本音を言えば、それほど余裕がないので装飾品などに無駄なお金を使いたくないと、ため息を漏らしていた。

普段なら、そろそろ就寝していかうかという時間だったが、村長の家には明かりがついていた。ゴルディは、寝ていたら起こしてしまうのは申し訳ないと思っていたため、少しだけ気が休まり、玄関で呼び鈴の紐を引いた。

出てきた村長夫人に取次ぎをお願いすると、村長はすぐに玄関までやってきてゴルディの来訪を快く迎えてくれた。

「おかえりなさい、ゴルディさん。しかし、どうされたのですか？

こんな夜更けに」

カペル村の村長は、四十代になったばかりの壮年の男性で、歳の割には薄くなった毛髪は少し苦労性を感じさせる人物であった。数年前に代替わりしたばかりで、少々貫禄は不足しているが、村人のために一所懸命に頑張って失敗をしながらも経験を積んでいた。

「夜遅くに申し訳ありません。また、すぐに出立しなければなりませんので、ご迷惑と思いなながらも、挨拶とお願いをしに参りました」
ゴルディは旅装のまま村長に無礼をわびた。

「いえ、それは構いませんが、ずいぶんとあわただしいようで、何

かあったのですか？」

税率が引き上げられるかもしれないなどの心配事が山積している
ので、ゴルディのあわただしい出立に不安を隠しきれずにいた。

「心配させて申し訳ありません。長年追っている魔物が現れたので、
その討伐に向かいます」

「魔物、ですか……」

安心させるために正直に話したが、魔物という言葉に村長の顔色
はますます暗くなった。ゴルディほどの人間が「長年追っている」
ほどの魔物である。ただの魔物ではないことは容易に想像がついた。
「心配はいりませんよ。その魔物は、今でもここから西に八リーグ
は離れています。おそらく、北の鉾山都市あたりを目指しているよ
うです」

「そうですか。それは……」

村長は少しだけ、胸をなでおろした。その魔物が他の街を襲うか
もしれないというのに、安心するのは不謹慎かもしれないが、村の
安全が第一なのである。他の街を心配する余裕はなかった。ただ、
「よかった」という言葉を口に出さなかったのは彼の良心であろう。
「ですが、万が一に備えて、西の森にはしばらく入らないようにし
てください。性質の悪い罾を仕掛けている可能性がありますから」

ゴルディは村長に真剣な顔で忠告した。

「罾……ですか？」

西の森は、村に近いところはまだしも、奥の方は開拓にも向かな
い土地であるし、採れるものもさほど多くない。木々の密集度が高
いこともあり、森の中は暗くて道にも迷いやすい。猟師もあまり好
んで立ち入らない森であった。立ち入りを禁止されても差し障りは
ないが、罾という言葉に村長はただならぬものを感じずにはいら
れなかった。

「ええ、私が追いかけてくることを見越して、卑劣な罾を仕掛けて
くることでしょう」

ゴルディは村長が不安になっているのも気付かず、追いかける魔

物を思い出し、瞳の奥に暗い炎を灯していた。普段見せないゴルディの表情に村長は更に不安を募らせて、今度はそれを口にするのもできないほど怯えていた。

「こりゃ、ゴルディ」

そんなゴルディが不意に木の杖で肩を軽く叩かれて、はっとなった。見ると、肩をたたいたのは、いつの間にか彼と村長の間に割り込んでいた黒いローブに身を包んだ老婆であった。老婆は不機嫌そうな視線をゴルディに向けていた。

「まだまだ修行が足りんのお。そんな表情では勝てる戦も勝てんぞ」
「ベス婆様……」

ゴルディは村の長老、薬師のベス婆の忠告に素直に頭を下げた。「感情を表に出さん分、お前さんは内で空回りする。強い魔物はそういう隙を突いてくる。落ち着けとはいわんが、相手が仇敵でもやることはいつもと同じことじゃ」

ベス婆はゴルディに向かって苦笑した。その苦笑が、おおよその事情は推測がついていると語っており、ゴルディは再び頭を下げる以外なかった。

「で、それはそれとして、村長とわしに用があるんじゃない？」
ベス婆はゴルディの話を促した。魔物を追っているなら、こうしている時間すらも惜しいことは言うまでもないことである。

ゴルディは村長の方に改めて向き直った。

「これまで、ご厄介になり、ありがとうございました。今回の討伐は危険な旅になります。ですので、迷惑でなければ、エミリアをこの村に置いていきたいのですが。もちろん、討伐が終われば、迎えに参りますので」

そう言って、深々と頭を下げてくださいました。この時代、きっちりしつかりと役人たちが記録をしているわけではないが、勝手に流民を受け入れたりすれば、お咎めをくらうことになる。もっとも、子供一人を受け入れて問題になるわけではなく、役人たちが袖の下を欲しさに法律をちらつかせているだけなのだが。

しかし、どちらにせよ、村に迷惑がかかることには変わりなかった。

「それぐらいのことでしたら、いくらでも。それに、迷惑なんてとんでもない。エミリアちゃんはおかわいくて、とてもよく働く、いい子ですし、今ではすっかり村の人気者ですよ。村に残っても、誰も文句は言いませんよ」

村長はゴルディにお願いするまでもないと首を振った。

「ありがとうございます」

ゴルディは深々と頭を下げた。これだけで、肩の荷は下りたも当然であった。そして、今度はベス婆のほうに向き直った。彼女の顔を見れば、ゴルディが言いたいことは百も承知で、それを受け入れてくれることも十分にわかったが、それでも言葉にしなければお願いにはならない。

「ベス婆様。エミリアを薬師として、育ててやってください。あの子は、世間知らずで気の弱いところはありますが、なかなか憶えもいいし、手先も器用です。きっといい薬師になると思いますから、お願いします」

再び、ゴルディは頭を下げた。今日は何度目かわからないが、誰かのために頭を下げることに抵抗はない。彼は誠意を持って頭を下げていた。

「やれやれ。この古い先短い年寄りに弟子を育てろとは、大変なことをさらりという」

ベス婆はそう言っ、自分の肩を杖で叩いた。村長はそれを聞きながら、「そういういながら、自分よりも長生きしそうだ」と心の中で呟いていた。ベス婆はその心の呟きが聞こえていたかのように村長の頭をぽかりと杖で叩いてから、ゴルディに向かってにこりと微笑んだ。

「じゃが、跡継ぎができるのはうれしいことじゃ。せいぜい、こき使って鍛えてやるとするかの。お前さんの討伐が済んだら戻っておいで。そのときには、薬鍋の似合う女の子にしておいてやるからの」

ベス婆は豪快に笑うとゴルディの肩を杖で叩いた。

「ありがとうございます。きっと戻ってきます」

ゴルディは晴れやかな笑顔でもう一度頭を下げた。それを見て、ベス婆は彼の耳を軽く引っ張って口元に寄せると、「死に急ぐんじゃないよ」とだけ小さく耳打ちした。

その言葉にゴルディは苦笑でしか応じることができず、ベス婆を逆に苦笑させた。

「まあ、馬鹿は男の特権だからね。がんばりな。さあ、エミリアが家で待ってるよ、顔ぐらいは見せていっておやり」

ゴルディは一礼して、村はずれのエミリアの待つ自分の家に向かった。

第七話 青の勇者

昨日、一昨日と降り続いた雨は、明け方ごろに止みはしたものの、午前中、空はまだ雲に覆われていた。昼ごろになって、やっと雲の切れ間から青空がのぞきはじめていた。

森の緑も久々の雨で活気を取り戻し、瑞々しい青さが目に眩しい。土を踏み固めただけの道はぬかるんで歩きにくかったが、村人たちは雨で遅れた農作業を取り戻そうと忙しそうにしていた。

ゴルディが村を発って三日。

エミリアはゴルディが村を出たその晩から、村の長老で薬師でもあるベス婆の家に住み込みで修行することになった。引越すといっても、持っていく荷物は皆無なので、引越しというよりも強制連行のようであった。

エミリアは、ベス婆に天日干しするように言われていた薬草の束を抱えて、木の杭で地面から浮かして張られたハンモックの上にそれを並べていた。刈り取ってから日が経っているので、今日も雨であったのなら、この薬草が駄目になってしまうところであった。

ふと、エミリアは昨日までの雨にゴルディが道中難儀していたのだろうと考えたが、旅慣れている彼には大した障害にならないだろうと思い直した。

エミリアは、ベス婆の家に来てから、あれこれと雑用を言いつけられ、目の回る忙しさに追われていた。

やることがあれば余計なことを考えなくてもいいという、ベス婆の配慮である。実際、エミリアは忙しさに余計なことを考えるひまもなかった。それでも、ふと手の空いたとき、こんなふうにゴルディのことを思い出していた。

「そりゃあ、エミリアのことを知っているから、止めはできないけど……」

エミリアは、自分の今の名前の元になったゴルディの妹、エミリ

アの話は聞いていた。彼自身はあまり話したくなかったが、どんな女の子だったのかエミリアは興味があり、半ば無理やり話してもらった。

あまりの悲劇に泣いてしまったのは恥ずかしかったが、その涙は本心であることは否定しない。

ゴルディにとってのエミリア像を崩さないように、エミリアはできるだけ女の子として振舞った。恥ずかしかったが、それが彼の大切な人の名前を貰った上に、右も左もわからない自分を助けてくれた彼へのせめてもの恩返しであった。

だからこそ、心の奥底に靄がかかる。

「わかってるよ。僕がついていったところで足手まといにしかならないことは……」

大陸で名だたる実力派神官の彼と自分とでは差がありすぎると歯噛みした。

「でも、だからって、急すぎるよ。僕だって、もう少し時間があれば、少しは魔法を教えてもらって……」

そのような付け焼刃が役に立たない相手だというのは、ゴルディの話で十分わかっていた。だから、自分が魔法が使えるようになってからは黙っていた。言えば、連れて行って欲しいと言って困らせてしまうことがわかっていたから。

時間があればなど、言っても詮無いことであることはわかっていた。

心の靄がたちこめ、薬草の束を並べていく手に思わず力が入り、いつの間にかハンモックにたたきつけるようになっていった。

「こりゃっ、エミリア！ そんな雑に扱ったら、せっかくの薬も毒になってしまうが。もっと、丁寧に扱いりゃんせ！」

「は、はいっ。すいません」

しわがれてはいるが、元気な声がエミリアの背中に投げつけられ、彼女は姿勢を正して直立不動になって謝ると打って変わって丁寧に薬草を並べ始めた。

「ベス婆さん、人使い荒いよ……まったく……」

エミリアはぶつぶつ小声で文句を言いながら薬草を並べていた。そこにエミリアよりかは二つぐらい年上の少女が山菜摘みの格好でベス婆の家の前を通りかかった。

「おっ、真面目にやってるわね、エミリアちゃん」

少女は文句を言いつつもちゃんと仕事をしているエミリアを見つけ、にこやかに声をかけてきた。その笑顔は陽気な感じがいっぱい、彼女自身、あまり美人ではないが人に好印象を与える表情を持っていた。

「僕はいつも真面目だよ、フローラさん」

行き場を失っていた不満の行き先を見つけたとばかりに、エミリアは頬を膨らませ反論した。彼女とは、見た目の歳が近いこともあり、村では仲のよい友達であった。

そして、小さな友人のかわいい怒りでたじろぐフローラではなかった。

「そうよねえ。ベス婆ちゃんの怖い話は大人でもビビッて漏らす人もいるもの。真面目にするわよねえ」

フローラはエミリアを横目で見るような、ちょっと意地の悪い笑顔を浮かべた。

「うっ……」

ゴルディが村を発った後、エミリアは、やはり、どうしても同行したいと一度は後を追おうとした。だが、ベス婆がエミリアに魔物に関わる恐ろしい話を臨場感たっぷりで、ろうそくの炎で特殊効果まで演出して聞かせた。

結果、彼女は腰を抜かして、おまけに床を濡らしてしまったのである。

その後も、言うことを聞かないときは別の怖い話を彼女に無理やり聞かせようとするので、今では反射的に直立不動になってしまう有様であった。

「安心しなさいよ。あたしだって、昔、やっちゃったもの」

落ち込むエミリアに、フローラはちよつと顔を赤らめて、そつぽを向きながら自分の秘密を告白した。

「それに、この村でベス婆ちゃんの話で漏らしてないのはベス婆ちゃんぐらいなものよ。ツウカギレイっていうの？　そういうものよ。じゃあ、頑張りなさいね」

フローラは後ろ向きに手を振って森に続く道に入っていたが、耳まで真つ赤なのは後姿でも見てとれた。

エミリアはくすりと笑みをこぼして、自分の仕事に戻った。村人たちは彼女によくしてくれている。今はそれで満足すべきなのだろうと、自分自身に言い聞かせていた。

薬草を再び並べ始めると、今度はベネットが走って家の前の道をやってきた。彼もフローラと同じように、カゴを背負った山菜摘みの恰好をしていた。

「エミリア。フローラ姉え、見なかったか？」

ベネットもエミリアを見つけると挨拶抜きで訪ねてきた。

「うん、見たよ。さっき、その道に入って行ったよ。山菜を摘みに行くんだと思うけど、ベネットも？」

フローラは森で山菜や木の実などを見つけるのが大人顔負けで上手かった。そのためか、他の家の山菜摘みも頼まれることがあり、頻繁に森に出かけていた。おかげで、今では小さいながらも、猟師並みに森を知っていたので、彼女が一人で森に入るのを不思議がる村人はいなかった。

「今日是一緒に連れて行ってくれるって約束してたのに。フローラ姉えのバカ、また忘れてたな」

ベネットは眉を吊り上げて地団駄を踏んだ。フローラはよく約束を忘れたりするので有名で、カペル村では「フローラとの約束」といえば、「あてにならない」と同じ意味で使われるほどであった。

「あはは。フローラさんらしいね」

「笑い事じゃない！　今日、フローラ姉えはかーちゃんに頼まれていた山菜を採らないといけないから、忘れないようにして行くっ

てことになってたんだよ。忘れてきたら、俺がかーちゃんに怒られる」

エミリアが笑っていると、ベネットの方は怒り出し、急いでフローラの後を追おうとした。

ちょうどその時、エミリアの耳にフローラの入っていった森の方からかすかに女の子の悲鳴が聞こえた。

「フローラ?!」

「え? 何か聞こえたのか?」

ベネットは耳を澄ましてみたが、何も聞こえない。しかし、エミリアは自分の耳を疑わず、抱えていた薬草を放り投げ、悲鳴のした森の方に駆け出した。山菜を採りにいく道ならば、彼女も薬草を採りに使うので良く知っている。

「ま、待てよ! エミリア!」

後ろからベネットが追いかけてくるのも待たずに、エミリアは森の中の道を走った。

しばらく走ると、エミリアの予感が正しかったことが証明された。悲鳴は徐々に鮮明になり、それがフローラのものであることはすぐにわかった。そして、悲鳴に混じって聞こえてくる、何か硬いものを削るような耳障りな音が、彼女にただならぬ事態が迫っていることを感じさせた。

エミリアはとにかく、耳を澄ませて音のする方を確かめ、そちらに向かって急いだ。

しばらくして、山菜採りの道から少し外れた、森が少し拓けて空き地のようになっているところでフローラを見つけた。

「た、助けて!」

フローラは空き地の隅にある枯れ木によじ登り、助けを求めていた。

空き地には、犬ほどの大きさのクモが十数匹、五つある赤い目を光らせて、やすりが擦れるような不快な音を立てながら地面を這いずり回っていた。フローラは木に登ってこようとするクモを足で蹴

って、必死で牽制していた。そのためか、履いている靴とズボンの裾がかなりボロボロになっている。

「エミリア。足、速すぎだぞ。それに急に走り出して、どうし——うわっ！ ま、魔物！」

やっとエミリアに追いついたベネットが空き地の光景を見て、思わず数歩、たじろいだ。

「レドパイダ……どうして？ いつもはもっと森の奥の方にいるって言ってたのに……」

エミリアはゴルディからこの周辺に出没する魔物の特徴と習性を教えてもらっていた。薬草を採りに行く時に、魔物と遭遇しないように、遭遇しても逃げるができるようにする。それは薬草よりも先に憶えるべき基礎知識として教えられた。

フローラも山菜採りをしているぐらいなので、同じように教えてもらっていただろう。しかし、まさかこれほど村の近くにレドパイダのような森の奥にいるはずの魔物がいるとは思わなかった。

レドパイダは蜘蛛の形をした魔物で、その強力なアゴは人間の足ぐらい簡単に切断してしまう。成人男性であれば、一般人でも一対一ならなんとか勝てなくもないぐらいの強さである。しかし、レドパイダは集団で行動し、獲物を襲う。一匹を倒そうとしている間に他のレドパイダに襲い掛かれ、戦闘の素人では各個撃破されてしまう。そのため、素人には荷が重い魔物であった。

「べ、ベネット、人を呼んできて！」

エミリアは震える声でベネットを村に走らせようとした。

「エ、エミリアは、どうするんだよ？」

ベネットも震える声で彼女に聞き返した。ベネットよりもエミリアの方が足が速い。村に知らせに戻るなら、エミリアの方が適任なのはベネットも気が付いていた。

「僕は、足が速いから……。なんとか、注意をこっちに向けて、時間を稼ぐから……」

「ば、ばかやろう！ そ、そんなのは、男の仕事だ！」

ベネットが怒鳴った。恐怖で声が上ずっていたし、膝も震えていたが、エミリアの作戦は認めるわけにはいかなかった。

「いいから、早く！ 包囲が完成したら、一斉に襲い掛かるんだから。それまでに！」

エミリアもシュリルマンタの森での恐怖が蘇ってきそうになって、泣きそうになっていたが、ベネットに怒鳴り返すことでなんとか気を保っていた。

エミリアには、どちらが助けを呼びに行っても間に合わないことはわかっていた。

今はまだ包囲が完了していないから本格的に襲い掛からないが、万全の体制が整えば、レッドパイダは一斉に獲物に襲い掛かる。その攻撃の激しさは魔物に慣れた熟練の傭兵でも防ぎきれないほどである。

包囲の体制を整えさせないうちに速攻で倒すのが、このレッドパイダ退治の要点といわれている。

そして、フローラへの包囲が完成しつつある。もう、手遅れかもしれない。注意を引いても、無駄かもしれない。

しかし、エミリアは、年恰好は幼くなったとはいえ、精神的には十七か八の男である。自分よりもはるかに幼い子供が、無残に殺されようとしているのを黙って見ていれるほど、冷酷な生い立ちでは、おそらくなかった。少なくとも、エミリアはそう信じている。

「早く！」

エミリアはベネットを追い立てながら、足元の石を拾い上げた。

石をレッドパイダにぶつけて、フローラから気を逸らせるつもりであった。

「くっ！ すぐ戻るからな！」

ベネットも二人を犬死させるわけにはいかないと、苦渋の覚悟できびすを返して走り出そうとした。

「ベネット君、お願いね」

走り去るベネットの背中を見送り、エミリアは静かに微笑むと、

レドパイダに向かって投げる石を握りなおした。

「僕がなんとかしなくっちゃ……」

エミリアも覚悟を決めた。フローラを助けられるかどうかかわからない。自分自身も死ぬかもしれない。しかし、やるしかない。ここで助けようとしなければ、一生後悔するという自信があった。

彼女は知らない。もし、彼女がその手にした石を攻撃のつもりで全力で投げれば、彼女のあきれられるほどの戦闘能力でレドパイダを森ごと吹き飛ばしてしまっていただろう。もちろん、すぐそばにいるフローラも一緒に。

しかし、幸か不幸か、彼女の手から石が投げ放たれることは無かった。

エミリアの投げようとした石は、いつの間にかそばにいた青い鎧の青年が彼女の手から取り上げてられていた。

「なかなか、無茶なお嬢ちゃんだ。レドパイダは結構、足が速いんだぜ」

青年は取り上げた石を捨てながらエミリアの無謀に苦笑を浮かべた。

「邪魔するなよ！ こうする以外、どうしろっていうんだ！」

エミリアは驚きつつも、邪魔されたことで反射的に怒鳴り返した。「今から人呼びに行っても、戻ってきた時には、フローラは……」

エミリアはゴルディについていくといったのに、ゴルディにとつては雑魚同然の魔物にすら対抗できない自分の弱さに泣きそうになった。

「エミリア……」

なぜか、村に助けを呼びに行かせたベネットも青年のそばにいて、泣きそうなエミリアの手を取った。

「さて、そこでだ。ここは一つ、お兄さんたちに任せなさいって」青年はエミリアとベネットを後ろに下げると、腰の剣を抜き放った。

「ドガ！ クリーム！ いくぞ」

青年は振り返らずに誰かに呼びかけた。すると、屈強な戦士とローブをまとった女魔術師がエミリアたちの脇を通り抜けて青年に並んだ。

「こんな雑魚、さくつと片付けちゃいましょう」

ローブをまとった女魔術師は少し面倒そうに杖を構えた。

「油断するな。レッドパイダは仲間を呼ぶ」

屈強な戦士が彼女に忠告するが、それは本気ではなく、確認事項のようであった。

こうして、いきなり現れた三人はレッドパイダのいる戦場に躍り出た。それからの戦闘は、戦闘と呼ぶにはあまりに格が違いすぎた。

まずは、女魔術師が唱える呪文で発生した光の槍がフローラの周囲にいたレッドパイダを串刺しにした。フローラのとりあえずの安全を確保すると、青い鎧の青年がレッドパイダの群れの中に飛び込み、いとも簡単にレッドパイダを次々とほふって、フローラのところまでたどり着いた。

「よく頑張ったな」

青年が一言、声をかけるとフローラを抱き上げて、彼女を抱えたまま剣を振るいつつ後ろに下がった。青年の退路を確保するように大剣を振り回していた屈強な戦士が、青年がフローラを救助すると同時に前に出て、レッドパイダをひきつけ青年の撤退を支援した。

青年は女魔術師のそばまで来ると、担いでいたフローラを地面に下ろした。

「この子をよろしくな」

「まかせて。そっちの片付けも手伝う？」

「ドガと二人で十分だ。他にいるかもしれないから、そっちを警戒しておいてくれ」

青年と女魔術師は短く言葉を交わすと、再び青年はレッドパイダのいる空き地に向かい、凶暴な蜘蛛をいとも簡単に倒していった。

ほぼ最初の段階で半数以上は倒していたので、フローラを救助した後の掃討戦はあっけなく終了した。そして、戦闘が終了すると、

女魔術師が空き地を魔法でレッドパイダの死骸ごと焼き払った。

卵か何かが腐ったような匂いがして、エミリアはその刺激臭で突然発生して、あっという間に終了した戦闘で呆けていた脳が再起動した。

エミリアは助けられたフローラのところに駆け寄った。フローラは張り詰めていたものが切れて気を失っているものの、足に少しかすり傷がある程度で大きな怪我はしていなかった。

「よかった……」

エミリアはほっと胸をなでおろした。一瞬、魔法でフローラの怪我を治そうかと思ったが、普通でない精神状態で魔法が成功するかどうか不安だったし、怪我自体もかすり傷程度であったため、やめることのした。

そして、そこで、やっとフローラが助かった要因を思い出し、お礼を言おうと戦闘の後処理をしていた三人の方に近寄った。

「あの……」

「レッドパイダの体液は仲間を呼ぶ。こうやって焼き払っておかないと、次から次にやってくる。森に延焼はさんから安心しろ」

屈強な戦士が仏頂面だが、親切にエミリアたちに空き地を焼いている理由を説明をした。彼女もその知識は知っていたが、黙って大人しくその親切に頷いた。

空き地を焼く炎が消えると、青年たちも警戒態勢を解いて、剣を鞘に収めた。ベネットもようやく正気を取り戻したか、エミリアのところへやってきた。

「あの、助けてくれて、ありがとうございます」

エミリアとベネットは、誰だかは知らないがフローラを助けてくれた謎の三人に頭を下げた。

「どうってことないさ。それより、君たちはカペル村の人か？ それなら、ゴルディって神官を知らないか？」

青い鎧の青年が面倒そうにお礼を適当に受け流すと、真剣な顔で尋ねてきた。

「ゴルディさん？ 知ってるものにも、このエミリアのおじさんだよ？」

ベネットがエミリアを指差した。エミリアもその言葉に少し控えめだが頷いた。

「おじさん？ いや、俺たちが言っているのは――」

青い鎧の青年は短く刈りそろえた赤い髪をかきながら苦笑を浮かべた。ゴルディという名前は多くはないが珍しくない。同名の人物と間違えていると彼は思ったらしい。

「だから、大陸を旅して回る聖者で有名な、神官のゴルディさんでしょ？」

ベネットの言葉に三人は意外そうに顔を見合わせた。

「どうやら、人違いではなさそうだな。で、ゴルディは村にいるのか？」

屈強な戦士が改めて二人に尋ねた。ベネットはエミリアの方を見て、彼女がうなずくのを見てから答えた。

「三日前ぐらいに近くに強い魔物がいるからって、退治にいったよ。エミリアは留守番で村に残ったんだよ」

「その話は本当か？」

青い鎧の青年はエミリアに詰め寄り、肩でも掴みかねない勢いで迫ってきた。

「は、はい……。妹さんの仇の魔物だと思います。僕が一緒だと足手まといだから……」

エミリアはエプロンを両手で握りこみ俯きながら答えた。

「わかった。それじゃあ、悪いが、俺たちを村長の家に案内してくれないか？」

こうして、エミリアとベネットは三人を村長の家まで案内した。フローラは気絶しているので、屈強な戦士が背負って村まで運んできた。

フローラは村長の家でそのまま、寝かされ、大事をとって後でベス婆に見てもらったことになった。エミリアは関係者ということで、

そのまま村長や村の世話役たちと同席することになった。

「俺は、ランスロット。世間では俺のことは“青の勇者”と呼んでいる」

青い鎧の青年は村長に会うと、手短に自己紹介した。

短く刈りそろえた赤い髪が情熱的で、整った顔立ちに茶目っ気を含んだこげ茶の瞳は女の子に人気がありそうなオーラをこれでもかとももし出していた。

“青の勇者”のトレードマークなのだろう、青の鎧に包まれた身体は鍛えているのであろうが、均整の取れているので見た目は細身に感じられた。

エミリアは村へ向かう道すがら自己紹介を聞いており、勇者志望のベネットなどは“青の勇者”と聞いただけで、ひどく興奮していた。彼が言うには、最近名を上げてきた若手ナンバーワンの勇者らしいかった。噂の勇者の戦闘を間近で見れたと、興奮して顔を高潮させていた。

村の世話役たちも“青の勇者”の名声は知っているのか、自己紹介に少しざわついていた。

（でも、さっきの戦闘でもかっこよかったよな。心が男の僕でも、ちょっと惚れちゃいそうなぐらい……。あーあ、せっかく異世界に来たんだし、僕もできるなら、こんな風に活躍したいけど、ひ弱な小さな女の子の身体じゃ、無理だしな……）

エミリアは自分の今の身体を見てため息をついた。本当は、彼など足元にも及ばないほどの高い能力を持っているが、本人が気付かないのではどうしようもなかった。

「あたしはクリーム。ランスロットと一緒に旅している魔術師です」
女魔術師がやけに行儀よく頭を下げた。エミリアはその仕草が、先ほどの戦闘の時とは少し違って見え、猫をかぶっているのだろうかと思議そうに彼女を見つめた。

魔術師の象徴でもある、つばの広いとんがり帽子は今ほ脱いでいる。帽子に収まっていた栗色の長いつやのある髪があらわになって、

頭を下げるのにあわせてゆれて光を躍らせていた。優しげな茶色い瞳が優美に微笑むと、エミリアだけではなく、同席していた村長の娘でさえ少し顔を赤らめたほど魅力的であった。

ただ、優しげな顔立ちとは裏腹にゆったりとした濃緑色のローブの上からでもわかるほどの凶悪なほどナイスボディは村長たち、男衆の鼻の下を少し伸ばすのに効力を発揮していた。

（凶悪すぎるぞ、美人な上にそのプロポーションは。……だけど、きつとランスロットさんが好きなんだろうな。うん、きつとそうだと。うらやましいぞ。でも、ランスロットさんがそういうのに鈍感で気が付かなかったりするんだよな。もったいなすぎるぞ、鈍感主人公め！）

エミリアも心は男子高校生である。鼻の下が伸びそうになったが、ランスロットとの間柄を想像して、勝手に変な怒りを燃やしていた。「私はドガ。見ての通りの傭兵をしている。突然の来訪、無礼を許されよ」

屈強な戦士が最後に優美に頭を下げた。外見からは想像ができないほどの洗練された動きに、礼儀作法を知らないエミリアですら感嘆の声を上げそうになった。

オールバックにしたやや長い黒髪に日に焼けた褐色の肌。鎧を纏っていてもわかるほどの筋肉。道であつたら無条件で道を譲ること間違いないが、その黒い瞳には知的な光が宿り、見た目どおりの筋肉馬鹿でない事はすぐに理解できた。

（どうせ身体を変えられるなら、ああいう強い人にして欲しかったな）

エミリアはさっきの戦闘の様子を思い出し、筋骨逞しいドガをうらやましそうに見つめていた。そのエミリアの視線に気が付いたのか、ドガが彼女の方を見たため、急いで視線を外した。

エミリアが勝手なことを考えている間に、村長は自分たちも自己紹介をして、まずは、村人であるフローラたちを助けてくれたことにお礼を言った。

「当然のことをしたまでだ。礼には及ばねえよ」

ランスロットは少し横柄にそのお礼を軽く流した。普通、こうしたことがあると、なにかしらの謝礼を求めてくる場合が多いので、彼らの態度は横柄だが紳士的なものであった。

「それで、ランスロット様たちは、ゴルディさんの行方を捜してらっしゃるのです？」

村長は少し警戒をしながらランスロットに確認した。もし、彼らがゴルディと対立していたりすると、色々と厄介ごとを持ち込まれてしまうので、当然の反応であった。

「ああ、そうだ。知ってたら、教えてくれ。それと、様はやめてくれ。背中がむずがゆくなる」

ランスロットは真剣な表情になって村長にもう一度行方を尋ねた。「では、ランスロットさん。もし、差し障りなければ、理由を聞かせていただませんか？」

「構わねえよ。ゴルディのおっさんとは、一年ぐらい前にちよつとした魔物の討伐隊で一緒になった。正直、あれこれ説教臭いし、堅物だし、意気投合ってわけじゃなかった。だが、一緒に死線を潜り抜けて、『こいつとはやっていけそうだ』と思って、旅隊に誘ったんだ」

ランスロットが少し乱暴な言葉だが、出会いから丁寧に説明を始めるのに、村長は少し戸惑いを見せた。

「ゴルディさんは、目的があるからって、断ったんだけど、ランスロットが強引にしつこく誘ってね。ゴルディさんも根負けして、あたしたちの旅隊に入ってくれたの。ただし、用事ができれば抜けるということだね」

「それから一緒に旅をしていたのだが、半年前に、その『用事』ができたの旅隊を出て行った。元からの約束どおりなので仕方はないのだがな」

クリームとドガがランスロットがそのまま、半年間の冒険活劇を披露してしまわないように手短かに話を進めた。

「随分、端折ったな。まあ、だけど、その『用事』ってのを言わずに消えるのは、半年間一緒に旅した仲間失礼だろ？ 聞いたとしても言わないで、黙って消えやがったんだ」

ランスロットが鼻息を荒くして、腕を組んだ。話を端折られたことと、ゴルディの無言の脱退を思い出して、不機嫌になっていることは誰の目にも明らかであった。

「ランスロットのいう失礼はともかく、我々も礼儀正しいゴルディが理由も言わずに旅隊を抜けるのは不自然だと考えたのだ」

「それで調べてみたら、ゴルディさん、昔、家族を魔物に殺されたみたいなの。で、『用事』というのは、その仇敵の魔物を討つことだったわけ」

「そうだったのですか……」

魔物に襲われることも少なくないカペル村であったので、その場にはいた村人全員がゴルディの苦痛を少なからず理解した。

「んで、今までにも何回か、その仇の魔物と対戦したけど、連戦連敗。しかも、おっさん以外は皆殺しになっている」

ランスロットは話が佳境に入るとますます不機嫌になっていった。「そのおかげで、その筋では、『聖者』ではなく、『死神』というあだ名もついているらしい」

ドガが村人たちの知らないゴルディの二つ名を口にする、村長たちは少しざわついた。

「ゴルディさんが生き残ったのは、ただ単に強かったり、運がよかったからよ。誤解しないでね。傭兵なんかは縁起を担ぐ人が多いから、そんなあだ名がついたのよ」

クリームがドガの言葉を補足した。それで村人の動揺も幾分収まった。

「まあ、とにかく。あのおっさんの性格を考えると、仇の魔物を見つけたが、俺たちを巻き込みたくないとか、そういうふざけた理由で旅隊を抜けたんだろう。ひっ捕まえて、ぶん殴ってやる」

ランスロットはそう締めくくると、手のひらに拳を打ちつけた。

「それに関しては私も異存ない。他の者たちに全滅を恐れてゴルディを追い出したなど思われては迷惑この上ない」

ドガはランスロットに負けず劣らず、怒っているらしく、腕を組んで口を真一文字に結んだ。

「本当に失礼な話。あたしたちがやられてしまおうと思うなんて、実力を見損なっているわよね」

クリームも二人と気持ちは同様らしく、口を尖らせていた。

「というわけだ。ゴルディの居場所を教えてくれ。早いところ追いついて、おっさんを一発分殴って、そのまま、その魔物を討伐しなくちゃいけねえんだ」

ランスロットは村長に頭を下げた。

「お話はよくわかりました。しかし、我々もたいしたことは知らないのです」

村長はランスロットに頭を下げられ、困ったようにエミリアの方を向いた。しかし、エミリアも村長が知っていること以上の情報は知らない。

結局のところ、ゴルディが村を出る前に言っていた「魔物が北の鉾山都市あたりを目指している」こと、「西の森に罠があるかもしれないので、近寄らない方がいい」の二つだけを彼らに伝えるしかなかった。

第八話 仇敵襲来

「どうだった？」

ゴルディの住んでいた家から出てきたクリームは、ドガの問いかけに肩をすくめて首を振った。ゴルディの行方の手がかりを捜して家を調べてみたが、それらしいヒントは見つけられなかった。

「綺麗に片付けられていて手掛かり無し。急いでいたでしょうに相変わらずの几帳面を發揮したみたい」

クリームの言葉に、ドガはゴルディの綺麗好きは好感を持っていたが、今はその弊害に苦笑を浮かべるしかなかった。

「綺麗好きも良し悪しだな。ヒントぐらい置いていけよって」

ランスロットは短く刈りそろえた赤い髪を乱暴にかきむしった。

「仇の魔物を追っているのは間違いない。その魔物の居場所がわかればよいのだが」

ドガもさすがに苛立ちが混じった声で呟いた。

「クリーム。何とかならないのかよ？」

「無茶言わないでよ」

ランスロットが頼りはクリームだけと迫ったが、彼女は口をへの字に曲げた。

「ゴルディは前に戦った時に、その魔物の発する固有波動を記録しておいたんだと思う。その波動に反応するように調整した警戒術式を組み込んだ探知機を作ったんでしょ。それで大まかな場所を掴んで私たちと別れたのでしょうね。多分、このあたりに網を張って、魔物の細かな位置を特定して追跡しているのよ」

「それをこちらも見ればよいのだが……」

ドガがちらりとクリームを見たが、彼女は首を振った。

「その固有波動に反応するように調整したマジックアイテムがなければどうにもならないわよ。それを作るにも、その固有波動もわからないんじゃない、お手上げ。どこかに記録しているかもって、探した

「んだけどね」

クリームはゴルディの借りていた家を振り返った。家主のいない家が沈黙でそれに答えている。

「手掛かりがないとすると、仕方がない。西の森に入って北の鉾山都市方面を探すしかないな」

「何か大掛かりな魔法でも使ってくれるとわかるんだけどね」

クリームはランスロットの言葉に西に広がる広い森を頭に思い浮かべてため息をついた。人間一人を探すには森は広すぎる。

「それはないな。追っている魔物に気付かれる」

「わかってるわよっ。言ってみただけじゃない」

冷静なドガの応対にクリームは拗ねるようにそっぽを向いた。ドガはその様子を、黒い瞳に苦笑を浮かべて黙って見守った。現状にイラついているのは三人誰も同じであった。

「よし。今日はもう遅い。今晚はこの村に泊めてもらうことにしよう。明日の朝に西の森に入って北の鉾山都市へ向かおう」

そろそろ夕刻が迫っているのを見てランスロットが決定した。本当は今すぐにでも出発したいが、不案内な上に罠が張られているかもしれない森を夜間移動するのは自殺行為であった。

「了解した。では、出発するまでに村の人間から西の森の情報をできるだけ集めるようにしよう」

「そうね。それがよさそうね」

ドガとクリームもランスロットの決定を受け入れて、作戦会議は解散になった。

ランスロットは、すぐに追いかけれない苛立ちを抱きながらも気持ちを切り替え、さっさと村の方へと歩き出していた。

「あ、待ってよ、ランスロット。じゃあ、エミリアちゃん。案内ありがとうね」

「あ……」

エミリアは立ち去ろうとする彼らに声をかけようとしたが、その言葉を発する前に飲み込んだ。

「ためらうような覚悟なら村で待っている」

最後に残っていたドガが、エミリアの横を通り過ぎる時に冷たく彼女に告げた。

悠然と歩き去っていく戦士の後姿を見つめながら、エミリアはその言葉を歯噛みして、スカートを握り締めるしかできなかった。

「力さえあれば、僕だって……」

まなじりに涙が浮かびそうになったのを必死で堪えた。泣いてしまえば、楽になれるが終わってしまう気がした。涙をこらえている間にランスロットたちは見えなくなっていた。

エミリアはいつまでもここにいるわけにはいかないと、村に戻ろうと一歩足を踏み出した。それとほぼ同時に、村の方から爆音が響いた。

「なっ?!」

地面を揺らし、腹の底に響くような轟音が鼓膜を揺らした。普通ではありえない爆発音に、エミリアは不安が沸き起こり、何も考えずに村へと駆け出した。

村にたどり着き、エミリアは目の前に広がる光景に絶句した。

村の端にあった何軒かの家が原形をとどめず崩れている。そして、そこから上がった炎が生き物のようにうねり、天を焦がして周囲の家も飲み込もうとしていた。村人たちはいきなりの爆発に右往左往して、全く統制が取れていない。火を消そうとするもの、燃えようとする家から家財道具を運び出そうとするもの、何はともあれ逃げようとするものが入り混じって狭い小さな村だが混乱を極めていた。

「な、なんなんだ？」

エミリアは呆然とその光景を見つめていると、誰かが叫んだ。

「魔物だ！」

その声が喧騒の中に響き、さらに村はパニックになった。混乱に拍車がかかり、喧騒が悲鳴に変わった。

悲鳴が響く中、燃え盛る炎の一部が切り取られ、虚無の漆黒になったように見えた。その虚無は禍々しく、見ているだけで気分が悪

くなりそうな何かを放っている。

村人たちもその禍々しい気配を感じて、その虚無の漆黒を見つめた。見つめてしまうと、逃げ出したい衝動はあるが、身体がすくんで金縛りにあったように動けない。炎に食い荒らされる家を囲み、村人たちはまるでデク人形のように立ち尽くすだけだった。

「くっくくっ。逢いたかったよ、カペル村の諸君。はじめましてと言っておこう。私の名はラプラス。君たちの言うところの、魔物だ」

漆黒の虚無はひと揺れしたかと思うと、白い仮面が浮かび上がった。炎を背景にしているにもかかわらず、白い仮面は目に焼きつくほど鮮明さで誰もが目を奪われた。

「ラプラス……」

エミリアは咄嗟に魔物に見つからないよう建物の影に隠れたが、その名前を耳にし、一瞬だが見た魔物の特徴から、その魔物がゴルディの追っている仇敵であることを確信した。

「おや？ この村にはゴルディ君がいるはずだが、不在のようだね。待っていてくれると思ったのだから？」

ラプラスは薄ら笑いを浮かべながら、わざとらしく周囲を見渡した。見渡し終わると大きく首を振った。

「ああ、私を恐れて逃げたのか。私が東からここに来ることは彼にはあらかじめ教えておいたはずだというのに」

ラプラスの言葉は村人たちの間に衝撃を走らせた。

「そんな、ゴルディさんが……」

そういつつも、あまりにもタイミングが良すぎる彼の出立。先ほどのドガの口にした「死神」の二つ名。村人たちが言葉の毒に犯されるのは、さほど時間が必要でないように見えた。

「そうだね。かわいそうに君たちは、彼に私へのいけにえにされたのだよ。ああ、かわいそうに。……そうだ。せめてもの慰めに、これからたっぷり君たちには本物以上の地獄を見せてあげよう」

ラプラスは心底愉快そうに笑い声をあげ、村人たちは絶望でその

場にへたり込みそうになった。

「待ちな。その外道」

村の路地の一つから人影が現れ、ラプラスと村人たちの間に割って入った。現れたのは三人。その背中が炎をバツクに浮かび上がった。

「ほう？　我が前に立つ貴様らは何者だ？」

「外道に名乗る名前は持ち合わせていないが、冥途の土産に特別サ―ビスだ。俺の名はランスロット。青の勇者、ランスロットだ」

剣を抜き放ち、高らかと名乗りをあげた。青い甲冑が炎に輝き、村人たちはその希望に金縛りを解かれ始めていた。

「ラプラス。運が悪かったな。ゴルディのおっさんは不在だが、代わりに俺たちが相手してやるぜ。おっさんの手を煩わせるまでもねえ」

エミリアには背中を向けているので見えないが、多分、ランスロットが不敵に笑っているのが台詞から容易に読み取れた。

「それに、あんたごとき魔物にゴルディが尻尾巻いて逃げるなんてありえないわ。どうせ、裏をかいて村を襲ったんでしょ。セコイ魔物ね」

クリームが口悪く魔物をののしった。

「ああ、まったくだ。大天使ラプラスと同じ名前というだけでも、恐れ多い。その上に小賢しいとは、名前負けも良いところだ。だが、改名の心配は要らぬ。ここで滅するのだからな」

ドガがむすりとしたまま大剣を構えた。

「この魔物は俺たちが始末する。村のみんなは避難してくれ」

ランスロットの声にエミリアははっとなり、半覚醒の村人たちに駆け寄った。

「みんな、こっちに！」

村人たちもエミリアの声に正気を取り戻し、彼女が誘導するままに森の中に避難し始めた。

「ゴルディさんの家へ。あそこなら、距離も離れているから」

エミリアは声を張り上げて、ゴルディの家へと誘導した。村から少し離れている以外にも、あの近辺はゴルディがエミリアのために魔物避けの結界が村よりも強く張ってくれていた。

「慌てないで！ 勇者様がいるのだから安心して！」

避難誘導している間にも轟音が響いた。ランスロットたちが戦闘を開始したのだが、その轟音に村人たちの不安は募るばかりであった。

「落ち着いて！ 慌てないで！」

エミリアはここでパニックを起こされるのが一番まずいと轟音に負けないように声を張り上げた。

その少し前、ランスロットたちも轟音を聞きつけ、村に急いだ。首筋がちりちりと痛むほどの強烈な魔物の気配にランスロットは軽く舌打ちした。

「ゴルディのおっさんがいない時に、おっさんの仇に遭遇するとはな」

これだけの気配を発することのできる魔物となれば、魔王軍でも幹部クラスに匹敵する。魔王軍の侵略を受けていないような国で、このレベルの魔物がうようよいいるはずもない。十中八九、ゴルディの追っている魔物と推測できた。

「ランスロット、気をつけて。さっき感じた魔法、かなり強力なやつよ」

ランスロットの隣にいたクリームが忠告した。

「わかってる。だが、ゴルディのおっさんがいないんだ。ちよつと、強引でも一気に叩くぞ」

回復薬や戦闘に必要な装備を身につけ、それ以外の荷物はその場に放置し、臨戦態勢を整えた。

「回復の手段が限られている上、支援魔法も制限されている。それがいいだろう」

いつの間にか追いついてきたドガが彼の作戦に同意した。彼も既

に荷物を降ろして臨戦態勢を整えていた。

「奇襲をかける？」

「いや、強力な魔法を使っただんなら、クリームの宝玉が共鳴起こしているはずだ。向こうも俺たちのことは感ずいてだろう。村人を巻き込むように罠を張られる危険が高い」

クリームの提案をランスロットは却下して、正面に回りこんで直接対決を選択した。

ランスロットの勘は当たっていた。ラプラスはまず、強力な魔法を使うことで周囲の呪紋に共鳴反応を起こさせて、魔法が使える人間を探索していた。その探索方法では魔法のレベルまでは不明だが、呪紋をもつものがどこにいるかは明らかにできる。

ラプラスはこうしてランスロットたちの存在に気が付いた。ラプラスは彼らが奇襲を仕掛けてくれば、村人を二、三人ほど身代わりの盾にするつもりでいた。一般人を使った盾など、物理的にはたいした役には立たない。だが、相手に精神的ショックが与えられるのは、ラプラスとしては喜ばしいことであった。

もし、隠れて出てこないのであれば、隠れているだろう場所に魔法を打ち込み殲滅するつもりでいた。もし、移動したとしても、その魔法で居場所を感知することができる。魔法使いを見捨てない限り逃げも隠れもできない。

しかし、ランスロットたちはラプラスの予想を裏切り、ラプラスの真正面に立ちふさがり、大見得を切ったのである。

「俺の名はランスロット。青の勇者、ランスロットだ」

名乗りを上げるランスロットを見て、ラプラスは嘲笑うかのように見下した。

「最近、売り出し中の“青の勇者”とやらは君か。その实力を見せてもらおうでしょう」

ラプラスが漆黒の外套を揺らした。外套から伸びた影が地面をえぐりながら這いより、漆黒の槍となりランスロットたちに襲い掛かった。

ランスロットとドガはその漆黒の槍をやすやすとはじき返した。地面をえぐるほどの攻撃力があっても、それほど速さはなかった。

「ほう？ 私の攻撃を弾くとは、良い武器だな」

半端な武器では漆黒の槍に触れただけで、剣身がえぐられて、防ぐこともできない。

「武器だけじゃねえぜ、腕もいいんだよ」

「だが、攻めて来なければ私は倒せはしない。それとも、攻撃を防ぐのが精一杯なのかね？」

ランスロットの軽口に白い仮面が嘲笑を浮かべた。ラプラスの狙いは明らかであった。すでに呪文の詠唱に入っているクリームを攻撃するため、ランスロットかドガ、どちらか一人でも、彼女のガードを外させようという単純な挑発であった。こんな見え透いた挑発に乗る馬鹿はいない。

「言われなくても攻めてやるよ」

しかし、その挑発に乗るようにランスロットは、剣を地面に水平にし、顔の横に構えた。

「我が剣は迅雷のごとく速きもの

剣聖エドワードの加護よ

我が剣に宿りて魔を打ち滅ぼし給え！」

ランスロットは剣士が使う滅魔祓詞めつまばいしとの一つを唱えた。ドガも同じように滅魔祓詞を唱えていた。

滅魔祓詞はそれ自体に何の効果もない。戦いに臨む戦士が精神集中するための自己暗示のためのものであった。しかし、自己暗示でも精神集中できれば普段以上の力を発揮することができる。

「祓詞を唱える間、待っておいてやったのだ。それで攻めてこないなど、つまらぬことはしないでもらいたいのだな。勇者の名にかけて」

ラプラスは更にランスロットたちを挑発し続けた。

ラプラスは鷹揚に構えているが、クリームの呪文詠唱はすでに佳境に入っている。ランスロットたちはそのまま、あと少し時間を稼

げば、戦闘を有利に進めることができる。だが――

「ああ、待たせたな。いくぜ、外道！」

挑発に乗った上に予告つきでランスロットとドガは、同時にラプラスに向かつて飛び込むように駆け出した。

「勇者といっても蛮勇の勇者か。安い挑発に乗って、魔法使いの守りを外すとは愚かの極みだな。その魔法使いの死を高い代償として悔やむといい」

外套から突き出た漆黒の槍は呪文詠唱中のクリームに向かって、先ほどの比ではないスピードで襲い掛かった。最初の槍はわざと遅くしていた、フェイクだった。

「そんなことは想定内なんだよっ」

ランスロットは剣を振り上げ、走りながら漆黒の槍を真っ二つに叩き切った。止まっていたとしても叩き切るのは難しいと思える速度の影を、走りながら切るなど神技に近いことをこともなげにやってのけた。

ラプラスもこの剣の技にはさすがに意表をつかれた。そして、斬り込んでくる二人に対し、迎撃体制を整えた。しかし、ランスロットとドガも、ラプラスの間合いの外で急に足を止めた。

ラプラスは再び意表をつかれ、その意図を察することができなかったが、すぐにその理由が判明した。

「おまたせ、ランスロット」

クリームは呪文の詠唱が終わり、足元に浮かぶ魔法陣が完成していた。あとは“力ある言葉”で魔法が発動する状態であった。

「やっちまいな、クリーム！」

ランスロットの言葉にクリームは不敵に笑みを浮かべ、発動呪言を発した。

「フレイナズン！」

制御用の魔法陣が部分開放され、開放された箇所から六本の炎柱が吹き上がった。その炎は蛇のようにうねり、周囲に雷を纏うとラプラスに一斉に襲い掛かった。前後左右、上空からも二本の同時攻

撃である。

ラプラスのいた場所は炎と雷に包まれ、漆黒の外套と白い仮面は掻き消えた。全方向からの同時攻撃は避けることが難しい上に、狭い空間に短時間、火力が集中するため攻撃力は強力無比である。ラプラスのいた周囲の石畳が溶けているのを見れば、その熱量の膨大さは想像できた。

「おりゃあっ！」

魔法の炎でラプラスの姿はかき消されていたが、ランスロットは炎を恐れずに迷わずラプラスに斬りかかった。ドガも同じようにその大剣をラプラスがいた場所に振り下ろした。

剣を振りぬくと、そのままクリームのそばまで二人は後退し、ラプラスからの反撃を警戒した。

魔法の炎が薄れると先ほどと変わらずにラプラスの白い仮面が笑っていた。

「フレイナズンか……。数年前に呪紋が開発されたと聞いたが、それをもう実戦で使えるものがあるとはな」

「うちのクリームは魔法開発は苦手だが、使う分には天才なんですね。『初見のクリーム』の二つ名は伊達じゃないぜ」

ランスロットは内心の焦燥を隠し、余裕の表情を崩さずにラプラスに答えた。

新しい魔法が研究施設の中で完成しても、それを解析して呪紋を作り、それを刻むための条件設定にかなりの時間と費用がかかる。そこまですてきたとしても、初期の呪紋は不安定で使用するにはよほどの好条件を整えなければならない。実戦レベルで使えるようになるには短くて十数年、長いものだと百年単位で改良をしていかなければならない。

開発されて間もない不安定な呪紋を、天性のバランス感覚で制御してしまう。まさに彼女は魔法を使うことに関しては百年に一人の天才と、魔法開発者の間ではデータ採取のために引っ張りだこであった。

しかし、その開発されたばかりの対個人用の呪文としては、最強クラスの攻撃力を持つフレイナズンの直撃をラプラスは食らっても平然としている。三人が、この魔物が只者ではないことを再認識するには十分な材料であった。

「くつくくく。これは楽しませてくれそうだな」

ラプラスは心底愉快そうに笑うと漆黒の槍を再び繰り出した。ランスロットはそれを剣で弾き返しながら、わずかにクリームの方に顔を向けた。

「クリーム。直接攻撃してみた感じ、手ごたえはある。だが、どうも精神体系統の魔物みたいで、直接攻撃には強そうだ。魔法の方はどうだった？」

「そうね。さっきの手ごたえから魔法の防御力は平凡みたい。中級以上ならダメージ与えられるわ。でも、フレイナズンの直撃食らって平気なんて……。どんな体力しているのかしら？」

クリームは眉をひそめて、長引くだろう戦いを想像して、軽くため息をついた。経験からすると、体力値だけは魔王並みにあるかもしれない。そうになると、彼女らには嬉しくない長期の消耗戦となる。

「長期戦は集中力の維持が肝だ。気を抜くな」

ドガも辟易とした顔をしていたが、年長者らしく気を引き締めた。ちなみに、こうしている間もラプラスからの攻撃は続いているが、ランスロットとドガが防御に徹すれば、詠唱中でないクリームを守りつつ会話するぐらいは十分可能であった。

「じゃあ、ちと時間がかかるが、地道に削っていくとするか。俺とドガは武器に魔法付加して攻撃する。どっちかが、クリームの護衛に残る。いいな？」

ランスロットがリーダーらしくまとめると、二人を安心させるように茶目っ気たっぷりのこげ茶色の瞳に笑みを浮かべた。

「了解。せこいのは性に合わないし、派手じゃないのは苦手なんだけど」

クリームは笑顔で文句を言いながら、杖を構えなおして、次の攻

撃魔法の詠唱に入った。

「贅沢も言ってられないだろう。了解した」

ドガは剣帯にぶら下げていた宝珠をもぎると、剣の鏢あたりにある穴にそれを装着した。

「我が剣に斬れぬものなし

剣鬼ジークの御霊よ

我が剣に力を与え魔を斬り滅ぼし給え！」

滅魔祓詞を唱えた。それをきっかけに宝珠に閉じ込めてあった魔法が開放され、ドガの大剣は刀身に炎をまとう。滅魔祓詞はこうした魔法付加の宝珠の起動鍵として使われる側面もあった。

「それじゃあ、とっとと始めて、さっさと片付けるぞ」

ランスロットもドガと同じように宝珠を剣に装着し、滅魔祓詞を唱えた。彼の場合、刀身に雷を帯び、青い光を放っていた。これこそが“青の勇者”という名の、真の由来であった。

「行くぞ！」

ランスロットの掛け声と共に再び戦闘は開始された。

第九話 勇気と初陣

轟音が響いた。

かなり日が傾き、太陽は既に木立の中に隠れ、ゴルディの家の周りは夕闇に包まれていた。その暗い家の周囲には所狭しと村人たちが身を寄せ合って不安に震えていた。

「ああ、神様……」

祈りの言葉がうめきのようにあちこちから聞こえていた。エミリアもこちらの神には馴染みはなかったが、一緒になって祈りを捧げた。

村人たちは一時、避難をしたものの長引く戦いに不安を募らせていた。村長をはじめとする、村の世話役たちが安心するように呼びかけていたが、保証のない言葉などで安心できるはずもなく、焼け石に水であった。

エミリアもランスロットたちが負けることは想像しなかったが、ゴルディが長年追っている魔物である。生半可なことでは倒せないだろうと思っていた。そして、この長期戦がそれを証明していた。

（あの魔物はエミリアの仇なのに僕は何もできないでこんなところで震えているだけなんて……ゴルディさんのいない今だから、僕は何かしなくちゃいけないのに……）

そう思うが足が前に出ない。騒ぎがある直前、ドガに言われた台詞が頭に響いた。

「覚悟がないのなら村で待っている」

確かにその通りだと思った。しかし、それで納得できるほどエミリアは世慣れしていなかった。少女の体になっているとはいえ、心は男子高校生のそれである。それなりの見栄はあった。

「でも……」

そういつて、自分の今の姿を見た。目に入ってくるのは、小さい

手に近い地面。年端の行かない自分の姿を認識すると、その言い訳の庇護に隠れようとする自分を見つけ、自己嫌悪に陥った。

「エミリアちゃん」

落ち込んでいるエミリアは不意に声をかけられて声のした方を見上げた。そこにはいつも明るいハンナがどこか不安そうな顔つきをして立っていた。

「エミリアちゃん、うちのベネットを見なかったかい？」

ハンナはそつと内緒話をするように小さな声でエミリアに尋ねた。
「ベネット君？」

エミリアは小首をかしげた。確か、エミリアが避難誘導を始めると、すぐにそれを手伝ってくれて、途中で村の世話役と誘導役を代わってもらって一緒に避難していたはずだった。

「さっきまではいたんだけど、いなくなっただよ。じつとしておくように言っておいたのに、あの子は……」

ハンナは村人を安心させるために村長たちと一緒に声をかけていた。そのため、自分の子供たちへの注意がおろそかになっていた。「見かけたら、いわれた場所にるように言っておいてくれ。まったく、しょうがない子だよ」

ハンナはそうお願いして無理からに明るい表情をして笑うと、再び、自分の役割に戻り、村人たちを元気づけていた。エミリアはその姿を見て、胸の奥が熱くなり、急に自分が恥ずかしくなった。

「僕はいい訳ばかりしている……」

エミリアはとにかく、今、自分にできること——ベネットを探すことにした。

子供のことは子供に聞くのが一番という、この一ヶ月で学んだ教訓を元にベネットと親しい子供に聞いて回った。しかし、誰も彼を見ていなかった。というよりも、誰もが魔物の恐ろしさと避難することではいっばいいばいで他人のことを気にかけるほど余裕はなかった。

エミリアは作戦を変更しようと思った時に誰かに突然、袖を引か

れた。

「フローラ、さん？」

見ると彼女よりも二つ年上の彼女が、まるで幼子のようにエミリアの袖口を掴んでいた。

「怪我がいたむんですか？ それなら、ベス婆さんのところへ……」

ベス婆は襲撃や避難のときに怪我をした村人たちをゴルディの家の中に運び込ませて彼らの治療に当たっていた。幸い、命に関わるような怪我をした者はいなかった。エミリアも治療を手伝っていたが、あらかた応急処置が済んだので、大人と交代して外に出ていたのであった。

しかし、フローラは俯いたまま首を左右に振った。

「ちがうの……」

いつもは明るい彼女が半分泣きそうな小さな声を出すのを聞いて、エミリアは少しうろたえた。少女になったとはいえ、心は男の子である。女の子の涙、しかも、子供の涙に勝てるわけもない。

「ど、どうしたんです？ いったい」

エミリアはフローラをなだめながら理由を聞きだそうとした。

「あたしは止めたのよ。危ないからって。でも、隠れて行けば大丈夫だって……。すぐに戻ってくるって言ってたから……」

フローラは泣きそうな声でエミリアに告白した。

エミリアは要領の得ないフローラの話を、少し時間をかけて聞き出した。

まとめると、フローラは昔、父親から人形を買ってもらった。この時代、子供に人形を買い与えるなど、よほど裕福な家でなければないことだが、猟師であった彼女の父親が思いも寄らぬ大物を仕留め、その臨時収入で買ったそうだ。

その父親は何年前か前、村の近くに魔物が現れたときに運悪く遭遇して大怪我を負い、その怪我が元で命を落とした。もともと、自慢の宝物であった人形だったが、父親との思い出の品となったことで、フローラは命の次に大事にしていた。

しかし、ラプラスの襲撃で急に避難をすることになり、家にその人形を置いてきてしまったのだという。それもそのはず、彼女はレドパイダに襲われ怪我をしていたので、大事を取って村長の家で寝かされていた。そこに襲撃があり、自分の家に戻ることもできずに避難することになった。

フローラの家は彼女と母親の二人暮らしで、彼女の母親は娘の怪我をまだ聞いておらず、畑で農作業をしている時に襲撃があり、そのまま村に入らずゴルディの家に避難してきた。

大事な人形を家に置いてきたことで、泣きそうになっているところにベネットがやって来て、事情を聞き、フローラの人形を取りに彼女の家へと向かったというのであった。

ベネットはすぐにもどってくるといって村に向かったが、なかなか戻ってこない。ベネットは心配だったが、それを言えば、彼女のわがままで彼を村に行かせたことに大人たちは怒るだろうと、言うのをためらっていたのであった。

フローラもしっかりしているようで、まだ十二歳ほどの子供である。そのためらいを責めるのは酷といえよう。大人たちが不安でぴりぴりと爆発しそうな空気を放っている今であれば、なおさらである。

「安心して、フローラ。フローラは何も悪くないから。大丈夫。ベネット君はすばしっこいから、きっと平気だから」

エミリアはたまりかねて泣き出したフローラの頭をなでた。小さなエミリアが自分よりも歳が上で、背も高いフローラの頭をなでるのは、周囲からは奇妙に見えたかもしれない。しかし、幸いにも周囲は自分たちの明日のことで頭が一杯で、彼女らのことなどあまり注意を払っていなかった。

「ベネット君は勇者になるんだから、ああみえても強いんだよ。だから、大丈夫」

「うん……」

エミリアの言葉に少し落ち着きを取り戻したフローラはやっと泣

くのをやめた。ちょうど、その時にフローラの母親が彼女を探しにやってきたので、彼女を母親の元に返した。

「フローラさん、きつと大丈夫だから」

「うん。ありがとう、エミリアちゃん。……あたしの方がお姉さんなのに、励まされてばかりだね」

「そんなことないよ。フローラさんにはいつも元気をもらってるもん」

エミリアは笑顔で応えると、フローラも少し辛そうだが笑顔を浮かべ、母親と一緒に割り当てられている避難場所に戻っていった。

フローラと別れて、エミリアは覚悟を決めた。

「ベネット君を連れ戻しに行こう。フローラの家は戦闘があった場所と離れているから無茶しなければ大丈夫。そつと行って、そつと連れ帰ってこよう。これが今僕にできる最大のことだ」

エミリアは村人に気づかれないように、そつと激戦の繰り広げられる村へと急いだ。

村に入る直前で小道を外れ、木々の茂みを音を立てないように慎重に進んだ。村の中を進むよりは、村の周囲を囲んでいる森の中を進んだ方が茂みに隠れて見つかりにくい判断したのだった。それに、フローラの家は村でも外側に近いところにある。

村のどこかで繰り広げられている戦闘の余波——何かが壊れる音、爆発する音、かすかな熱風を感じて、エミリアは足がすぐみそうになるのを必死にこらえながら目的地に急いだ。

そろそろフローラの家近くという時に、不意に彼女の近くで破壊の不協和音が響いた。

何事かと、木々の隙間からそつと村の方を窺うと、まさに目の前で戦いが繰り広げられていた。避難を始めた時は村の反対側が戦場だったので、油断していたが、長い戦闘で戦闘の場所が移動していたのであった。

「これじゃあ、下手に動けないよ。フローラの家、見えてるのに」
エミリアはいらだちを感じたが、ここで無茶するほど馬鹿ではな

い。その場で息を潜めて、ラプラスに見つからないようにした。とにかく、今は戦場が移動するのを待つ以外に彼女にできることはなかった。

何かの拍子で戦場がエミリアの方に移動するかもしれないと、そうなる前にすぐに逃げられるように、茂みの隙間からランスロットたちとラプラスの戦いをのぞき見た。

のぞき見て、彼らの戦闘は、エミリアにはまるで特殊効果を満載した映画のように見えた。しかし、それが映画ではなく現実なのは、効果音ではありえない破壊の音や、何かが焼けた煙の匂いでわかった。そして、なによりも、命のやり取りをしている緊迫感が発する空気が肌を刺すようにして伝わってきていた。

「これが、戦闘……」

エミリアは映画でもない、ゲームでもない本物の戦闘を目の当たりにして、その空気に呑まれていた。

ランスロットたちの対ラプラス戦の主力は、クリームの魔法であった。ラプラスに対し、中級クラスの魔法を着実に命中させて、ダメージを与えている。ランスロットやドガも交代でクリームを守りつつ、ラプラスにヒットアンドアウェーを繰り返して援護していた。

一見するとランスロットたちばかりが攻撃している一方的な戦いのようであったが、ラプラスは単調な攻撃を繰り返して、それに慣れたところに突如として攻撃を変化させる。突然の変化に対応が遅れて、ランスロットたちに少なからずダメージを与えていた。

耐久力に自信のあるラプラスはある程度の被ダメージを甘受して、確実にランスロットたちの体力を削り取っていた。そういう意味では、ラプラスの一方的な戦闘と言えなくもない。

戦闘を始めて既に一時間は経過して、ランスロットたちにも疲労の色が見え隠れし始めていた。そのおかげか、単調な攻撃ですら捌くのが危ない時も見られた。

ランスロットたちは、手詰まりになる前に少し後退して、疲労回

復の時間を稼ぎにかかった。エミリアの隠れている場所からはさほど離れていないため、耳を澄ませば、彼らの会話が聞き取れた。

「ちっ。体力があるから消耗戦に持ち込んでいたぶってやがる」

ラプラスは明らかに決戦するだけの特技を持っているが、それを使おうとしていなかった。

「勝負を決める大技は、それだけに隙が大きいのだろう。向こうもぎりぎりなのだ。隙を見せるな。付け込まれるぞ」

「わかってはいるけど、これはしんどいわ」

クリームは、戦闘でつばに切れ目が入った帽子を気にしながら頬を膨らませた。

「この帽子、気に入っていたのに。最悪」

魔法攻撃を主体にしている作戦でガードを二人に任せているだけに、クリームが一番攻撃を受けていた。帽子どころか、ローブはあちこち無残に鉤裂きになって、ローブの色が濃緑色でわかりにくい血に濡れている場所もある。

「直接攻撃主体に切り替えるか？」

クリームのダメージが大きいとみて、ランスロットが作戦変更を口にした。しかし、即座にクリームに却下された。

「相手はそれを待っていると思う。打撃を与えようと焦って懐に入ってくれば、それから一人ずつ仕留めるつもりよ」

彼らの今の戦術では、前衛役はラプラスに攻撃するよりも、足止めるのが大きな役目である。そのために相手に隙がない限り、踏み込んで攻撃したりしないでいた。あくまで、主戦はクリームの魔法というのを徹底していた。

前衛はラプラスを足止めすることで魔法の命中率を上げているし、隙を狙って攻撃していることでクリームへの攻撃も容易にできないようにしている。

その前衛が攻撃に転じることになれば、今よりも危険を冒して踏み込まなければいけない。そうなれば、相手へのダメージは大きくなるが、その分、前衛が食らうかもしれない攻撃も増えるし、攻撃

に失敗すれば、大きな隙を作ってしまう。

ラプラスが、相手が懐に入ったところをカウンターで仕留める奥の手を持っているだろうことをクリームは魔術師として気配を感じていた。

「このまま、続行だな」

ギリ貧とわかりながらも選択肢のないことにドガは苦渋の表情で断言した。

ランスロットは腰の薬袋を手を入れた。細長いガラス瓶に入った回復薬はあと三本しかない。

「ちっ。あと、これだけか」

心もとない回復薬の残りを確認して舌打ちした。しかも、クリームとドガはすでに全ての回復薬を使いきっていた。ランスロットは俊敏で剣技が優れていたため一番ダメージの少なかったので、残っているだけであった。

「くそっ。せめて、回復魔法が使えるやつがいればな」

ランスロットは自分の回復薬をクリームとドガに一本ずつ分け与えた。

「それは言わない約束でしょ」

クリームが回復薬を受け取りながら明るく言い返すと、ランスロットも笑みをこぼした。

「でも、これでわかっただろ、クリーム？　こういうことがあるからアイテムは大事に使わないといけないんだ。いつも湯水のように使っているから、肝心な時に不足するんだぞ」

「そういうランスロットは、ここぞというときに使わずに危ない目に遭ってるじゃない。結局、最後は消費期限が切れて使えなくなっちゃうのよね。そっちの方がもったいないわよ」

ランスロットの苦言にクリームが頬を膨らませて反論した。

「おい。戦闘中だぞ。そういう喧嘩は終わってからしろ」

ドガは注意をしたものの、顔は笑っていた。戦闘で張り詰めて疲労した神経を、彼らは軽口をいいあってリフレッシュしていた。

「ここで心が折れたら負けだぞ。もう一息だ」

そして、再び緊張感を高め、気合を入れた。

「当たり前だ。俺の心も名前も、剣よりも硬い。そう簡単に折れるかよ」

ランスロットが陽気にドガに言い返すと気合を入れなおし、剣を握りを確認した。

「そういうこと。いつもの通りにすれば、あたしたちは無敵よ」

クリームは回復薬のビンのふたを開けて、中に封じ込められた回復魔法を開放した。完全回復とまではいかないが、それでも体力を半分程度までは回復することができた。

「そうだ。自分のできることをするだけ。ただそれだけだ」

ドガもランスロットからもらった最後の回復薬を開放して、体力を三分の一程度まで回復すると、再びラプラスとの間合いを詰めた。

「自分のできること……」

エミリアは茂みの中で彼らの会話を聞きながら唇をかんだ。

自分にできることは回復魔法をかけること。だが、ゴルディから聞いた話では、ランスロットたちのような魔物と戦う人間に初級回復魔法のファイミをかけたところで、生命力が高いので大した役には立たない。

「……ベホイド」

一度だけゴルディが大怪我した村人を治すのに使っているのを見たことがある。呪文もファイミと似ているので憶えている。しかし、今までやったことのない魔法を一発で成功させる自信はまったくなかった。

「きゃっ！」

出ることも引くこともできずにまんじりしていると、チームワイクの一瞬の隙を付いて潜り込ませた漆黒の槍がクリームの足をかすめて、派手に血吹雪が舞った。

「大丈夫か、クリーム！ 回復を――」

ランスロットの持っていた最後の一回分を渡そうとしたが、クリ

ームは杖で身体を支え、それをきっぱりと拒んだ。

「まだ、平気。薬を使うのはこの魔法をあいつに叩き込んでから」
かなりの激痛だったために、詠唱中に練り上げた魔力は霧散していたが、もう一度呪文を詠唱するために精神統一に入っていた。

「それまで、俺が必ず守る！」

ランスロットは自分のミスだと、剣を握る手に力を込めた。そして、いかなる攻撃もクリームに届かせないと、彼女を守る盾となった。クリームはその後姿を見て、安心して魔法に集中した。そこには信頼の絆が確かに存在した。

ドガもランスロットと同じく責任を感じ、クリームへの攻撃をさせないように前衛で攻撃を激しくしていたが、その分、防御が手薄になったか、ラプラスの仕掛けた予期せぬ方向からの攻撃に対応が遅れた。

「ぐっ！」

致命傷こそは回避できたが、かなりの深手を負って弾き飛ばされた。

受身をとって、とどめの一撃はなんとか払いのけたものの、口元から血がにじんで、見るからに立っているのがやっとなんといった感じであった。

「ドガ！」

ランスロットはクリームの護衛のために動くわけには行かない。しかし、重傷のドガを見て、助けにいけないことで浮き足立ちかけていた。

「大丈夫だ。これぐらいということはない。だから、そこを離れるな。絶対だ！」

ドガは足を踏ん張って倒れるのを防ぎつつ、ランスロットを落ち着かせるように、声を張った。その間もラプラスの攻撃は止まず、なんとか致命傷は避けているが、確実に生命力を削り取られていていた。

「くっ！」

前衛がいるからこそ、ラプラスを足止めすることができ、クリームへの攻撃も幾分緩慢になる。前衛がいなくなれば、ラプラスは自由に間合いと方向を変えて、好きな方法で攻撃することができる。それほどラプラスは素早くないとはいえ、漆黒の槍を自由自在に操って攻撃してくる。護衛が二人いれば、お互いに死角をフオーロしあえる。だが、一人ではいくら剣技に優れるランスロットであっても守りきる自信はなかった。

ドガはすでに立っているのがやっとで、次の一撃はかすただけでも戦闘不能になることは火を見るより明らかであった。

「正直、ここまで楽しませてくれるとは思っていませんでしたが、そろそろ幕引きとしましょう」

ラプラスは詰みの段階に入ったと、勝利宣言するかのように漆黒の外套を広げた。

「くそっ！」

エミリアはわけもわからず飛び出していた。ここで飛び出さなければ男が廃る。勇気を振り絞って、自分の力を信じることにした。

「エミリア?!」

ランスロットが飛び出してきたエミリアに気がつき、驚き叫んだ。ラプラスも飛び出してきたエミリアを見て、硬直した。

誰もの時間を止めて、エミリアは転がるようにクリームのそばまでたどり着くと、驚いて呪文も中断して固まっている彼女に手をかざし、息を整えて勢いのまま呪文の詠唱に入った。

「天にまします我が主よ。主の忠実なる子の窮地を救い給え。

世界に満ち足る主の愛よ。その普遍なる愛により育つ我ら。

主を脅かすものに立ち向かい傷つき倒れた主の忠実なる子に愛を。その脅威を取り除かんと主の為に戦いし力を与え給え。

再びその足で立ち上がり主の愛を受け入れる喜びを与え給え――
ベホイド！」

一瞬の間があり、エミリアは「失敗か」ともう一度呪文を唱えようとした時、暖かな光がかざした手から沸き起こり、クリームの体

へと吸い込まれていった。

彼女の疲労と怪我で青ざめていた顔色が瞬時に赤みが差し、滴り落ちていた血が止まり、怪我が夢だったかのように綺麗に治った。

「エミリアちゃん、あなた……」

「ドガさんを早く！」

エミリアは初めての魔法をぶっつけ本番で成功させて興奮していたが、それ以上にこの感触を忘れないうちに使いたかった。そして、驚くクリームとランスロットに短く怒鳴った。

「そうだった。ランスロット！」

「わかった！」

すぐさま、ランスロットはラプラスに向かって突進した。クリームを守るものはないもないが、完全回復したクリームであればラプラスの一撃ぐらいは何とか凌げる。今はドガを窮地から救い出すことが先決であった。

「小癪な小童が！」

ラプラスもそれがわかっているので、クリームへの攻撃よりもドガへの止めの攻撃を優先させた。しかし、ドガはそれを死力を振り絞って跳ね除けた。

「残念だったな。おとなしくやられるほど私は甘くはない」

不敵な笑みをこぼしているが、本当に最後の死力だったのだろう。崩れ落ちそうになる身体を大剣を杖のように地面について支えた。しかし、次はない。本当ならば、次の一撃であっさり終わってしまう無駄なあがき、一瞬の延命でしかなかった。だが、その貴重な一瞬で十分であった。

「ラプラス！」

ランスロットがドガとラプラスの間に割り込むように斬り込み、ラプラスを少し後退させた。その隙を逃がさず、ドガは重い足取りでクリームのいる場所へと撤退した。

ランスロットがその場で踏みとどまり、ラプラスに攻撃の隙を与

えないように閃光が走るような猛攻を続けた。

「ランスロット！ 下がって！」

クリームの合図にランスロットがラプラスから離れると、クリームが唱え終わった魔法を解放した。

「レイソル！」

光の大砲が漆黒の外套を白く染めた。光属性の上級攻撃魔法のレイソルは、初手で使ったフレイナズンよりも力の収束率は低く、単体への攻撃力がやや低めではあるが、攻撃範囲が広く避けるににくい上、クリームの十八番で失敗の可能性の一番低い上級魔法であった。

クリームとランスロットの援護のおかげで、ドガはなんとかエミリアたちのいるところまで後退することができた。しかし、そこで精根尽きて、地面に崩れ落ちるように倒れたドガにエミリアとクリームが駆け寄った。

「すぐに治すから」

「回復薬で十分だ。すぐに逃げろ。素人の相手にできる魔物じゃない」

ドガは無理やり半身を起こそうとしながら自分の腰にある薬袋をまさぐったが、すぐに回復薬を使い切っていたことを思い出した。

「怪我人はおとなしく治療されてろ、この筋肉キザ！」

エミリアはドガを押さえつけるように寝かせると有無も言わず呪文を唱えた。

「絶対成功させる！」

エミリアは周囲の状況は考えないようにした。歴戦の勇者が苦戦するほどの強力な敵がそこにいることなど考えないようにした。そうしなければ集中力が保てない。とにかく、魔法を成功させることだけに全神経を注ぎ込んだ。

「ベホイド！」

神々の祝福を一身に受けた彼女が全身全霊を傾けた魔法が成功しないわけがない。クリームの時よりもスムーズに光がドガの体に吸い込まれていった。

「ぬう……」

ドガは体の痛みと疲労が引いて、戦う力が再びみなぎってくるのを感じて、一人うなった。ほぼ完全回復していた。

「これで戦えるだろ？ 怪我したら治してやるから、さっさとあいつを――エミリアの敵を倒してくれ」

ドガは再び前線に復帰して、それと入れ替わりにランスロットが後退してきた。比較的軽傷であるため、初級回復魔法のファイミで傷と疲れを癒した。

「ゴルディのおっさんも、とんでもない置き土産を置いていったな」
ランスロットは回復魔法を使う少女に満面の笑みを向けた。

「なににせよ、こんな小さな子に助けられて、魔物を倒せなかったら勇者の名折れだ。気合入れていくぞ！」

エミリアが参戦して、活気を取り戻したランスロットたちは、再びラプラスへの攻撃を開始した。

第十話 真打登場

戦闘はエミリアの参戦で押され気味であったランスロット側が盛り返した。

ラプラスは、エミリアが参戦してからはオープンガードでの消耗戦をやめて、防御の優先順位を上げていた。

「こちらに回復手段ができたから、消耗戦を続けるのが不利になったんだろう」

ドガはラプラスの戦術変更をそう分析した。しかし、ラプラスの戦術が変わっても、ランスロットたちの戦術を変更する必要はなく、クリームの魔法攻撃を主戦力として戦闘を継続した。

防御を優先するようになったので、クリームの魔法もいくつかはラプラスの防御魔法で無効、もしくは大きく減衰されてはいたが、ランスロット側も受けるダメージが減っていた。

「エミリアの存在価値を下げるつもりだな」

ランスロットがラプラスの巧妙な戦術に苦い表情を浮かべた。

今のところ、エミリアの最大にして唯一の武器は回復魔法である。だが、今の戦況はダメージの蓄積速度が遅くなっている。そうなれば、エミリアの出番が減る。しかし、彼女をガードしなければならぬ負担はそのままである。

「こっちから、攻撃的に仕掛けるか？」

「いや、よしたほうがいい。クリームが言っていた通り、懐に入り込むのを誘っているのかもしれない」

ドガの提案をランスロットが却下した。実際、それはランスロットの読み間違いであった。エミリア参戦までならば、そうであったが、今は結界の解除のためにラプラスはその余裕はない。

もし、ドガの提案どおりに攻め込めば、ラプラスを窮地に立たせることもできた。しかし、ラプラスもそうされては困るため、何かありそうな気配だけは漂わせていた。

老練なラプラスの策を若い勇者が読み解くには、少々経験値が足りなかった。というよりも、ランスロットに気配を読み取れる経験値があったため、勝機を逸するという皮肉なことになっていた。

ともあれ、回復魔法以外、支援魔法どころか防御魔法も使えないエミリアの参戦はランスロットたちの決定打にはならなかった。もちろん、彼女がラプラスを素手でもいいので攻撃していれば、それで全てが終了したのだが、それをその場で知っているのは、ラプラス一人だけであった。

こうして、あいかわらず一進一退の攻防が続いた。

「罅が開かねえ！」

ランスロットの苛立ちがわずかな隙を生じた。防御を優先しているとはいえ、それを見逃すほどラプラスは甘くはなかった。

ここぞとばかりにまとめて繰り出された漆黒の槍がランスロットに襲い掛かった。

「くっ！」

なんとか体をかわして、それでも執拗に迫る攻撃を体勢を崩しながら剣で弾いた。その弾かれた漆黒の槍が民家の一つに命中し、一部の壁と天上が崩れ落ちた。

「うわああ！」

民家の中から悲鳴が聞こえ、崩れた家から一人の少年が飛び出してきた。その手には木彫りの人形が握られている。

「ベネット君！」

エミリアは飛び出してきた少年を見て叫んだ。そして、崩れた家がフローラの家であることにすぐに気付き、自分が危険な戦闘を行っている村にやってきた本当の理由を、間抜けにも今頃になって思い出した。

「全員避難したんじゃないのか！」

ランスロットたちは飛び出してきた少年に奥歯をかんだ。

一方、ベネットはラプラスの発する禍々しい気に当てられたか、家を飛び出したところで腰を抜かしていた。

ラプラスは、この少年の出現を好機と捉えた。

罅が開かないのはラプラスも同じことである。

そこで、少年を攻撃すれば、先ほどの攻撃で体勢を崩しているランスロットは、その攻撃から少年を守ることはできない。とすれば、ドガが少年を守るために動かねばならない。そうすれば、クリームを守るものは何もなくなり、ラプラスはクリームへ攻撃を集中させればいい。

少年への攻撃は陽動である。陽動であるが、ランスロットたちはそれを無視できない。最小の攻撃で敵の分断が可能になる。

ラプラスは瞬時にここまで策を立案し、そして、ためらうことなくそれを実行した。

繰り出した漆黒の槍が少年の方に向かうのを見て、ドガが少年を守るために動こうとした。思惑通りと、ラプラスの白い仮面がほくそえんだ。

「ドガ、そこを離れるな！ 俺が何とかする！」

ラプラスの笑みで全てを直感したランスロットは、体勢が崩れているのを超人的なバランス感覚で立て直し、その槍が少年に突き刺さるのを防ごうとした。

あと少し。あと少しで剣が槍に届こうとした。普通ならば間に合わないはずだが、ランスロットの敵の攻撃を見切る能力の高さを発揮し、最短距離で最小の動きをした結果、届きかけていた。

「当たれ、このやろう！」

半ば倒れこむように飛び込み剣を振り、漆黒の槍を弾き飛ばした。まさに奇跡といってよかった。しかし、ラプラスはその一枚上であった。

ランスロットがドガを制止した瞬間に、漆黒の槍を少し遅れたタイミングでもう一本繰り出していたのである。陽動による分断を失敗したのなら、せめて少年ぐらいは殺さなければ割に合わないというのであろう。

体勢どころか、完全に地面に転がっているランスロットにはどう

することもできない。ドガが今からガードに行っても間に合わない。誰もが少年の身体を漆黒の槍が無残に貫くことを想像した。たった一人を除いて。

ドガが制止された後に、ラプラスがもう一本の槍を放っているのに気が付いたエミリアは考えるより早く、地面を蹴ってベネットの所へ駆け出していた。

それは反射的と言ってよかった。気が付いたら飛び出していて、駆け出したエミリアが一番それに驚いていたぐらいであった。しかし、後悔はしていなかった。むしろ、駆け出した足を褒めたい気分であった。

ベネットを迎えに行っておいて、その目的を忘れた負い目もあったが、それよりも、エミリアの脳裏にはハンナの不安そうな顔、フローラの悲しむ顔が先に浮かんだ。

「ベネット君はまだ十年も生きてない。家族も友達もいる。かなえてあげたい未来の夢もある。僕が何とかしなくっちゃ。僕が助けなくっちゃ」

エミリアはそう思って、ベネットに向かって走った。

もちろん、エミリアは最初から捨て身で助けるつもりではなかった。本当はベネットに抱きついて、勢いのまま飛んで漆黒の槍を避けさせるつもりであった。しかし、予想以上に槍の攻撃速度が速かった。

「間に合うか？ いや、間に合わせる！」

二人とも飛ぶのは無理でも、抱きついて盾にはなれる。

突き飛ばせばよかったが、腰を抜かして座っているベネットを突き飛ばすのは少女の体当たりでは無理だと思えた。

漆黒の槍が自分の身体を貫通するかもしれないが、少しでもベネットに届くのを遅らせれると考えた。その間に彼の位置をずらせればそれでいい。

エミリアは必死の無我夢中で駆けて、漆黒の槍が迫るベネットに抱きついた。

「間に合った！」

ベネットに覆いかぶさるようにして、彼が槍の直撃を食らわないように生きる盾になった。

「エミリア！」

ランスロットたちの誰もが、今度はエミリアの惨状を想像した。しかし、漆黒の槍は彼女の届く前に霧散した。

「なっ?!」

ランスロットたちはいったい何が起こったのかと、呆然となった。「ちっ！」

ラプラスはまさか花嫁があのような行動に出るとは大誤算であった。これによって花嫁が自分の攻撃が通じないことを知り、攻撃に転じてくるかもしれない。

こうなっては、一か八か、呆然となっているランスロットたちを攻撃して、殺さない程度に大きなダメージを与え、花嫁がそちらの回復をしている間に結界を解除して離脱することにした。

ラプラスはとりあえず、いまだに地面にはいつくばっているランスロットを狙って漆黒の槍を繰り出そうと外套を広げた。

「ランスロット！」

気配を感じたクリームが叫んだ。ランスロットもその声で今の状況を思い出した。攻撃を避けるには受けるにも、とりあえず、起き上がらなければどうにもならない。

「もう、遅い」

ラプラスの漆黒の槍がランスロットに向けて放たれようとしたその時であった。

「ギュガス！」

発動呪言がどこからともなくその場に響き、ラプラスの周りに発生した暴風が、真空の刃となり切り刻んだ。どれだけのダメージを与えたかは不明だが、少なくとも、ラプラスの攻撃を中止させるだけの効果はあった。

ランスロットはその間に起き上がり、エミリアとベネットの元に

急いだ。エミリアは半分腰を抜かしているベネットを抱き起こした。

「大丈夫か？」短く訊くランスロットにエミリアとベネットが頷くと、「それじゃあ、クリームのところまで走れ。援護する」

ランスロットに護衛されながら、クリームたちと合流し、ランスロットはドガと共に拠点防御を固めた。

彼らが合流するのを黙ってみているラプラスではないが、森の中からラプラスの攻撃を妨害する支援魔法がかけられており、合流する時間を稼いでくれていた。

ランスロットたちの防御体勢が整うと、森の中から何かが動く気配を感じた。敵も味方もその場、全員の視線がそちらに集中した。

森の深い緑の中に鮮やかな薄緑色が戦場の炎に照らされて浮かび上がった。その薄緑色には白のひし形に、赤い丸に十字を重ねた、ロトク教のホーリーシンボルが染め抜かれている。円筒状の帽子をかぶり、手には『巾』の字に似た形の戦闘神官が持つ杖を持っていた。

肩の辺りまである切りそろえた黒髪が火事の起こす焦げた風に揺れた。落ち着きのある優しい顔立ちではあったが、その黒い瞳には意志の強い厳しい光を宿した青年が法衣をなびかせて姿を現した。

その場にいるものは、誰もがその青年の名前を知っていた。

「ゴルディ！」

ランスロットたちは驚きと歓喜の混じった声で彼の名前を呼んだ。「まったく、あなたたちは無茶をする。その魔物と戦っている最中に目を離すとは」

ゴルディは少し呆れた声でランスロットたちをたしなめると、悠然と彼らのところまでやってきた。

「遅くなって申し訳ありません」

ゴルディはランスロットたちのところまでやってくると神妙に頭を下げた。

「まったく。言いたいことはたくさんあるが、今はやらなきゃならない事の方が山ほどある。お説教は後でするぜ」

ランスロットは待望の台詞を口にできて、少し満足そうに笑った。
「いつもと逆ね、ゴルディ」

クリームはうつすらと涙を浮かべて微笑んだ。

「そうですね。ランスロット君のお説教は後でゆっくり聞かせてもらいます」

そこでゴルディは初めてベネットと一緒にいるエミリアを見つけた。

「君もよくよく魔物に縁のある人ですね」

手を差し伸べてエミリアの頭をなでながら苦笑を浮かべた。

「そんな縁は勘弁して欲しいよ。だけど……また助けてくれて、ありがとう、ゴルディさん」

エミリアは頭を撫でられながら、少しはにかみながらお礼を言った。

「はい？ なんのことですか？」

ゴルディはエミリアのお礼に首をかしげて不思議そうな顔をした。

「かっこつけちゃって。まあ、ゴルディらしいけどね」

ランスロットたちはゴルディの言葉にニヤニヤした。彼は余計わけがわからずに困惑の表情を浮かべた。

彼が混乱するのも無理はなかった。ラプラスの漆黒の槍を打ち消したのは誰だろう、エミリア本人の恐ろしく高い防御力であった。

ゴルディ自身は何もしていなかった。漆黒の槍がエミリアに襲い掛かっていたことも、ちょうど彼が来る直前のことで見ていなかった。

だが、意味不明な状況をゆっくり追求しているほどのんびりできない現状であった。

「感動の再会などは後回しにして、さっさとラプラスを倒しましょう」

ゴルディはその件は後回しにして、一歩前に出てラプラスに正対した。

白い仮面が愉快そうに笑っていた。

「久しぶりですね。まだ、誰にも倒されずにいたことは感謝します」

ゴルディはいつも通りの丁寧な言葉だが、いつもと違う内に秘めたる迫力にランスロットたちは息を呑んだ。

「ずいぶんと早く戻ってきたのだな。あと一日はかかると思っていたが？」

「途中で罨であることに気がつきましたからね。あなたともあろうものが、一人の私を人気のない場所に誘い出すようなことはしないとね」

まるで付き合いの長い友人と話をするようなものだ、ゴルディは苦笑を浮かべた。だが、それも一瞬のことであった。

「それがわかれば、おのずと答えは見えました。私を誘い出して置いて、あなたは村を、私に関わった人々を殺戮する。そうして、私の心に漆黒の爪あとを刻み込む。相変わらずですね、あなたは」

ゴルディの怒りが深く静かに燃え上がった。

「いいねえ。その憎しみ。君の感情は私をこの上なく楽しませてくれる。さて、君の憎しみを怒りをもっと感じさせてもらおう」

ラプラスの白い仮面が恍惚と笑い、漆黒の槍がランスロットたちに襲い掛かった。しかし、それはランスロットとドガにより全て弾き返された。

「俺たちがいることを忘れてんぜ、ボケ外道。役者は揃ったんで、本気でやらせてもらうぜ」

ランスロットは不敵な笑みを浮かべて、ラプラスに改めて宣戦布告した。

「エミリア。君は下がっていなさい。この先は君を守って戦えるほど余裕はありません」

ゴルディが振り向きもせずエミリアに告げた。エミリアはその背中に頼もしさと危うさを同じくらい感じていた。

「……ゴルディさん。死なないでね。それで、絶対、勝ってね」

エミリアはそれだけ言うと、ベネット共に戦闘を離脱するために後ろに退いた。

「ゴルディ。かわいい姪っ子の希望だ。かなえてやるんだな」

ドガがエミリアの言葉を聞いて、少しだけ口元をほころばせた。
「そうね。エミリアちゃんを泣かせないようにね」

「というわけだ、おっさん。あんなかわいい娘をもし泣かしたら、
“女泣かせのゴルディ” って二つ名を広めてやるぜ」

クリームとランスロットも笑いながらゴルディに釘を刺した。

「やれやれ、エミリアは私のいない間にずいぶんと人気者のようですね。では、みんなに嫌われないように頑張りますか」

ゴルディはため息をついて苦笑をもらしたが、どこことなく嬉しうであった。

「それじゃあ、いくぜ！」

ランスロットは再び気合を入れてラプラスに立ち向かった。

エミリアは戦闘から離脱したが、避難所まで行かずにランスロットたちの後方の森の中で戦闘の行方を見守った。

避難所となっているゴルディの家まで行くには、戦場となっている場所のすぐ横をすり抜けないといけない。それを迂回して行くとなると、暗い森の中、未整備の道をそれなりの距離を行かなければいけない。

下手に強行するよりも、戦場が移動するのを待った方が得策とエミリアは判断した。

「ベネット君、ごめんね。怖いかもしれないけど、もう少し我慢してね」

「べ、別に怖くなんてねえよ。さっきは、びっくりしたただけだ。俺は、勇者になるんだぞ。こわいことなんかあるもんか！」

ベネットの強がりにエミリアはほほえましい笑顔を浮かべた。

「ベネット君は、勇気があるよね。僕はぜんぜん勇気がないから」
そういつて、今頃になって震えてきた手を彼に見せた。彼はその手を握った。エミリアは彼の手もかなり震えているのがわかった。

「……お前は勇気あるよ！ も、もちろん、俺の次にだな」

「ありがとう、ベネット君」

少しだけ震えが治まった気がして、エミリアは繰り広げられるゴルディたちの戦闘に目を移した。

「この戦い……見届けるのが自分の役目のような気がする」

エミリアは、なぜだかふとそう感じた。それは、この戦いの根源である少女の名前を受け継いだからなのかどうかはわからなかったが、避難所への道が開けてもここにとどまることをぼんやりと考えていた。

第十一話 あの花の続きを

ゴルディの参戦によりランスロット旅隊は最大の能力を発揮した。ゴルディが補助魔法や回復魔法をかけ、ダメージコントロールを行いつつ、隙あらば攻撃魔法を放つ。また、ゴルディの展開した防御魔法で守られたエリアで安全に集中して呪文を唱えられるクリムは魔法のレベルを上げて攻撃ができた。

ランスロットとドガはクリムの護衛をせずに二人とも前衛となり、戦闘に参加できた。一人が攻撃している間、もう一人はそれを援護するコンビネーションで、より攻撃的に戦闘に参加していた。

彼らの旅隊に倒せない魔物はいないと思えるほどの連携で、各自の役割が明確で無駄がなかった。

しかし、ラプラスはその上がったレベルに合わせるように自分の攻撃と防御をレベルアップさせ、ランスロットたちを向こうに回し一歩も引かなかった。

ラプラスは基本方針を戻し、ランスロットたちに消耗を強いる戦闘に持ち込んでいた。

「いったい、どれだけ、体力があるのよ。いい加減、倒れてよ」

クリムが肩で息をしながらばやいた。彼女の魔力も底を尽きかけており、それを補充する魔法薬も使い切っていた。

「まったく。反則級だぜ。あの槍でこっちの体力すってるんじゃないか？」

ランスロットとドガも回復しては貰っても、長時間の戦闘で蓄積した疲労の回復は魔法では完全に取り去ることはできない。そのために動きに精彩を欠いてきていた。さら、魔法付加した武器がこの長期戦で無理がたたって、悲鳴を上げかけていた。

「戦術的にはここは撤退だが、村人たちをもっと遠くに避難させないとしてもできんしな」

ドガが苦虫を噛み潰した。エミリアたちを走らせて、村人たちを

もつと遠くに、できれば隣村ぐらいまで避難するように伝えることも考えた。

「その間、こいつを釘付けにしないと意味がない。撤退の護衛でしんがりを持ってもいいが、村人全員守るのはこの人数じゃ無理だ」
ランスロットがドガの案を否定した。ドガもランスロットと同じ結論に至っており、それに頷いた。

「だが、このままではどうにもならんぞ」

「わかってる、そんなことは！」

ランスロットは苛立ちのまま怒鳴った。その苛立ちは、自分のふがいなさへのものであった。

相手の魔物を少し見くびっていた。もっと早い段階で村人たちの隣村への避難をさせるべきだった。戦闘初期の力押し of ツケがまわってきている。もつと冷静に基本方針を決めるべきだった。――次々に後悔が頭をよぎった。そんなことを思い浮かべても今は何のよい影響を与えない。そのことにすら、ランスロットは歯噛みした。
そんなランスロットにゴルディが歩み寄ってきた。

「ランスロット、提案があります」

「却下だ」

ゴルディの言葉に、内容を聞かずランスロットは即座に返した。

「では、お願いがあります」

「聞いてやらねえ」

ランスロットは怒るように言い返した。

「ここは私一人で食い止めます。エミリアたちを連れて逃げてください」

しかし、ゴルディは構わずに話を進めた。

「だから許さねえって言ってるだろ！ 俺はこの戦いが終わって、お前に説教をするんだ。こんなチャンスを見すみす逃がすかよ！」

ランスロットが怒鳴り声を上げて、ゴルディをにらみつけた。

「それでは、私は勝手をさせてもらいます」

「させねえよ！」

ゴルディよりもランスロットの方が早く動いた。

ラプラスに向かい、特攻まがい突っ込んでいった。激情に任せて特攻すれば雑な攻めになるはずだが、若き剣聖とまで呼ばれる彼の剣さばきは身体の染み付いていた。

ラプラスの攻撃を紙一重で避けて、深く踏み込み、重い斬撃を叩き込んでいく。

「ぐっ！」

さすがのラプラスもこの猛攻には耐え切れず、防戦一方で少し後退した。

「すごい……。久々の本気のランスロットだ」

クリームの呟きにドガもうなずいた。ランスロットは良くも悪くも気分屋なところがあり、本気を出すのではなく、本気が出るのであった。もつとも、本気でなくても十分に強いので問題にされないのだが。

このランスロットであればと誰もが期待したが、その期待は見事に打ち碎かれた。剣とともに。

既に限界に近かったランスロットの剣が白い仮面を斬りつけた拍子に刀身から碎けるように折れた。

「ちいっ！」

とっさにベルトに挟んでいたタガーを引き抜いた。護身用にしかないタガーで、剣が折れたという好機を逃さず襲ってきたラプラスの攻撃を受け流した。しかし、いくら剣技に優れた彼であっても、それでいつまでも耐えられるわけがなかった。

「ランスロット！」

援護のためにクリームが最後の魔力で呪文を唱えた。同時に救援するためドガがランスロットの元へ向かった。しかし、今度は誰よりもゴルディの行動が早かった。

「まったく、ランスロット、あなたは無茶をする。あなたはリーダーとして、もっと周りを見るべきです。でも、あなたはいい勇者になれますよ。私が保証します」

ゴルディはランスロットとラプラスの間に割り込み、彼に襲い掛かる攻撃を防御魔法で作った障壁で防いだ。

「お前の方がよっぽど無茶だ！」

いくつかの漆黒の槍が障壁を突破し、ゴルディの法衣を引き裂き、血が地面に滴り落ちた。

「わかってますよ。それはよく、神官長にも言われることです」

ゴルディは傷だらけになりながらにっこりと微笑んだ。

「ランスロット。私はそろそろ、この復讐劇を幕引きにしたいのです。よろしいでしょう？　これ以上、私の私怨で前途ある人間が死ぬのを見るのは忍びないのです」

その静かな寂しい声と背中が、ランスロットの血を沸騰させた。

「ゴルディ！　俺は絶対にゆるさねえ！　一人で犠牲になるなんて格好つける馬鹿はゆるさねえ！」

ゴルディはランスロットの熱い叫びを聞きながら、軋みをあげる障壁が完全に崩壊する前に呪縛結界の呪文を唱え始めた。

障壁を保ちながら別の魔法を唱えるのはかなり高度であり、成功率が低い。しかし、ゴルディは不思議と失敗する気がしなかった。精神が研ぎ澄まされて最高の状態になっているのだろうと感じていた。

そんなゴルディに掴みかかろうとしているランスロットは、駆けつけてきたドガに抱えられるように止められた。

「やめろ、ランスロット！　ゴルディの想いを無駄にするのか！」

ゴルディは呪縛結界の発動呪言を静かに唱えて、ラプラスの動きを完全に止めた。

「ありがとうございます、ドガ。ラプラスの動きは止めています。早くここから離れてください」

彼らの方に振り返ったゴルディの顔は、何か憑き物が落ちたように爽やかであった。ドガはその顔を見て、言おうとしていた言葉を飲み込んだ。

「ああ、わかった。達者でな、ゴルディ」

ドガはそれだけ言って、最敬礼を贈った。そして、ランスロットを引っ張って、後方へと退いた。ゴルディはそれを微笑みで見送った。

「ドガ、離しやがれ！ 何のための旅隊だ、ゴルディ！ なんでもかんでも、一人で背負い込みやがって！ 俺はお前のそういうところが大嫌いだ」

ランスロットは半狂乱になりながらドガの腕の中で怒鳴り、後退を拒んだ。

「では、一つ甘えさせてもらいます。エミリアを、あの娘をよろしく頼みます」

ゴルディが一瞬、心残りの表情が見えた。それを見て、ランスロットは冷静さを取り戻し、暴れるのを止めるとドガの腕を振り払った。

「くそっ！ 卑怯だぜ、ゴルディのおっさんよ！」

ランスロットは苦々しく呟くとクリームのそばまで後退した。そして、後ろにいるエミリアたち呼び寄せた。

「ゴルディのおっさんがあいつを足止めしている間に、避難所まで撤退する」

ランスロットがエミリアにただそれだけを伝えた。

「え？ で、でも、ゴルディさんが――」

硬直しているラプラスと向き合っているゴルディとランスロットを交互に見ながらエミリアが何か言おうとしたが、ランスロットによってそれはさえぎられた。

「それ以上、言うな。俺たちも納得していいねえ。だが、止められない。あいつも、男だからな」

ランスロットの表情に、彼女は沈黙するしかなかった。

「ゴルディが稼いでいる大事な時間を無駄にするな」

ランスロットたちはエミリアたちを護衛しながら避難所に向かった。

「ゴルディさん……」

エミリアはゴルディの横を通り過ぎる時、彼の方を向いて立ち止まった。

「エミリア。約束をあまりかなえられず、すみません。ですが、君なら大丈夫です。君がその素直なままなら、皆に愛されて生きていきます。ベス婆様や皆の言うことをちゃんと聞くんですよ」

ゴルディは穏やかな表情でエミリアに別れの挨拶じみたことを口にした。

「ゴルディさん……」

エミリアはこみ上げるものをこらえるので精一杯であった。そんな彼女を誰かが後ろから抱き寄せた。肩越しに彼女が見上げると、それはランスロットであった。

ランスロットも、エミリアと同じ表情をしていたが、何かを飲み込むように息を止めて、口を開いた。

「ゴルディ！ 死ぬなよ。エミリアのためにも生きて帰って来い。それ以外は許さないからな！ じゃあ、先に行ってる。後でな」

ランスロットはエミリアを促して、先に行ったドガたちを追いかけた。

「ゴルディさん、ご無事で！」

去っていくランスロットを見送りながら、ゴルディはため息をつきながら一人呟いた。

「まったく、ランスロット。あなたという人はどうして、そう人の心に届く言葉を口にできるのでしょうか。うらやましい才能ですね」

「エミリアのために」という言葉がゴルディの胸に突き刺さっていた。

死んだ妹のエミリアも、ラプラスに挑み死んでいった仲間たちも、もちろんランスロットたちも、誰一人としてラプラスを倒すことが、ゴルディの死をもってしてもかなえなければならないと望んでいないだろう。

それを望んでいるのが自分だけであることはわかっていた。

「私はラプラスに故郷の町を襲われたあの日に死んでしまったので

しょう。それ以来、死に場所を探していたのかもしれませんが。そう思いませんか、ラプラス？」

ゴルディは目の前で身動きを封じられたラプラスにゆっくり語りかけた。

「死人は無敵というわけか。だが、所詮、死兵は死兵。死んだものに何が変わえられる？ この程度の呪縛結界、すぐに破ってみせよう。その後は君のお仲間を殺しに行かせてもらおうとしよう。死兵の君など無視してね」

白い仮面が笑った。

「そんなことはできませんよ。あなたは私に倒されるのですから」
ゴルディは静かに力強く答えた。まるで、それが絶対の真理であるかのような、力を持った言葉であった。

「倒す？ 誰が誰を？ 愉快的話だ。何人でかかっても倒せなかったのに君一人で倒すとは、君は算術ができないのか？」

白い仮面が嘲笑を浮かべた。

「君の仲間は、君を置いて逃げ出したのだよ。口で何を言おうと、心の中で喜びの雄叫びをあげている。逃げれたと。恐怖から開放された。君は仲間に捨てられたのだよ」

ラプラスは言葉を重ねた。目的は挑発である。

ゴルディのかけた呪縛結界は強力であるが、外部から攻撃されれば、すぐに呪縛が解放される特性と、その攻撃の力も結界に吸収され、半分程度しかダメージを与えられないという欠点があった。

怒りに任せて、ゴルディがラプラスを攻撃すれば、呪縛結界が解ける。もし、しなくても、こうして時間を稼げば、呪縛を破ることができる。

「挑発と時間稼ぎですか、見苦しいですよ。一人で倒せない？ 世の中には一人でも、魔力が少なくても唱えられる、あなたのような魔物を倒す強力無比な魔法があるんですよ」

何の気負いもなく、まるで教師が生徒に教えるかのようにであった。その言葉にラプラスの仮面が嘲笑をやめた。

「……止めておくがいい。その魔法は——」

「ええ、私の命と引き換えに、あなたを封印します。——アークラプラス封魔呪縛結晶陣^{フマクラファイタル}。奇しくもあなたと同じ名前の大天使の力を借りてね」

伝説では、太古の昔、大天使ラプラスは神の命を受けて、世界各地で覇をとんでいた魔王たちを討伐し封印した。そうやって、人間たちが今のように平穏に暮らせる世界を作り出したといわれていた。その魔王を封印した魔法が、『アークラプラス封魔呪縛結晶陣^{フマクラファイタル}』である。

伝説はさておき、実際に多くの魔王を封印しているこの結晶陣を人々は研究した。そして、人間でも使えるように改造した。

ただ、人の身で大天使が使う魔法を行使するため、その代償として術者の生命が求められる。そのため、究極の自己犠牲魔法として世に広く知られていた。

そして、この封印は非常に強力であるため、過去何度となく魔王を封印する方法として使われてきた。

「私には効かないのだよ、その魔法は。君は犬死するだけだ」

ラプラスは哀れみの表情でゴルディを見た。

「大した自信ですね。確かに、準備不足で完全とはいえません。ですが、それでもあなたを百年は封じることができる。それで十分です」

ゴルディは隠し持っていた魔力を封じ込めていたピンを開放し、魔力をほんの少しだけ回復した。そして、もう一度、呪縛結界の呪文を唱えはじめた。

呪縛結界の魔法は一つが発動中は、その周囲で別の呪縛結界を作ろうとしても通常は上手く行かない。

もし、それができるなら、ダメージが軽減されても、呪縛結界、攻撃、即座に唱えておいた呪縛結界、そして攻撃……という必勝パターンができあがり、この魔法はもっと重用されていただろう。そうならなかったのは、恐ろしくその成功率が低いからであった。

「呪縛結界を破られたらすぐにかけ直すつもりか。浅はかな考えだ。成功すると思っっているのか？」

ラプラスは嘲笑を浮かべた。あと少しで呪縛を破り、開放される。かけ直しの成功確率は低いが、失敗のイメージを思い浮かぶようにすれば、さらに確率は下がる。老練なラプラスの心理戦であった。

「呪縛結界を解くための時間稼ぎのつもりですか？ それとも、かけ直しの失敗を望んで？ 残念ですね。その目論見は外れましたよ」

ゴルディはラプラスの揺さぶりなど一向に気にすることなく、呪文を唱え終わり、発動呪言を残すだけとなった。最後の一言を唱え終わるまで、魔法の成否はわからないが、彼は成功のイメージしか浮かばなかった。

そして、ラプラスに手が届く場所までゴルディはゆっくりと歩み寄った。ラプラスはゴルディの意図することがわからず困惑した。自分に近寄っても、ゴルディがなんら得することは無い。逆に損になるぐらいである。

ゴルディは持っていた杖を投げ捨てた。そして、拳を握り締めた。「これは殺されたエミリアの仇です。受け取りなさい」

ゴルディは拳を振り上げ、白い仮面に思いっきり殴り下ろした。白い仮面が無様に地面にたたきつけられ、ラプラスを縛っていた呪縛結界が解けた。

まさかの攻撃にラプラスは意表をつかれて、呪縛結界が解けたのに逃げるのが一瞬遅れた。その一瞬は貴重な一瞬で、かけがえのない一瞬であった。

ゴルディは呪縛結界の発動呪言を唱えた。

「うぐっ！」

失敗確率が高いかけ直しだったが、見事に成功し、ラプラスを動けなくした。

「あなたを殴るために、随分と練習しましたからね」

ゴルディは悪戯でも成功したかのように朗らかな笑みを浮かべた。「しかし、これで、すつとしました。あの時、あの丘で殴れなかつ

た分、ちゃんと殴らせていただきましたよ」

爽やかに言うと、そっと自分の胸に手を当て、死んだ妹、両親、仲間たちへの鎮魂の祈りを捧げた。

「さあ、私の私用は終わりました。あとはあなたを封印するだけです」

ゴルディは懷から陣を収めた水晶を取り出し、開放のためのキーワードを呟いて、地面に落とした。水晶が砕け、光の粉が飛び散り、それが魔法陣を形成した。

「無駄だというものを」

ラプラスは再びため息をつくように言った。

「往生際が悪いですよ。いい加減諦めなさい」

ゴルディは、まるで友人を諭すように言うと、封印魔法の呪文を詠唱し始めた。

光がそこかしらのにじみ出て、周囲は昼間のように明るくなった。やがて、その光はラプラスとゴルディを中心とする魔法陣に集まり、光で空間を埋めていった。

光が徐々に密度を増し、まるでそれが結晶化するかのように、周囲の風景が傾き、ゆがみ、反転して、まるで万華鏡の中にいるような光景が広がった。

詠唱は静かにだが、徐々に熱を帯びはじめた。これまでの人生を振り返る、走馬灯の回すロウソクの熱気のように幻想的に揺らめくような熱気であった。

光の結晶が次第に収束し、ラプラスと術者のゴルディを包み込んで、その中に全てを押し込もうと、光の圧力を感じるようになった。ついに封魔呪縛結晶陣は完成した。

あとは、力ある言葉を待つのみとなった。

「……終わりです。封印の闇で退屈と遊んでいなさい、ラプラス――
アークラプラス封魔呪縛結晶陣！」
フマクラファイタル

最後の一言を解き放つと、光の結晶が一気に硬質化した。ラプラスの白い仮面が光の圧力に負けて、ひびが入り、乾いた音と共に砕

け散った。

「やっど……やっど、終わりましたよ、エミリア。……ランスロット、後は頼みます」

ゴルディの最期の言葉は共に封じ込まれるラプラス以外に聞かれることなく彼の体は巨大な光水晶に封じ込まれていた。

そして、戦いを終わったことを告げるように降り始めた雨が村を静かに包み込んでいった。

第十二話 旅立ち

ゴルディが結晶陣を使って、戦いが終結したすぐ後に降り始めた雨は勢いを増して、夜半には激しい降りになっていた。その雨のおかげで戦闘の余波で発生した火災は鎮火し、村全てが全焼となることは免れた。

その雨も明け方ごろには上がり、穏やかな朝日が雲の切れ間から地上を照らしていた。

避難していた村人たちは、戦闘が終結しても、安全確認が済んでいないため、そのまま一晚、ゴルディの家の周りに避難していることになった。村人たちは雨を避けるために木の下へと移動し、体調が悪くなったものはゴルディの家の中やテラスへと運ばれた。

明け方ごろには雨が嘘であったかのように上がり、空は穏やかな朝焼けで赤く染まっていた。

ランスロットたちは、村人数人を伴って村の安全確認を行った。しかし、すぐに安全だという知らせが入り、村人たちはようやく自分たちの村へと帰ることができた。

村人たちは、そこではじめて昨日の戦闘の激しさを目の当たりにして言葉を失っていた。

無残にえぐりとたれた地面。火災ではなく、何かの力がかかって半壊している家。無数の傷跡を残す石垣。そこに焼け焦げた痕をつけた石畳。

正直なところ、被害が集中しているのが村の一部だけであるのが奇跡のように思えた。

そして、その激戦の痕の一番端に雨露に濡れて光り輝く巨大な水晶の花が咲いていた。

クリームがその水晶を一目見て、ゴルディが使った魔法が、アーンプラス封魔呪縛結晶陣であるとランスロットたちに説明した。

「本当はすぐく準備や布陣が必要な魔法なの。そうしないと成功率

が下がるから。だけど、ゴルディさんは前々からこうなることを考えていたのかも。村の簡易結界を使って、ほぼ完璧に封印しているわ……人為的に解かない限り、数百年は破れることはないと思う」

クリームは水晶にそっと触れながら目に涙を浮かべた。

村人たちは、水晶の花に冥福を捧げ、エミリアも目を潤ませていた。

「ゴルディのおっさん、お前は馬鹿だ。とんだ大馬鹿だ。くそっ」

ランスロットはゴルディの遺品である落ちていた杖を握り締めた。

「すまない。俺たちが力不足だったから」

ドガも神妙な顔で頭を下げ、何かを食いしばった。

「ゴルディ。あたしたちはもっと強くなる。強くなるから」

クリームがこぼれた涙と共に摘んできた花を供えて、無理やり笑顔を作って見せた。

「それでは、我々はこの水晶の封印が解かれないよう守っています」

村長がランスロットたちの別れを済ませるのを見て、彼らに歩み寄ってきた。

「守るって……この村に残るつもりなのか？」

村長の言葉にランスロットが驚きの声を上げた。封印されているとはいえ、強大な魔物のそばで生活など普通はありえない。

「ええ、恐ろしくないといえば、ウソになるかもしれませんが、我々には他に行くアテもありません。第一、家と畑を捨てて生きていくにも、その蓄えもありませんからな」

カペル村は、表街道にも面していないし、特筆すべき特産物もない田舎の村である。そんな村が、どこか別の場所を開墾して再び村を興すのは資金が不足していた。国に訴えても、再建のために少しは税を免除してくれるかもしれないが、それ以上のことはしてくれないこともわかっていた。

「とはいえ、若者たちは他の村に移れるように、近隣の村などをお願いしますがね」

村長はこの村を緩やかに消滅させるつもりだとランスロットたち

に語った。

村長の言葉にランスロットが何を言えはいか迷っていると、村長は首を振った。

「そんな顔をしない。あなた方は村を救ってくれた英雄です。これほどの被害をだして、村人から死人を出さなかった。それだけで、十分です。命があれば、やり直せます」

それから、突然、村長は明るく笑って見せた。

「それに、今の王都の繁栄はお城の地下に魔王を封印したおかげという噂もあります。うちの村もこの封印のおかげで栄えるかも知れませんよ」

王都の地下にはかつて、この地を支配した魔王が封印されている。その封印が発する福音が王都サルタノに祝福を与えているという伝説があった。

「どのみち、おぬしらはゴルディを助けるためにもう一度、あの魔物と戦うつもりなんじゃろ？」

ランスロットのそばに一人の老婆が杖をつきながらゆっくりと歩み寄ってきた。

「ベス婆ちゃん。どういうこと？」

エミリアがその姿を認め、問い返した。ランスロットたちもベス婆の言葉の意味がわからず、お互いに顔を見合わせていた。

「おやおや、知らなかったのかい？ てっきりそのつもりだと思っ
たのじゃがな——アークラプラス封魔呪縛結晶陣。フマクラファイタルよく思い出して
みたい、ヒョッコ嬢ちゃん」

ベス婆は魔女のような微笑を浮かべると、クリームの頭を軽く杖で叩いた。

「思い出すって？ ……アークラプラス封魔呪縛結晶陣で思い出す
って——あっ！」

クリームが杖から頭をかばいながら、記憶を探っていたが、いきなり口に手を当てて硬直した。

「ようやく思い出したようじゃな。この痴れ者め。あやうく、ゴル

ディを殺すところじゃったぞ」

ベス婆は苦笑を浮かべながら、クリームの頭を木魚のように杖で叩き続けた。

「クリーム。俺達にもわかるように説明してくれないか？」

置いてけぼりを食らってむっとしていたランスロットにクリームはベスの杖攻撃を避けて、ランスロットたちに向き直った。

「あ、ごめん。――えーとね、この魔法は術者の生命を代償に魔物を封印する魔法というのは知っているわね？」

「そう聞いているが？ 違うのか？」

「間違っではないわ。でも、あたしたちが想像しているような、使ったら即死じゃないらしいの。結晶陣内にいなければ使えないから、一緒に封印されてしまうのがこの術の最大の特徴で欠点なの」
クリームの説明にますますランスロットたちは理解を離れて、眉間にしわを寄せた。

「本当はちよつと違うのだけど、簡単に言うと、このアーククラブラス封魔呪縛結晶陣が魔物を封印している力というのは、その封じ込めたものの生命力なの。つまり、結晶陣に封じ込められた魔物と術者の生命力ってわけ」

「なら、中の術者は生命力を奪われて死んでしまうんじゃないのか？」

クリームの説明にドガが疑問を挟んだ。

「そんなに一気に奪い取られないのよ。徐々に奪い取っていく感じね」

クリームは更に、魔王クラスの魔物になれば、生命力を奪われなように結晶陣内で自己封印するから、百年単位で封印されていて平気であることなどを説明した。

「なるほど。だとすると、ゴルディはまだ結界の中で生きているというわけか」

ドガがクリームの話を理解してうなずいた。

「うん。そういうこと」

「それじゃ——」

エミリアは封印を解くことを口にしようとしたが、ランスロットたちは首を振った。

「残念だが、今の俺たちには奴を——ラプラスを倒すだけの力はない」

「そんな！」

エミリアはランスロットに詰め寄ろうとしたが、実際に見たあの魔物を倒すことがどれほど困難であるかを思い出し肩を落とした。

封印を解けばゴルディは生き返るが、同時にあの魔物も解き放たれる。今度は周囲を焦土と変えることとなることは容易に想像できた。

「今は。じゃろ？ この結界の中で生きていられるのは、せいぜい二年と言われている。どうじゃ？」

ベス婆の問いかけにランスロットたちは静かに目をつむった。そして、再び開いた目には決意の色を含んでいた。

「どうやら、覚悟は決まったようじゃな」

ベス婆は晴れやかに笑い顔を浮かべ、満足そうにうなずいた。

「村長、そういうことじゃ。再びここが戦場となるが、しかたあるまい？」

村長はどのみち静かに終焉させるつもりでいたので、反対はしなかった。ただ、少し心配事があるのか、少し表情を曇らせていた。

「安心せい、村長。今度は弟子にもう少しちゃんとした逆結界を敷くように言っておいてやるから、また村が壊される心配はないよ」

村長の心配事を読み取り、豪快に笑って村長の背中を叩いた。
「そういうことなら……。村の区画整理もして、戦いやすいようにしておきます」

「うむ。それがよかろう」

ベス婆は話をまとめると、ランスロットの方に向き直った。

「あとは、お前さんたち次第じゃ」

「ありがとう、ベス婆さん。必ず、ラプラスを倒せるようになって

帰ってくる」

ランスロットは拳を握り、改めて誓いを立てた。

「しかし、ベス婆さん、あなたはいったい何者だ？　うちのクリームも言われるまで思い出さないような知識を持っているとは、只者ではない」

ドガがベス婆の、「村の薬師」では説明のつかない豊富な知識に少し疑いの目を向けた。

敵ではないにしても、怪しいものには警戒するのが生き馬の目を抜く傭兵の世界で生き抜く鉄則であった。

「本当にそうよ。そのことを知っているのは王立魔法院や神殿でも上層部か対魔物戦闘部のトップクラスぐらいよ」

クリームもドガに言われて、そのことに気付いて、ベス婆を見つめた。

「年寄りには色々知っているものじゃ」

ベス婆は「今日もいい天気だ」とでも言うかのように視線をそらせた。

「ベス婆さんは、昔、賢者として旅していたからね」

しかし、村長があっさりと正体をばらした。ベス婆は村長をにらみつけたが、さんざん頭を叩かれたりしたお返しとばかりに知らん顔で受け流した。

「賢者……なるほど。これは失礼いたしました」

ドガは賢者という肩書きで全て納得し、非礼を詫びた。

賢者とは、魔法のエキスパート——魔術師や神官などの魔法系統を統一した理論を開発し、研究する者たちである。賢者たちは国家を捨てて集まり、象牙の塔と呼ばれる都市で研究をしている。

賢者たちの開発した統一魔法は実用面よりも理論のために作り出されていることと、その使用には天賦の素質が多く求められるため使用者が少ないことで、賢者の魔法自体は一般にはあまり馴染みがなかった。

ただ、賢者はその魔法の知識により、各国の魔法院や神殿で特別

顧問に迎えられることも少なくなかった。そうしたこと、各国の魔法院、魔法院と神殿の情報、賢者たちの象牙の塔を介して交換される機能を果たしていた。

なので、魔法院や神殿の一部のものしか知らないことを賢者が知っていてもおかしくはなかった。

「しかし、旅の賢者となれば、それほどおられません……」

賢者の魔法を使うことは難しく、それを実戦レベルで使用できるとなると、かなり稀有な存在で多くはなかった。

「疾風の勇者ワローックの相棒、旋風のエリザベス。それがこのベス婆さんなんだよ」

「旋風のエリザベス！」

ランスロットたちはその名を聞いて、驚きの声を上げた。

疾風の勇者といえば、何十年前に活躍した勇者として、今も各地に武勇伝が語り継がれている有名な勇者であった。そして、その相棒として登場する女賢者、疾風のエリザベスといえば、実力はもちろんのこと、各地の王族からプロポーズされるほどの美貌の持ち主で、疾風の勇者とのロマンスは今の乙女たちにも人気のある話である。

「昔の話じゃよ」

ベス婆は苦い笑いを浮かべて遠い目をした。

ランスロットたちは伝説の人物を目の前にして言葉を失ったというよりも、時間という魔法は何よりも脅威であると再認識していた。「ふんっ。言いたいことはわかつとる。じゃが、いつかはお前さんもこうなるのじゃよ」

腹立ち紛れにクリームの頭を杖で叩きながらむくれて見せた。その様子にエミリアは少しかわいらしさを感じて、笑みを漏らした。

「ともかく、ベス婆さん、ありがとう。俺たち、必ず強くなって帰ってきます。それまで、ゴルディのことをよろしく頼みます」

ランスロットたちは気を取り直してベス婆と村長たちに頭を下げて、出発の準備を始めた。

「あ……」

エミリアはその様子に、何かを言いかけて口をつぐんだ。

「ゴルディを助けるため、自分も連れて行って欲しい」

そう口にしたかったが、お世話になった村が大変なのを放っておいて出て行くのは気が引けるし、何よりもランスロットたちにも迷惑になるように思えて、口をつぐんだ。

迷っていると、いつの間にかベス婆が彼女の前にやってきた。

「さて、エミリア。家に戻るぞ。これからすることが沢山あるんじゃないからな」

ベス婆はエミリアにそういうと、自分の家へと戻っていった。彼女も後ろ髪を引かれながらも、その後を追いかけるしかなかった。

家に戻ると、ベス婆は物入れから背負い袋を取り出して、その口を広げた。そして、手際よく袋の中に野営するときには毛布代わりになる旅行用外套、携帯食料や火起こしの道具などを詰め始めた。それは、まるであらかじめ準備していたかのようにであった。

「あの……ベス婆ちゃん？」

エミリアは戸惑いながらベス婆に声をかけた。村を出て行くという話は聞いていない。第一、村を再建する要の一人であるベス婆がいなくなれば大事になる。

「なあに。ちょっと、エミリアに取ってきて欲しい薬草があるんじゃない」

ベス婆はエミリアに薬草のリストを書いた紙を投げて渡した。そこに並べられている薬草はエミリアも教えられていたが、この周辺では採取されないものばかりである。

「あの、これ……」

戸惑うエミリアにベス婆は荷造りの手を止めずにしゃべり始めた。「おぬしはワシの若い頃にそっくりじゃ、顔はワシの方が美人だったかの。誰かに背中を押してもらわないとなかなか前に進もうとせん」

そこで、初めてベス婆はエミリアを見て、優しげな笑みを浮かべ

た。

「自分の人生は自分が一番したいことをするのに使うべきじゃ」
エミリアが少し感激してベス婆を見つめていると、柄にでもないことを言ったとばかりに顔を隠すように一番奥の戸棚の方へと歩いていった。

「ワシもあの時、ワーロックを押し倒していればのう……」

「ベス婆ちゃん……」

照れ隠しか、本気か、判断のつかない独り言をもらすベス婆に思わずエミリアは苦笑を浮かべた。

そして、ベス婆は戸棚の奥から隠していたのだろう、本を二冊取り出して、彼女の前に積み上げた。エミリアはその二冊の本のタイトルを口に出して読んでみた。

「神聖魔法総覧抄訳初版……賢者魔法便覧改定二版……どうしてこれを？」

魔法に関わる二冊を受け取ってエミリアは混乱した。魔法を使えるのを知っているのは昨日の戦いで一緒にいたランスロットたちか、戦いを覗き見していただろうベネットぐらいである。

「エミリア。おぬし、本当はゴルディの姪ではないじゃろ？」

「えっ、そ、それは……」

ベス婆は「何でもお見通し」と意味ありげな笑みを浮かべ、何か手紙を書き始めた。

「隠さんでもええ。大方、森にいけにえとして捧げられた蛮族の巫女なんじゃろ？ 森で魔物か何かに襲われているところをゴルディに助けられたといったところかの？」

おおよそ合っている推測にエミリアは黙ってうなずいた。自分が異世界から来たというのはあまりに突飛であるために言うべきではないし、それは今、この話には関係ないと考えた。

「蛮族は部族に戻って導師に教えを請わぬ限り、新しい魔法を習得することもできん。神殿も魔法院も蛮族に魔法を教えてくれはしないのは知っておるじゃろ？」

エミリアは初耳ではあったが、話の腰を折りたくないため、それも黙って頷いた。

「じゃが、生贄に捧げられたおぬしは部族に帰ることは無理じゃ。そこで、ここに行くがよい」

ベスは書き上げた手紙を封蝋で封印すると住所らしきメモと一緒にエミリアに手渡した。

「裏稼業のやつじゃが、信用はできるし、腕も確かじゃ。おぬしは神聖魔法の正当呪文を変則なしで唱えているようじゃから、ここで問題なく刻んでくれるじゃろ。もし違っても、そやつに任せればちやんとやってくれる」

蛮族の呪紋は一般的に刺青であり、それを施術できる裏家業の間をベスは紹介したのだが、エミリアは呪紋のことを知らなかったため、ベスの言っている意味が半分も理解できなかった。しかし、とりあえず、そのメモの場所に行けばわかるだろうと黙ってメモを受け取った。

エミリアは受け取った本と手紙を背負い袋に詰め込むと、ベスが衣装箱から魔法使い用の装備を取り出した。

「ワシが若いときの装備じゃ。年代ものじゃが、今のものにも遜色ない逸品じゃ」

紫色の少し短めのワンピースに白のフリルとレースが配置してあり、腰のあたりに大きなリボンがついている、かなりかわいいデザインであった。しかも、ひざ下までの編み上げロングブーツと、これまた大きなリボンのついたベレー帽がセットになっている。

「……かなり、かわいいんですけど……」

その装備を見て、エミリアは顔を引きつらせた。

「当たり前じゃ。美少女と誉れ高いワシがつけていたのじゃぞ。かわいくなってどうする」

ベス婆は一緒にしまっていた、現役当時の絵姿をエミリアに見せた。

「うっ……」

今の姿とは似ても似つかぬ、アイドル級に可愛い女の子がそこには描かれていた。絵姿なので誇張されていたかも知れない事を差し引いても、かなりかわいかったことは想像できる。

「確かに、ワシのかわいさ、美しさには及ばないと尻込みするのはよくわかる。だが、おぬしも捨てたものではないぞ。及ばないまでもワシに迫るかわいさじゃ。きっと似合うから安心せい」

「うう……」

女の子の体に慣れてきたとはいえ、今着ている民族衣装はスカートのようになっているが、下にはズボンをはいているので、それほど抵抗はなかった。しかし、こうも女の子した服を着るのはかなり抵抗があった。

「こういう服を着ていると敵も油断するのじゃ。ほれ、早くせんとランスロットたちが行ってしまうぞ。一人で旅したいのなら構わんがの」

「あう……着ます。着させていただきます」

エミリアは時間がないことを思い出し、顔を真っ赤にしながらかわい装備を身につけた。

「ほうっ。予想以上に似合っておるな。ふむ、さすがはワシの弟子じゃ」

「うう、恥ずかしいなあ」

スカートのひらひらするのを抑えながらエミリアの顔はうつむいて真っ赤なままであった。

「二年後、戻ってきたら、みっちり薬師の修行をさせてやるから、がんばってやってみるのじゃな。戻ってくるのを待っておるぞ、エミリア」

ベス婆は優しく微笑んでエミリアの肩を激励するように軽く叩いた。修行の旅に出る以上は命の危険もある。魔物などを相手に各地を転戦したベス婆にはそれをいやというほど知っていた。

「ベス婆ちゃんも元気で」

エミリアはベス婆の言葉の真意を汲んで、赤くなるのを止めて真

面目な顔で応えた。

「今よりもっと元気になっておるぞ。おっと、そうじゃ、武器を渡すのを忘れておった。……あつた。これじゃ、これ」

ベス婆が取り出したのは、パステルカラーと原色を組み合わせた、非常に派手な短い杖で、エミリアの世界風に表現すると、「魔法少女のバトン」であった。

「それは遠慮します。猛烈に遠慮します！　ゴルディさんの杖があるから大丈夫です。それじゃあ、ランスロットさんたちに追いつかなくなるので、行ってきます！」

エミリアは両手を振って、バトンを全力拒否して、ゴルディの杖を手を取った。そして、別れの挨拶もそこそこに家を飛び出していた。

「なんじゃ。せっかく強力な武器じゃというのに……」

ベス婆は手に持ったバトンを持ちながら、残念そうに呟いた。それから、少しとおしくそのバトンを見つめた。

「しかし、懐かしいのう。この杖を持って、ワーロック殿と各地の悪や魔物と戦ったものじゃ」

しみじみ昔を懐かしみ、若かりしころのことを思い出していた。

「世に害なす毒虫たち！　この世の平和を守るため、我らが疾風旋風でその命、華麗に吹き散らす。――旋風のエリザベス、ここに参上！」

懐かしさも手伝って、何十年ぶりに前口上をポーズつきで決めたところに、運悪く村長が村の再建の相談でやってきて、扉を開いたところで石化していた。

「あ……い、今のことは全力全速完全無欠で忘れるのじゃ！」

ベス婆はバトンで思いっきり村長をぶちのめし、口封じを完了した。

「ううっ。なんで私がこんな目に……」

村長は地べたにへばりついて、その頭上には不幸の星が瞬いていた。

エミリアが村の出口まで向かう途中、村の再建にあわただしく動き出した村の人たちに手短に出立の挨拶を回った。

あまり、挨拶に時間を取られると本当にランスロットたちに追いつけなくなるので、特に親しい数軒だけにして、他のみんなによるしく言っておいてくれるようにお願いしていた。

ほとんどのものは、エミリアがそうすることはわかっていたらしく、「頑張れよ」「無茶しちゃダメよ」「達者でな」「辛くなったら帰っておいで」など温かい言葉で送り出してくれた。

そうして、村の出口までやってくると、その門柱のところに一人の少年が立っていた。

「ベネット君……」

彼の顔には思いつきり殴られた痣がついていた。昨晚の勝手な行動を父親に叱られたことは容易に想像できた。

「行くのかよ？」

ベネットは短くエミリアに訊いた。その言葉には彼女を引き止めるような響きが漂っていて、それに少し心を揺らされるように感じた。

そこではじめて、ここまで誰もが背中を押してくれるような言葉ばかりであったことに気が付いた。そして、誰かに背中を押してもらうだけでなく、自分でちゃんと決めて、歩いていかなくてはいけないことにも気が付いた。

「うん。僕、何もできないかもしれないけど、何もしないで後悔はしたくないから」

エミリアはまっすぐ強くベネットを見て答えた。

「そっか……お前、勇氣あるな」

ベネットはエミリアの回答に少しうつむいて表情を隠した。

「そんな！ 全然勇氣とかはないよ。昨日だって、恐くて震えてて、すごく長い間、助けにいけないままじっとしてたんだ。飛び出した時も、無我夢中だったんだ。今思い出すと、震えてきちゃうぐらい

なんだよ」

エミリアはそれが嘘でない証拠にベネットに手を見せた。確かに、かすかに震えていた。

「だから、勇気があるんだよ」

だが、それを見て、ベネットは怒るように呟いた。

「ベネット君？」

「じいちゃんが言ってた。本当の勇気ってのは、恐いと思いながらも進むのが勇気だって。だから、お前は勇気があるんだよ！」

ベネットは少し目に涙を溜めながらエミリアに怒鳴ると、自分の服の襟を結んでいる組み紐を外した。そして、それを握ってエミリアの方に突き出した。

「これ。持ってけ」

お世辞にも上手く編めていない、おそらくはベネットが自分で編んだものだろう組み紐を前にエミリアは硬直した。

これは、この地方ではプロポーズに当たる行為である。

「え、あ、その……僕たち、まだ子供で、こういうのは……まだ、早いと思うんだけど……」

エミリアはしどろもどろになって上手く断る方法を考えた。この世界では早ければ十四で結婚する娘もいたが、さすがに十歳で結婚など庶民ではありえなかった。

「勘違いするなよ！ 俺はお前なんか、全然好きじゃないんだからな。これは、お前に預けるだけだ。二年後に必ず帰ってきて、返せよ」

おろおろするエミリアにベネットが怒るように言いながら、更に組み紐を握る手を突き出した。

「ベネット君……」

「お前が返さなかったら、俺が結婚できなくなるんだからな。いいか？ 絶対に帰ってきて返せよ。それまで、死んだりするんじゃないぞ！ 約束だぞ！ 約束破ったら、ひどいんだからな！」

ベネットは怒りながらも、目には涙が溢れてきて、声も泣き声に

なっていた。エミリアはそれをみて、微笑を浮かべて、その組み紐を受け取った。

そして、ベネットの持っている小刀を借りて、自分の髪の一房を切って、柄尻の鉄環にそれを結びつけた。

「その髪が預かり書だよ。なくさないでね。きっと、ベネット君にこの紐を返すから」

「別に、返すときは、別の組み紐でも……」

ベネットは少し赤くなりながら、口の中でなにやら呟いた。

「ん？ 何か言った？」

耳がいい割にはこういうときには聞き逃す便利な耳のエミリアが怪訝な顔でベネットの顔を覗き込んだ。

「なんでもねーよ！ さっさと行けよ！ 追いつけなくなってもしらねーぞ。それで、戻ってきたら、思いっきり一生笑ってやるからな」

ベネットは真っ赤になってエミリアに怒鳴った。エミリアもそれを言われて、ランスロットたちの後を追うのに急いでいることを思い出した。

「うん。じゃあ、行ってくるね、ベネット君」

「ああ、必ず帰ってこいよ。ここは、お前の村なんだから！」

駆け出すエミリアにベネットが大声で送り出した。

「ありがとう。きっと帰ってくるから！」

エミリアは「帰ってくる」というのを強調して手を振ると、森の道に消えていった。

「約束だから……」

ベネットはエミリアが消えた後もその道をじっと見つめて、何かの区切りをつけたように踵を返して、再建であわただしい村の中へと駆け戻っていった。

鳥が飛び立ったはずみで小枝が揺れて、葉に溜まった雨水が弾かれて小さな雨を降らせた。穏やかな風に乗り、聞こえてくる鳥のさ

えずりや木々の葉がこすれあう音が周囲に満ちていた。

お世辞にも整備されたといえない街道は昨日の雨でぬかるみ、あちらこちらに水溜りをつくり、空の青さを映していた。

「やっぱり来ないんじゃないか？」

「そうね。こんな危険な旅についてこないわよね、普通」

普段であれば、もっと先に行っているはずのランスロットたちは村からさほど離れていないところを物見遊山するかのようにゆっくり歩いていた。

「そうだな。私の思い違いだったようだ。すまない」

ドガは深いため息を一つ吐いてランスロットに頭を下げた。

「別にかまわねえよ。俺も半分、追いかけてくるように思っていたからな」

ランスロットは自分も勘が外れたと苦笑を浮かべた。

「あーあ、エミリアちゃんが加わってくれたら、あたしも女の子同士で楽しくおしゃべりできると期待したんだけどなあ」

クリームも残念と口を尖らせてみせた。

「でも、おかげで紅一点の地位を維持できたじゃないか。よかったな」

「紅一点ならもっと大事にしてよ」

ランスロットの言葉にクリームはますます口を尖らせた。

「そいつは無理だ。俺にとって、クリームはお姫様より戦友だからな」

「うー、なんだか複雑な気分」

信頼されているのは嬉しいが、女の子扱いされていないのは悲しいと微妙な表情を浮かべていた。

「さあ、私たちに残された時間は少ない。いつまでもこうしているわけにはいかないな。先を急ごうか」

ドガが放って置くといつまでも続きそうじゃれあいを中断し、歩き出そうとした。

「そうだな。よし！ それじゃあ、先ずは折れた剣の代わりを手

入れないとな。ここからだ……表街道に出て、王都サルタノがいだらう」

ランスロットは頭の中の地図を広げ、ノズングランド王国王都を口にした。

「ああ、あそこならいい剣が揃っているだろう。私の剣も見てもらわなければいけないしな」

ドガは背中に背負った大剣をちらりと見た。先ほどの戦いで酷使しすぎていることは感じており、硬い敵と戦えばすぐに折れてしまいうだろうと予想していた。

「薬もマジックアイテムも全部使っちゃったしね」

クリームは普段は薬を入れている袋をひっくり返して、中に何も入っていないことを二人に見せた。

「それはクリーム、お前が後先考えずに使うからだろうが」

「そんな事いったって、使わないともったいないじゃない。ランスロットはケチりすぎなの」

いつもの痴話げんかにドガは肩をすくめた。

「喧嘩なら歩きながらでもできる。野宿するにも今日中に森を抜けておくのが安全だ」

再び先を急がせたドガにクリームが手で制した。怪訝な表情をしている彼の耳に道の向こうから誰かが呼んでいる声が聞こえた。

「あたしたちの喧嘩もまんざら無駄でもなかったみたいね」

クリームが片目をつぶってにこりと笑った。

「ランスロットさーん！ クリームさーん！ ドガさーん！ 待ってー」

エミリアが一生懸命ぬかるんだ道を駆けてきていた。やっと追いついたエミリアはずっと走りづめだったが、息もそれほど切れていなかった。ただ、追いつけたことへの安堵の息が漏れていた。

「どうした、エミリア？ 何か用事か？」

ランスロットが意地悪そうにニヤニヤしながら彼女に問いかけた。
「うっ……」

「どうした？ 用がないのなら行くぞ」

言葉に詰まっているエミリアにドガが冷たく言い放った。少し唇を噛んだが、すぐに意を決してた。もし、村の入り口でベネットに会っていなかったら、もっと時間がかかって、置いていかれたかもしれない。

エミリアはベネットに心の中で感謝しつつ、ランスロットにまっすぐ向き合った。

「……ぼ、僕も一緒に連れて行ってください。お願いします」

九十度に頭を下げて、そのままの姿勢で返事を待った。その様子を見て、三人はお互いに顔を見合わせた。

「エミリアちゃん。この旅は危険な旅よ。二年間でラプラスを倒すほど強くならなくちゃいけないから、あたしたちは無茶なくちゃいけないの」

クリームの言葉にエミリアは顔を上げて不安そうな眼差しを彼女に向けた。

「私たちについてくるには、それ相応の覚悟が必要だ。旅の途中で死んでしまうかもしれない。その覚悟があるか？」

ドガの言葉にエミリアは言葉を詰まらせた。

「どうするかはエミリアが決める。エミリアの命を何に賭けるかはエミリアにしか決められない。さあ、どうする？」

ランスロットが至極真面目な顔をして、エミリアの目をじっと見た。

エミリアは一度目を閉じた。まさか自分が命を賭ける選択をしなければならぬとは、記憶がないとは言え、現代日本の高校生でそんな選択をすることなどなかっただろうと変に感慨深いものを感じていた。

同時に昨日の夜のラプラスとの戦い、この世界に來たあの日の出来事を思い出すと、彼らの言葉が一切の誇張もないことも感じていた。これはゲームでなく、本当の命をかけた冒険の旅なのだと思えて認識させられた。

だが、エミリアの心は既に決まっていた。

「死ぬのは嫌だし、魔物も恐い。だけど、ゴルディさんに置いていかれた時みたいにもやもやするのも嫌だ。だから、死なないようにがんばる。それで、強くなってゴルディさんを助ける。だから、僕も一緒に連れて行ってください。お願いします」

エミリアはもう一度、頭を下げた。

「わかった」

ランスロットの声に顔を上げると、満面の笑みを浮かべた彼の顔がそこにあった。

「よかったわね、エミリアちゃん」

クリームが手をとって嬉しそうに、その手を上下に振った。

「よろしくな、エミリア」

ドガがそれまでの厳しい顔を緩めて穏やかな笑みを浮かべて、クリームが握っている手に手を重ねた。ランスロットもその上に手を乗せた。

「よし。これで、新生ランスロット旅隊誕生だ。よろしくな、エミリア」

「はい！ よろしくお願いします」

四人の笑い声が静かな田舎の森にこだました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9305u/>

神嫁英雄物語【改訂版】

2011年9月29日03時15分発行